
虚偽楽園

ぶっきら忘

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虚偽楽園

【Nコード】

N2280R

【作者名】

ぶつきら忘

【あらすじ】

——『名無しの森』の深奥に『天国』と呼ばれる場所がある。

それは名もなき大陸に流れた、何十年前の噂話だった。名もなき大陸の中央にある名無しの森。その森の中央には天国と呼ばれる、願えば何でも叶う場所があると。

その噂は現在までも語り継がれ、何人もの旅人が天国へと旅立っていった。ある者は財宝を望んで。ある者は安住の地を求めて。ある者は世界の真理を求めて。

そして、誰一人帰らなかった……

ある者は天国にたどり着いたのだと言う。またある者は天国にたどり着く前に力尽きたのだと言う。だが、真実は誰にもわからない。だから、誰も知らないのだった。

——『天国』の前に、一軒の宿があることを。

これはその宿の主とそこに住まう少女の物語である……

プロローグ

（プロローグ）

宵闇に浮かぶのは真円の月。道というべき道などない、静まり返る森の奥。フクロウさえ鳴かぬ凍りついた空気は、風が流れてもずつと残り続けていた。虫の羽音も聞こえない。ふくろろの鳴く声もない。自分の息さえも、音にならない。

音さえないのではないかと、そう思えるほどの沈黙が痛くて。青年は、『楽園』への『試練』の前に立つ彼らへと囁いた。

「本当に……行くんですか」

かすれた、すぐるような声に彼らは——夫婦は微笑むだけだった。微笑んで、首を縦に振って。そう肯定する。それが辛くて、青年は感情を押し殺すように目を伏せた。地面を見るために——だが、見えたのは少女だった。青年の手の中で、毛布に包まれて、年端もいかぬ少女が眠っている。

呼吸は浅く、顔は赤みを帯び、滲んだ汗が少女を濡らしていた。ひどく苦しそうで……だから、少女は残された。たった一人、仲間はずれ。青年はその事実、痛みを堪えるように目を閉じた。

そんな青年に、男は笑う。

これでよいのだと、そう言い聞かせるように。

「娘を頼む……私たちは、行かねばならない」

村のためにも。そう言つて男は背後を見た。女もそれを追うように振り向く。視線の先にあるのは、森の深奥への道だった。そこに広がっていたのは砂の海——与えられた『試練』という名の。

森の中央部に、あつてはならないものがそこにある。

存在してはならない光景に、夫婦は挑むような視線を向けていた。わかつている。この二人が『楽園』を求めて——『楽園』に『望み』を叶えにやってきたのは。それを止められないのもわかつてい

る。

『楽園』に、流行病に蝕まれた村を救う薬を求めていることも。彼らから聞いた話だった。

……それでも青年は、すぐるように囁くしかなかった。

「なら……何故、この子を連れてきたのですか」

思い直してくれるのではないかと。そう、ありもしない答えにすがるように。

娘を使って付け込めば、思いとどまってくれるのではないかと、そう醜い打算をしながら。

だが返ってきた答えは、苦虫を噛み潰すような声だった。

「この子に『天国』を……君の言う『楽園』を、見せてあげたかった」

上げた視線の先、夫婦は振り向かない。表情が見えない答えは、不安でも焦燥でもなく、間抜けな感想を抱かせた。

懺悔のようだ。それが失敗だったのだと、そう言っているように。

それが失敗であるはずはないのに、何も言えなくて……青年は、また逃げるように目を伏せた。

止められない。その無力感にただ震えるしかない。何度も何度も味わってきた喪失感に、青年はただ無言で耐える。

男の声が、優しく耳に届く。

「君にしか、託せない」

病気で連れて行けない娘を。彼らの大事な大事な娘を。手の中にある、命の温もりを。

その重さを理解しているからこそ、青年は問うしかなかった。

「……何故、私をそこまで信じるのですか」

自分は決して善良な者ではない。自分は決して彼らの思っているような者ではないのだ。

何人も何十人も何百人も何千人も見殺しにしているのに。

善人の要素なんて、どこにもないのに。

「君は信用できる」

答えは、苦笑めいた微笑だった。たったそれだけの、短い一言。

「私は……信用されていい人間なんかじゃない」

青年は、それを嘲るように、否定した。

だが、男もまた否定するために首を振った。否定して、自分たちの傍らに立つ小さな家を——小さな宿を見上げて、呟いた。

「君の宿での働きぶりを見ていた。誰かのために真剣になる君を見ていたと言ってもいい……私にとっては、それだけで信用に足る」

「演技かも、知れませんよ」

否定に意味なんてない。それでも否定した。理由なんてない。それでも否定しなければならぬ何かがあった。

青年の言葉に、男は苦笑を漏らした。それがどんな意味を持っていたのかはわからない。視線を宿から下ろして、男は青年を見て。

「言い換えよう」

ただ、小さく断言した。

「……君を信じている」

そう笑った男を見るのが辛くて、青年は泣きそうになるのを堪えて空を見上げた。

反則だ。そう言われたのでは、もう何も言える言葉がなくなってしまう。

何を言っても、もう届かない。

「安心したまえ。これでも私は人を見る目があるつもりだ。だから、私は安心して君に娘を預けられる」

歩き出す砂の音が、辺りに響いた。慌てて視線を下ろすと、もう夫婦はこちらに背を向けていた。砂漠へと——『試練』へと、足を踏み入れる。

吹き荒れた風が砂塵を舞い上げ、二人の姿を消していく。

消えていく。その間際、確かに男の声が聞こえた。

叫ぶ声の力強さが、彼の残した最後の記憶。

「では、また会おう。帰って一段落ついたら……」

そこから先は、もう聞き取れなかった。砂塵は容赦なく彼らを飲み込み、足跡の痕跡さえも消していく。

彼らの姿ももうない。残されたのは――遺されたのは、自分と一人の少女だけ。泣いてしまいそうな自分と、苦しそうな少女だけ。手の中で、少女が小さく声をあげた。

「……泣いてるの？」

それには答えない。黙り込んだまま固く唇をかみ締めて、青年は砂塵を睨んでいた。

永遠とも思えるほどの数分の間、ずっと。

そして消えた背中に、青年は今更のように呟いた。

「……さようなら」

もう、会うこともないだろうと。

1 天使の止まり木

1 天使の止まり木

「……う、ううん」

寒い。

体に乗っかる重さのない布団に包まりながら、酩酊した意識で寒さを理解する。布団の温もりを奪う寒さに起こされるようにして、少女は震えながら目を開けた。

髪が長い……というか、長すぎる少女だ。大体腰の辺りくらいまで艶やかな髪が伸びている。歳は十二歳かそこらで、顔つきは一言に歳相応か、それ以上に幼い。身長が低く、ぼやけた印象を与える大きめの瞳がその要因だろう。

「眠い……」

大きな目を眠気のためにこすりながら、彼女は布団の中で身じろぎした。寝ぼけた思考は昨日の天候を思い出す。確か昨日は晴れのち雨、『試練』は『熱帯雨林』……考えてから顔をしかめた。暑くはなっても寒くなる天候ではない。

だが、そんなことは少女にとってはどうでもいい事だった。窓から差し込む光が既に朝を告げているが、昨日はアスターのせいで忙しかった。今日は仕返しとしてストライキすると決めているのだ。

全てはアスターが悪い。この寒さもきつとアスターが馬鹿したせいだ。だから寝る。無理やりこじつけて目を閉じる。亀よろしく布団にもぐりながら、グッバイ朝日と意識を落とす。

……が、それもすぐに諦めた。口早にうめく。

「ダメ。寒すぎ。無理。これ人が眠れる温度じゃない」

吐く息が白く霞む。身を切るような寒さとはこういうものをいうのだろう。着ているパジャマは薄着で、布団も軽く保温性はほとんどない。このままだと風邪を引きそうだ……まあ、嫌がらせとして

風邪を引くのもありなのかもしれないが。

仕方なく彼女は布団からもぞもぞと這い出て、たつぷり時間をかけて彼女は立ち上がった。

部屋はそんなに広くないが、私物も少ないので不満もない。ごたごたしていないのはいいことだと、少女はアスターを思い浮かべてうんうんと頷いた。彼の部屋は部屋でなく倉庫だ。自分で言っ自分で頷く。

「ん……んん！……はあ」

一つ、大きく伸びをする。寒さは相変わらずだが、眠気はほとんど吹き飛んだ。凝り気味の肩をほぐしつつ、重い足取りで窓へと近づく。

自分の一日はここから始まるのだ——朝一番の新鮮な空気を肺にたつぷり取り込んで、一日の活力とする。実際はただの深呼吸に過ぎないのだが、これをやると一日の気分が引き締まるのだ。

ここに来てからの八年間、一日欠かさずやってきた習慣というやつである。

そういうわけで目を閉じて肺の息を空にして、窓を開け放ち。

(……………へ?)

目を点にした後。

「……………!?!」

彼女は、声にならない悲鳴を上げた。

窓の外は、見たこともない世界になっていた。

アスター——ストケシアの朝は遅い。

目覚めは昼食の少し前というのがいつもである。これは八年間一緒に暮らしてきたクロツカス——クロから言わせればありえないことらしい。だが、アスターは生まれてこのかた朝が苦手だった。病気とか低血圧だとか、そういうのでなく性格的に。

布団にもぐっているのは髪が少々長い、整った顔立ちの青年である。身長は普通より高め。線は細く、筋肉は必要最低限を残してほとんど付いていない。ひよろりとした印象はあまりないが、十人中九人に『優男』と言われるくらいにはたくましくない。

そんな優男が、布団の中でため息をついた。

朝は嫌いだ。本当に。生まれてから今まで、好きになれたためしがない。

朝のさわやかさがなんとも駄目なのだ。こう、なんというかこう……昔の知り合いが笑顔でランニングしてそうな、子犬を連れてキヤッキヤウフフしてそうな、そんな黄色い雰囲気が漂っていて。実際そんなことはまずないので、あくまで雰囲気だが。

だから、アスターの朝は遅い。目覚めてたとしても、遅いことに代わりはない。

「……寒いですね」

吐く息が白いことを確認して、彼はただ事実だけを呟いた。というか、それ以上言うこともない。

昨日の今日でこうも温度をひっくり返されるということは、また新しく旅人がやってきたということだろう。昨日の旅人は熱帯雨林にピッタリの野蛮な少年だった。ということは、今日はこの寒さが似合う美人だろうか。それとも無血漢……

と。

「……おや？」

不意に部屋の外——廊下からドタドタと慌ただしく走る音が聞こえてきたことに、彼は思わず首を捻った。昨日は部屋の片づけを手伝わせたせいで、クロはお冠だったはずである。今日はストライキとか言って寝ているだろうと踏んだのだが。

（予想が外れましたね……まあ、どうせ食事でしょう）

寒いから暖かいものを食べよう、とは、かつて『試練』が『嵐』で宿が半壊した日にクロが言った言葉である。そしてその通りに——何が何でも——実行するのがクロである。食べ物に関しては一家

言あるらしく、だから今日の寒さに辟易して、何か温まるものを作りに行ってもおかしくはない。

が、アスターはきっぱりと告げた。

「私には関係ありません」

寝ます。

そう宣言して、アスターは布団を抱擁した——あるいはされたのか。確かに空気は寒いが、布団と密着してれば寒さもある程度なら我慢できる。

温もりはすぐに眠気と呼び、眠気はガンガン羊さんと呼んでくる。
……が。

「あ、アス、アアス、アスター、アスター！」

羊以外にガンガン何かが呼んでいた。

部屋の扉を壊すほどの勢いで、音の暴力が繰り広げられる。オマケか嫌がらせか、慌てた声まで聞こえてきた。

「大変な大変なの一大事なの！ 早く！ 寝ててもいいから起きて！ 起きてなくてもいいから早く！！」

「……どうしろと？」

寝てるのに起きてたら夢遊病者ではないか。

とりあえず、ぼやく。わけのわからないことを言っているのはともかく、これは昨日の復讐だろうかと思う。ストライキでなく嫌がらせを選んだ辺りに成長が窺えた。素直にまったく嬉しくない。

確かに有効ではある——朝が好きなクロとは違うのだ。寒いだけならまだしも、これは辛い。

ぼんやりと、扉が壊れるのとクロが疲れるののどちらが先かを考える。軋む音は、一秒ごとに嫌な音色に変わっていつているようだった。

結論。扉危険。だが動くこともせず、アスターは声を張り上げた。

「……何か用ですかー？」

ドン！——などと一番大きな音の後、ノックの連打が消える。今のが返答だったのだろうかと思をかしげるより早く、慌てた声は

扉を蹴破るようにしてやってきた。

実際、クロは扉を蹴破って部屋の中に入ってきたようだったが。

「大変なのアスター!!!」

我が家に鍵はないので、本当はノックなどしなくても入れるのである。一大事というわりに律儀なのが、緊迫感を殺している。だからというわけでもないが、いつもどおりにアスターは呆れ声を上げてクロを見た。

「何なんですか？ いったい」

扉を叩きつかれたのか、ぜえぜえとクロは肩で息をしていた。長い髪はところどころ妙な方向に跳ねている。どうやら寝起きだったらしい。

案の定大慌ての表情で長い髪を振り乱して、クロは唾を飛ばしながら叫んだ。

「空気が凍っちゃったの!!」

……とりあえず、目をぱちくりさせて見る。至って大真面目に、そう叫んだようだ。

「……………」

「……………」

「……………アレ？」

真面目な顔のまま、クロは首を捻る。その後すぐにいぶかしむようにこちらを見てくる。反応がなかったのが不満だったのだろうか。彼女の目は、真剣に『一大事なんだよ?』と語ってきている。

「……………」クロ。一つお教えしますが」

痛々しい沈黙を破るように、アスターはゆっくりと呟いた。

「……………」これを、空気が凍ると言います」

「そういうボケいらないから!!」

「ボケではないのですが」

「いいから窓の外見て、窓!!」

一蹴して、クロはビシッと音を立てそうな勢いで窓を指差す。釈然としないまま、アスターは指示に従って凍り付いて外の見えない

窓を開いた。

「……………」

一面銀世界。微かな風に光の煌き——ダイヤモンドダストが見える、清々しいまでに嫌な朝だった。

「ほらほら、外凍ってるでしょ？ 空気が凍ってるでしょ？ これ問題だよね！？ 一大事だよね！？」

背後からは喜んでるのか慌ててるのかわからない声。

それにため息をつきつつ。

「クロ、もう一つお教えしましょう」

「？」

「アレは雪です……昔にもあったでしょう？」

暗鬱たる気分で、彼はそう呟いた。

「……………」

クロは『何それ？』という感じで首をかしげる。そのまま数秒悩むように天井を見上げる……が、んん？ とまた首を捻っていた。どうやらわからないらしい。

その反応で、ふと思いつく。

「ああ、そういえば……あの時貴方はまだいませんでしたね」

彼女が来たのは八年前だ。なら仕方ない。苦笑めいた微笑を浮かべて、アスターは告げた。

「これが『雪原』の『試練』ですよ」

彼女は、雪が初めてなのだ。

——『名無しの森』の深奥に『天国』と呼ばれる場所がある。

何十年前のことだったか——それはもう誰も覚えていないが。かつて、そんな噂が流れた。誰が言ったのかも、誰に言ったのかもわからない噂だ。

名もなき大陸の、いたる町や村でその噂が流れた。

大陸の中央には『名無しの森』と呼ばれる森があり、その森の中央に、なんでも望みを叶えてくれる場所があると。

それから程なくして、何人もの旅人が生まれた。町や村、森や集落。そんな場所から、誰もが『天国』を目指して。

ある者は財宝を望んで。ある者は安住の地を求めて。ある者は世界の真理を求めて。

全ての者が、何かを願って旅立って……そして誰も帰らなかった。神の与えた『試練』に食われたのだと人は言う。『天国』にたどり着いたからこそ帰ってこないのだと人はいう。旅を諦め、別の安息の地を見つけたのだとも。

だが、真実はわからない。答えを告げる者はいない。

夢だけが、延々と一人歩きをしたかのように。噂だけがずっと残り続けて。

求める者は、それでも消えない。

帰る者も、誰一人いない。

だから誰も知らないのだった。

——『天国』の前に、一軒の宿があることを。

「うっ、寒い……」

倉庫から引つ張り出てきた防寒着に身を包んで、クロは体を振るわせた。かつて雪山から来たという旅人からもらった、民族衣装めいた服だ。衣装にフードはない。服にすっぽりと身を包んで、時折不思議そうに地面の雪を蹴っては、何を感じているのか何度も感嘆の息を漏らす。ちなみに髪は邪魔なのか、ざくばらんに後ろで束ねられていた。

温度は氷点下。息さえ凍りついたように白く、風にたなびいて消えていく。目の前にある幻想は銀世界。十年に一度の光景だから、アスターの目にも新鮮に映る。

名無しの森の深奥、『天国』。そう言われる場所を囲うように、不思議な土地が広がっている。名無しの森はそれらを囲うように生い茂っているに過ぎず、森は侵入者を阻む迷路のようなものだった。ある日は海原、ある日は火山。ある日は嵐の密林、ある日は無風の砂漠。ある日は霧の迷路、ある日は明かりなき闇の一本道。連日連夜環境が変動する、様々な生態系が一日で象られ、一日で代わっていく土地。

新たに生まれ変わるのではなく、何かに対応して切り替わる土地。『天国』を囲う不思議な土地……それが神の与えた『試練』と言われるものだ。

今日は『雪原』。それを暗鬱な気分で認めて、アスターはため息のように愚痴を吐いた。

「……これじゃあ、食料はなさそうですね」

まだ食料は残っているが、そう多いわけでもない。自給自足の生活を送る以上、『天国』の種類は彼らの生活に直結する問題だった。だけならまだしも天気は晴れ。ダイヤモンドダストがキラキラしていて、本当にさわやかな朝だった。

基本的に陰気な性格をしていると自負している自分からすれば、この朝はいただけない。本当にいただけない。気分が滅入りそうだが、クロは逆に元気になりそうだが。

そのクロがアスターの服の袖を引っ張る。視線を降ろすと、疑わしげな表情が見えた。左手の中には雪。

「アスター……これ、本当に水なの？」

「水ですよ。というか氷ですけどね」

そう答えると、『ふうん』とクロは納得したようになていないような、曖昧な声を上げた。空から降ってくるものは雨であり水であると決め付けているクロからすれば、確かに納得できないことではあるのかもしれない。

「……にしても、空気が凍った、ですか」

思い出して苦笑する。なるほど、何も知らない子供からすればこ

の光景はそう見えるわけか。

「む」

その苦笑に何か思うことがあったのか——馬鹿にされたと思ったのかもしれない——クロは唇をへの字に曲げた。

「べーだ。どうせあたしは何も知らない小娘ですよーだ」

「いやいや、いいじゃないですか。銀世界を見て空気が凍ったとは……その、なんというか……詩的で」

「取ってつけたようなフォローするな！」

怒られた。まあ確かに適当なフォローだったので、否定はしないが。怒るクロを尻目に、アスターはため息交じりに思案した。寒さとか雪とかクロとか……あと、宿とかお客とか。考えてから、背後を見やる。

そこにあるのは、大して大きくない横長な木造建築物だ。『試練』と森の境界線を目の前に、ポツンと一軒建っている。昔ここに来る前に泊まった事のある宿を参考にして作られているため、部屋の数もそれなりにある。

こちらの視線を追って、クロも建物を見た。いつの間にかは気づかなかったが、もう怒ってはいないようだ。

ただ顔をしかめながら、ポツリと呟いてくる。

「……屋根の雪、どうしょつか」

三センチかそこら、うつすらと積もっている。雪下ろしをしろと言っているのだろうか。雪を知らなかったにしてはしっかりしてるが、アスターはそれに対して肩をすくめた。

「潰れそうなほど積もってませんし、後回しにしましょう」

「……後回しにして潰れちゃっても知らないからね」

「その時は仲良くぺっちゃんこです。知らないも何もありませんよ」
「うわ、出たよ。中途半端なりアリスト」

恨みがましい声に苦笑しながら、軽く自分の腹を撫でる。よくよく考えたら朝食を食べていない。

「それよりクロ。ご飯にしましょう。よろしく」

朝だというのに叩き起こされて、寒さに辟易したのだ。その上空腹まで強要されるのはいただけない。クロの目もそれに同意するような色を見せた。

のだが、それも一瞬。不意にクロの目に意地悪な色がよぎる。

「あ、そうだった」

何を思い出したのかそう呟いたクロは、ツンと澄ました顔で一言言い放ったのだった。

「ストライキしまーす」

「……………は？」

一瞬ポカンとする。何を言ってるんですか——そう言おうとするよりも、してやったりと言いたげにクロの唇が釣りあがるほうが早かった。そのまま回れ右して玄関へとすたすた歩いてく。

背中しか見えなかったが、揺れる長い髪が何故か『当然でしょ？』と言っているように、楽しげに揺れていた。いや、事実言ったのかもしれない。

どちらにしろ、アスターには関係のないことだった。

——面白くない。

何かいろいろと面白くない。確かに自分にも原因があるのだろうが、致命的なまでにいろいろと面白くない。無理やり起こされて勝手に騒がれて結果がこれである。

面白くない。

「……………ふむ」

判断と同時に、アスターは地面の雪をそつとすくった。そして軽く円形になるように固める。ひんやりとした手触りに、思わず顔をしかめる。雪は面白いくらいに綺麗に丸まった。その硬さを確かめてから、彼はクロの背中に視線を向けた。

よほど気分がいいのか、肩が弾んでいる。鼻歌でも聞こえてきそうなくらいだった。

それにほくそえみながら。

「えい」

雪玉を、投げてみた。放物線を描く程度に軽く。放たれた白の魔弾は吸い込まれるようにクロへと迫り……

「っ、つめっ！」

ベチャリと、クロの長い髪を巻き込んで首にヒット。突然の衝撃と寒さに、その背中がビクリと大きく揺れた。叫びは途中で噛み締められたように途絶える。

「……………」

それからしばし、無言。

沈黙は威圧するように温度を下げた。振り向かない背中は、小刻みにプルプルと震えている。

心地よい嵐の前の静けさ、というやつだった。

そして嵐を呼び込むために、嫌味たらしく一言。

「……………」 おや、また空気が凍りましたね」

ビクリと。一際不自然な震えを最後に、クロはひどく落ち着いた声で——歪んだ笑声を抑えるような声で、囁いた。

「……ねえ、アスター」

「何でしょう？」

嵐召喚完了。

そう内心で笑うが、声には出さない。振り向かないままのクロに先んじて、アスターはまた雪をすくった。

クロの口から漏れるのは、触れれば冷たさに火傷するような、そんな冷たい熱を含んだ声だった。

「……何したのかな、今」

「いや、宣戦布告を」

「……………」

「雪合戦って、一人じゃできませんし？」

それまでだった。むんずと、クロも足元の雪をすくう。ぎ、ぎときつく固めるような音だけが耳に響く……

振り向きざま、クロは腹の底から叫んでいた。

「アスターの……ばかああああああ!!」

叫びと共に、白の砲弾が飛ぶ——
それが開戦の合図だった。

——それから三時間くらい、ぶっ通しで雪合戦に興じることになるのだが。

その終わりの存外呆気ないものだった。

「……何やってんのよ、あんたたち」

「いや、久しぶりの雪でハッスルしてたところですが」

「馬鹿を懲らしめようとしたところですが」

突然のそんな声に、適当に応える。その旅人は呆れたようだったが。

「まあ、何も言わないけど……ここ、宿？」

旅人の来訪に、アスターとクロは顔を見合わせ。

「「ようこそ。旅の最後の休息場……宿『天使の止まり木』亭へ」
いつものように、微笑んだ。

——訪れたのは、雪のような肌をした、細身の女だった。

実際に大きい宿というわけではない——自分たちの住む家である宿を改めて見て、アスターは心の底からそう思った。実際、こじんまりとしているような気さえする。

玄関の目と鼻の先に、六人前くらいの食事を広げられそうなテーブルが置いてある。旅人はとかく腹を空かせがちで、それを考慮して玄関とダイニングは近い。その奥はカウンターキッチンとなっており、右には長い廊下と貸し部屋。部屋にシャワーはないが、風呂ならある。近くに水源があるためだった。

テーブルの上には、ポツンと花瓶。そこに一輪、藤色の花が生け

られている。

「……ふうん？ 意外に作りはしっかりしてるのね」

そう呟いたのは、件の旅人である。玄関の辺りで床を何度か力を込めて踏んでいる——どうやら、床が抜け落ちないか確かめているらしい。が、抜けるどころか軋みなどの不快な音は聞こえてこない。それに驚いたようだ。

「頑丈なんですよ。何度も何度もぶっ壊れてますから、知識はつくわけで」

壁にはめ込まれたような石造りの暖炉に薪をくべながら、アスタ―はのんびりとそう言った。いくら『試練』の外とはいえ、嵐や火山が噴火した岩石の脅威がないわけではない。ひどい時には新築一カ月後にまた壊滅、なんてこともある。

そういう時は諦めるしかないんですよーなどと告げると、彼女は露骨に不安を顔に浮かべた。

「……不安になるようなこと言わないでよ」

「大丈夫ですって、壊れはしませんよ……そう簡単には。まあ、どうしようもない時は本当にどうにもなりません」

「だから、そういうことを言わないでってば」

今度は不満で顔をしかめる。それをからかうように微笑みながら、アスターは改めて彼女を見た。

整った柳眉に、綺麗に通っている鼻梁。今は呆れに歪んでいるが大きく、だが切り込まれたように鋭利な瞳はアイスブルー。灰のように白い髪。シュツと引き締まった輪郭は、可愛いという評価には結びつきそうにない。肌色は雪のように白く、長身痩躯で、受ける印象はちよっときつめの美人といったところか。服装は動きやすそうなズボンにコート。

肩には大きめのナツプザックがぶら下がっている。視線は自然とそちらのほうに向かっていた。

と、その視線に気づいて彼女が声を上げる。視線には何やら警戒のようなものがあつた。

「ここ、実は盗賊のアジトだったりしないわよね？」

「いいえまったく。何故そんなことを？」

「貴方の目つきがいやらしかったから。追い剥ぎとかしてそうだなーと思って」

「……………そりやまたどーも」

それ以上返す言葉も見つからず、視線を暖炉に戻す。

この場にクロがいなくて良かった——いたら、絶対にご飯を作ってもらえなくなる。こと女性に妙な目をする、クロは何故かへそを曲げるのだ。理由を追求しようにも、結局返ってくる答えは『馬鹿アスター』であることが多い。この前も似たようなことがあったから、内心は冷汗まみれだった。

そのクロだが、今は貸し部屋の準備中である。布団とベッドシーツを敷いたり、最近作って見た薪ストーブで部屋の温度を暖めたり。小さな気遣いはクロのほうに向いているので、自分はこうして大雑把に暖炉に薪をくべているわけだ。

と、また背後から声。

「冗談よ」

からかいのような声に振り向くと、彼女は案の定いたずらっ子のように微笑んでいた。

「さっきの仕返しよ。無駄に不安がらせること言った仕返し」

「……………性悪ですね」

「あら、人生なんて意地悪なくらいが面白いものよ？」

平然とそう言う彼女にため息をつく、彼女はクスクスと笑う。

それがひとしきり終わる頃には、彼女は笑みを薄めて、感心したように呟いた。

「にしても、宿があるなんてね……聞いたこともなかったわ」

鬱陶しげにナップザックを降ろして息を吐く。耳にタコができるくらい言われた言葉だ。だから慣習として、アスターは事務的に訊ねた。

「意外でしたか？」

「意外も何も」

当然でしょと言わんばかりに彼女は肩をすくめる。この反応もいつもどおりだ。どの旅人も、意外だと言う。

「まあ、仕方ないんですけどね」

ため息混じりに、アスターは玄関の隣の窓を見た。外では相変わらず雪がキラキラと光を反射している。が、舞い上がった雪のせいで、その先は見えない。

「誰もが『楽園』……ああ、失礼。『天国』を目指してやって来ますからね。この宿が旅の終着点ってわけじゃありませんし……そもそも、この宿の噂を広めてくれるようなリピーターもいませんしね」

眩しさに目を細めながら飛び出た言葉は、やっぱり感情の乗らないものだ。彼女にばれないよう内心で苦笑する——リピーターなどもとよりこれっぽっちも期待していない。

だが彼女は内心を見抜くように目を細める。

「……何故？」

その問いに、彼はどう答えようか迷う。理由がないからではなく……どういえば納得してくれるか、言葉に迷ったのだ。

その間に、彼女は疑問を続けていく。

「いい宿ならリピーターもいるでしょう？ まだ私にはよくわからないけど、雰囲気は悪くなさそうだし……ああ、そういえば、いい看板娘もいるわね」

「……看板娘、ですか？」

からかわれたのだろうか。反芻するように呟くと、彼女は「わかってないわね」とまた肩をすくめた。

「でもこんなところに宿を構えるくらいなんだから、客はいっぱい来るんでしょう？ ならリピーターくらいいいそうじゃない」

「前半分は否定しませんけどね」

その言葉にアスターは、今度こそ苦笑するのを止められなかった。本当に苦笑だ。苦々しいものを堪えるには、笑うしかない。言葉

を迷った甲斐もなく、決まりきったような言葉を吐くしかなかった。
窓の外——雪に隠されて見えない『楽園』を睨んで。

「ここに泊まる人が、いったいどういう人なのか……考えればわかると思いますよ」

「……クイズ？」

いぶかしむ——というよりは、楽しむように彼女。苦笑を微笑みに変えて、アスターは囁いた。

「正解したら、宿代はチャラでいいですよ？」

「残念、お金は持っていないの……というかここ、お金使う場所あるの？」

「あー、そういえば他のところではそういうシステムでしたっけ」

ここでの生活にお金——金貨や銀貨、銅貨の類は必要ない。自給自足で満ち足りた生活を送れる森の生活に、自治区のルールはいらないのだ。だから時々そういうことを忘れそうになる。クロに至っては『お金？ 何それ？』と言いかねない。

「まあ、この場における宿代というのは……『天国』に持っていけない道具とか、生活に役立ちそうな知識とかですね」

「ふうん……」

気の抜けた声で彼女は応じる。実際『試練』の都合で道具（例えば防寒着）を置いていく人も多い。自給自足に頼らねばならない身としては、道具はお金以上の価値を持つのである。

と、彼女はナップザックから何かを取り出してくる——乳白色の液体の入った小瓶。それを見せびらかすように、彼女は言ってきた。「麻薬ならあるけど？ 見たい夢が見れる、『マイ・ドリーム』って名前の」

「……受け取ったら私、とんでもなくダメ人間じゃないですか」

「……違うの？」

彼女は悪びれもせず問いかけてくる。からかいなのか本心なのか、本気でわからない。仕方がないから、アスターはため息をついてお茶を濁した。

それから少し沈黙があつて。小瓶をしまつてから、彼女は唐突に
呟いてきた。

「……ああ、そういえば」

「はい？」

「名前、聞いてなかったわね」

今更である。が、彼女はそうは思わなかったらしい。

数秒思案して、彼女はポツリと呟いた。

「私は……そうね。クリスマス・ローズ。ローズでいいわ」

聞いてから、思わずギョツとする。聞き覚えのある名前だった。

「……本名で？」

さすがにそれはないだろう——自分でそう思うのもどうかと思う
が。確認の問いに、案の定彼女は想像通りの回答を返してきた。

「まさか。普通に偽名よ。それで、貴方は？」

「アスター」ストケシア。アスターでもストケシアでも、どちらで
もご自由にどうぞ」

気後れもなく答える。そしてある意味予想通りに、彼女は面白が
るように訊ねてきた。

「……偽名？」

アスターは困ったように笑うしかなかった。

「まさか。私の名前はこれ一つですよ」

と、ちょうどその時だった。

「部屋の準備終わりましたー。旅人さん、どうぞー！」

クロの元気な声が聞こえてきた。廊下のほうを見ると、ダイニン
グに一番近い部屋の扉が開いている。そこからぴよこりとクロが顔
を出していた。さして待ち疲れた様子もなく、ローズは片手を上げ
てクロに応じ、歩き出す。それを見送りながら、アスターは誰にも
ばれないようにため息をついた。

その間に、クロとローズの会話が聞こえてくる……

「この後すぐお昼ご飯作りますけど。旅人さんはどうします？」

「ん……そうね。ただこうかしら」

「お肉とかのほうって大丈夫ですか？ 宗教上の理由とかで、そういうの食べれないとか」

「問題ないわ……というか、本当に細かいところまで気をつけてるのね」

それを聞きながら、アスターは思う。

クリスマス・ローズは花の名前だ。冬に咲き、春に散る、そんな花。

どうでも良い事だったから、アスターは欠伸をして、それからのんびりと呟いた。

「……そういえば、叩き起こされたんでしたね」

運動したこともあつてか、若干体もだるい。クロには悪いが、ローズのことは彼女に任せよう。女同士で会話も弾むだろうし。

「寝ます」

また宣言して、自分の部屋へと戻る。

夢は見るだろうか、ふと取りとめもなくそう思った。

「……」

何度が目をしばたかせる。明かりのない、暗い部屋だ。いつもどおりの自分の部屋——どうやら、夜らしい。

相変わらず『試練』は雪原のようで、風はないが冷え込みがひどい。吐いた息はやっぱ白く辺りを濁らせた。染み入るような静けさは、既にクロとローズが眠ったことを示しているのだろう。

どうでもいいことをひとしきり考えてから——右手で顔を隠すように覆って、アスターは長いため息をつく。汗でもかいたのか、押さえた手のひらにじんわりと中途半端な湿気が付着した。それに苦笑するように、一人笑う。

「……まさか、本当に夢を見るとは」

くそつたれた夢だった。心の底から本当にそう思う。見てしまっ

た光景があまりにも都合の良すぎることに、アスターは羞恥と共に自嘲した。

とどのつまり……あの光景が、自分の心の奥底に秘められている願望なのだと。

（叶うはずもない夢を見るのは……どうしてなんでしょうね？）

自問してから、目を閉じる。眠るまでに答えが見つければ幸いだ。見つからなかったとしても、明日になればきっとその問いを忘れている。だから、今は眠ってしまおう。

「……………」

……ただ、時間だけが過ぎていく。どうやら、夢は睡魔を根こそぎ奪い去ってしまったらしい。

答えは見つからず、眠ることもできず。寒さにも辟易しつつ、アスターはため息の代わりに布団からずるずると抜け出した。

こういう時は、夜風に当たるに限る。

独りで、静かに『楽園』を見据えながら。

新雪に足跡を残していく。この足跡がなくなるのはいつ頃になるだろうと、ふとそんなことを考える。真っ白な雪は、『試練』とそうでない森との境界を無視して辺りに降り積もっていた。一面の銀世界。雲ひとつない夜空に輝いているのは、笑っているような下弦の三日月。

風はない。ただ静かな冷たさだけがある。呼吸の音さえ消えてしまふような静けさ——それに苦笑しながら、アスターは呟いた。辺りには誰もいない……

「……明るいですね。意外と」

だが、返ってきた声が一つ。

「そつよ。雪は光を反射するもの……晴れた雪の日は、綺麗なものよ?。」

その声は宿のほうから聞こえてきた。声にはどうでもよさそうな気だるさが含まれている。振り向くことはせず、アスターは目の前の光景にもう一度目をやった。

遮る物のない、雪原だけが広がる『試練』。月光や星光を爛々と反射する雪が、辺りを淡く照らしている。黒によく似た闇はどこにもなかった。

だから、今日はよく見えた。

歩く音——雪を踏みしめる特有の音が途絶える。視線を少しだけ動かすと、隣にローズの姿があった。肩にあのナップザックを背負っている。

彼女はただ、無表情のまま『試練』を見ている。

いや……そこでアスターは首を振った。彼女は『試練』を見ていない。

その先を見ているのだ。その先にあるものを。

彼女は、恐る恐るといった感じでポツリと呟いた。

「……アレが？」

声とは裏腹に、顔に表情はない。感情を殺しているのか、それとも本当に何も感じていないのか——それは定かではなかったが。

彼女の言葉を追うように、アスターは『試練』の先を見た。

遙か遠く、そこには塔のように立ち込める霧の姿。普通の霧のように全体に満遍なく広がっているのではなく、何かを守るように中心に集まっている……まるで、竜巻のように。

その場所を睨むように見据えて、アスターは無感動に答えた。

「ええ。アレが『楽園』……皆が求める『天国』です」

誰もが欲のために求めて、誰一人帰らなかったといわれる場所。辿りついたのかどうかさえわからない。死体は『試練』に飲まれて消えていく。だから死体も見つからない。

秘境は魔境だ。誰も知らない土地ゆえに、誰がどこに消えたのかもわからない。『試練』が何人の命を飲み込んで姿を変えたのかさえも。

「あそこが……『天国』」

また、ポツリとローズが呟く。表情はなく、感情もない。声は無色で、ただ事実を確認しただけのようだった。

口を閉ざした瞬間、沈黙は辺りを雪崩のように包み込んでいく。微かな息の音だけが、今ある音の全てだった。何もかもが、凍り付いて死に絶えたように静まり返っている。

十数分かそこら経ってからだろう。

ただずっと立ち尽くしていた、その時間が終わりを告げたのは。

「故郷がね。冬しかないような雪山だったの」

吐いた息のオマケのように、彼女はそう囁いた。消え入りそうな小さな声で。隣を見やると、やはりローズは無表情のままだった。

彼女はこちらを見てなどいない。それでも言葉をこちらに向けたまま、彼女は続ける。

「食料もあんまりなくてね。凍りつきそうな寒さと、鋭い刃のような雪と氷だけがあった。あそこにはいたのは何年だったかしらね……十六年だったかな。人生の大半をね、そんな何も無い場所で過ごしたの」

それに何の意味があるのかはわからない。だが、アスターは何も言わずにそれを聞き続けた。

それが、宿の主人の役目だから。

「それから先は……まあ、ひとえに言えば家出ね。山さえ下りれば四季があるって知ってたのに。食料だっていっぱいある場所に行けたのに……何でか、私の家族は嫌がってね。今にして思えば、育った土地に愛着があったんでしょね。私にはなかったわ」

と、唐突に彼女はアスターを見た。その顔にはからかいめいた微笑が浮かんでいる。

「……ねえ。冬は好き？」

だが、その目は笑ってなどいない。真剣な問いだった。彼は、曖昧にぼかした答えを告げた。

「……まあ、どちらかといえば」

どちらとも取れる答えだ。それに気づいて彼女は苦笑する。苦笑したまま、独白するように呟いた。

「私は……そうね。好きなかもしれない。嫌いだと思ってたのはあの頃だけで、今はそうとも思っていないみたい」

そして唐突に、その苦笑を無表情へと変えた。視線をアスターから目の前へ向ける——今度は『天国』ではなく『試練』を見て。

やはり気だるそうな声で、彼女は囁いた。

「冬は死の季節よ……いろんなものが、寒さに飲まれて死んでいく。花も虫も動物も……人間もね」

最後に含みを持たせて、彼女はこちらを見る。だが、アスターはそれを肯定しない。

「違いますよ……超えられないものが死ぬ季節です。何もかも死に絶えるわけじゃない」

「細かいわね、貴方」

「同居人がうるさいですから」

揶揄するような声に、アスターは肩をすくめる。実際確かに細かい発言だ。だが思うことがあったのか、ローズはすぐに首を振って自分の意見を否定した。

「だけど……そうね。超えられるものにとっては……死ぬことなんて、ないものね」

そう呟いた彼女の瞳は、どこか自嘲めいたものを浮かべていた。過去に何かあったのだろう——その程度に考えて、アスターはそれを聞くことはしなかった。

それも数秒。自嘲をさらに嘲るように、くすりと彼女は笑う。アスターに視線が戻ってくる頃には、その笑みも姿を消していた。そしてどうでもよさそうに、ポツリと呟いてくる。

「『天国』に似てると思わない？」

「……『天国』に？」

聞き間違いではないだろう。繰り返すと、彼女はこくりと頷いた。「『試練』を超えられなければ、『天国』に辿りつくことはできな

い。冬を越えられなければ、春を迎えることはできない……ほらね？」

似てるでしょう、と。

そしてつまらなそうに、彼女は囁いた。

「残酷よね。神様って」

「……でしょうね」

短い同意で返す。それ以外に何も言葉が思いつかない。

彼女はその意味——超えられない者には死を与えること——で呟いたのだろうが。苦笑にも自嘲にも、あるいは絶望にもよく似た表情で、アスターはそれを肯定した。

神は残酷だ。真の意味でそれに気づいているのは自分だけだが。

「貴方は、何を求めて『楽園』……『天国』へ？」

浮かべた表情を隠すために問いかける。彼女が旅立つ前に聞かねばならなかった問いだ。

訊ねられるとは思っていなかったのかもしれない。彼女は一瞬だけキョトンと瞬きをして、それから元の無表情で言った。

「別に。私は何も求めてないわ」

「……何も？」

「だって、私にあるのは目的なもの」

あっさりと告げて。数秒考え込んでから、彼女は肩のナップザックを地面に下ろした。そして中へと手を伸ばす。ガサゴソと、そんな音だけが耳に残る。何かを探しているようだった。

「……これよ」

そう言っただけで彼女が取り出したのは、一つの小さな小箱だった。放り投げてきたそれを受け取る。彼女は視線で中を見ると語っていた。無言で、アスターはその箱を開く。

中に入っていたものは、灰色の砂。風にさらされれば消えてなくなってしまうそうな、細かい粒の集まり。

「……灰？」

何かが燃えて残ったもの。意味がわからずに呟くと、彼女はこれ

またあつさりと告げてきた。

「正確には、遺灰の一部ね」

一つため息をついて。それから彼女は思い出に浸るよう空を見上げた。

「家出したはいいけど、泊まるところがなくてね。空腹で倒れちゃって……その時私を拾ってくれた人。余命数万年って感じの、頑固で口うるさいばあさんだったわ……薬にも詳しい人だったから、風邪なんか問題ないだろうって思ってたのにね……冬の寒さで風邪こじらせて、この前死んじゃったわ。あの麻薬は、その形見ってわけ」
小箱の蓋を閉める。遺灰と聞いては投げることもできず、アスタ―は手渡しで彼女に箱を返した。『投げてもいいのに』と彼女は笑う。

ただその笑みは、照れ隠しによく似た笑みだった。

「まあ、その遺言でね。ここを出て旅をするなら、オマケでいいから『天国』に投げ込んでくれって言われたの。それだけの話よ」

「……そうですか」

「そう。それだけの話。義務はないけど、義理はあるから」

彼女は難儀そうにため息をついた。小箱をナップザックの中にしまつて、そのナップザックを背負う。どうやら、もう旅立つらしい。話はそれで終わりといわんばかりに、彼女は歩き出す。

止められないのはわかっている。だからアスターは何も言わなかった。

「ああ、そういえば」

と。ふとその足を止めて彼女は振り向いた。その瞳には好奇心のようなものが浮かんでいる。

「あのクイズの答え。お手上げよ。結局何なの？」

「クイズ……ああ、アレですか」

言われて思い出した。

何故客の多いこの宿が誰にも知られていないのか。
何故誰一人としてリピーターがいないのか。

……宿・天使の止まり木亭に泊まる人が、いったいどういう人なのか。

考えれば簡単だ。だから、アスターは笑って答えた。

寂しい笑顔だと、我ながらそう思いつつも。

「『楽園』を目指した人が、帰ってくると思いますか？」

誰も帰ってこないのだ。『試練』に飲まれたか、『楽園』に辿りついたか。そのどちらかしかない。

答えなど、ただそれだけだ。

「……ああ。そういうこと」

呟いた彼女に、頷いてみせる。納得したのならそれでいい。

だが、彼女はさらにその先まで見通していたようだった。

「だから貴方はアスター」ストケシアなのね……私と同じように花言葉に自分の意味を託しているから。だから彼女が名乗った時、アスターは驚いたのだ。

「貴方、意外にロマンチストよね」

「否定はしませんよ。名前のままですし」

肩をすくめて、アスターは笑う。受け取り方など人それぞれだ。ロマンチストと言われるとは思ってなかったが。だから笑ってしまった。

その笑みを消して、アスターは確認する。

「……本当に、何の欲もなく『天国』を目指しますか？」

彼女は笑う。

「珍しい？ 何も求めない旅人は」

「ええ。あそこは……根本だけを見るなら、欲のために向かう場所ですから」

帰ることなど考えてはいないのだから。

だが、彼女は違う。

「だったら、私が初のリピーターになるかもしれないわね」

彼女は帰ってくる。『楽園』に何も求めていないのだから。

……だから、かもしれない。

「……行くと、後悔しますよ」

気づけば、アスターはいらないことを口走っていた。彼女はその言葉にキョトンとする。

完璧な失言だったと気づいたのは、彼女が微笑んでからだった。

「心配ありがとう。だけど……大丈夫よ。私は帰ってくるもの」
それが終わり。

彼女は背を向けて、『試練』へと足を踏み入れる。雪を踏みしめる柔らかい音だけが、耳鳴りのように強く耳に残った。

雪原に、彼女の足跡が刻まれていく。雪以外何もない道を、彼女は歩いていく。

揺れるその背が消えるまで、アスターは何も言わなかった。

その背が消えても、何も言わなかった。

月が沈むまで立ち尽くして。そうして、ようやくアスターは口を開いた。

「……冬とは、似てませんよ」

あそこにあるのは『死』だけだから。

日が出るまで、まだあと数分の時間がある。明け始めた空を見上げて、アスターは呻くように囁いた。

「……神は、残酷だ」

こんなものを、作ったのだから。

「ふぬ……この！ くぬぬぬ……もう少し！」

正午前。太陽が雪原に反射される朝。宿の外に出てみると、大きくなった雪玉をゴロゴロ転がしているクロがいた。一心不乱に新雪に突撃しては、新雪を取り込んで大きくなる雪玉に辟易して叫んでいる。

右へゴロゴロ、左へゴロゴロ、前へゴロゴロ、後ろへゴロゴロ……
…行ったり来たりを繰り返して、雪玉は大きくなっていく。

「あ、アスター！ おはよう！」

その途中、クロがこちらに気づいて手を上げた。服装は昨日と同じ民族衣装に手袋。何か良い事でもあったのか、彼女はニコニコ笑顔で笑っていた。

が、当面の問題といえば、大きな雪球である。

「……クロ？ 何してるんです？ 昨日の雪合戦の続きですか？ まさかとは思いますが……それで殴る気ですか？」

ありえなくはない話である——持ち上げられるかはさておき。あれで殴られたら首が折れそうだ。意外に雪は固い。

が、違ったらしい。笑顔を怒り顔に変えて、クロは言う。

「違うよ！ リコリスさんから教えてもらった『雪だるま』だもん！！」

「……へ？」

わけがわからない。

雪の用途は雪合戦だけだと十年前の旅人は言っていたはずだが。ポカンとしてると、クロは『そんなこともわかんないの？』と鼻で笑ってきた。

昨日までは自分だって知らなかったくせに、とは思うが言わない。言ったらたぶん怒られる。

まあ、それはいい。雪の用途も地方によって違うということだろう。それよりも問題は。

「りこりす？ 誰です？」

今まで来た旅人は全員覚えてる。その中にリコリスなる人物がいなかったはずだ。またポカンとしてると、クロは今度は呆れたようだった。

「アスター……その歳で痴呆って辛いよ？ 特にあたしが」

「失礼な。私が痴呆になどなるわけがありません……で、誰です？」

「昨日の旅人さん……髪の毛の長い、いろじろびじん？」

しどろもどろ——というより、覚えてたの言葉を使う子供のよう
にクロは言うが。

ポカンというより、キョトンとした。それから呻く。

「……よりもよって、人によって名前変えますかあの人は」

それが本名なのか。それとも、やっぱり偽名なのか。きつと偽名だろう。確証はないが、何となくそう思った。

リコリス——彼岸花の花言葉は。

(………よく言ったものですね、本当に)

思い出して、目を閉じる。脳裏に浮かんだのは、昨日のあの人の揺れる背中だ。笑顔は……思い出せそうになかった。無表情しか浮かばない。

そんな彼女が、リコリスを名乗った。

笑いたくなった。悲しくはない。ただ、笑い出したかった。

ロマンチストはいつたいどちらなのかと、言ってやりたかった。

だが、表情はそうでもなかったらしい。

「……どしたのアスター？　なんか泣きそうだけど」

不自然な沈黙に顔をしかめて、クロが顔を覗き込んでくる。それに、何でもないとアスターは首を振った。それ以上追求されないように、アスターは話題を変える。

「それよりクロ。その『雪だるま』とやらはいつたい何なんです？」

「あ、そうだった」

それから数秒、クロは考え込む。何を考えているのかはわからないが、話題が変わったことにアスターは安堵した。その間に、ふと考える。

やはり、慣れないものだ。何年経っても、何十年経っても。別れに慣れないのかもしれない。ただ単に感傷に浸りやすい自分が原因なのかもしれない。

……まあ、仕方のないことだ。アスターⅡストケシアを名乗る以上、それは仕方がない。

慣れてしまえば忘れてしまいそうだから。これでいいのかもしれない。

つまらない思考を閉じると、クロも考え終えたのか見上げてくる。

「ねえ、アスター。教えてもいいけど……教えたら、手伝ってくれる？」

問いかけてはくるが、実際頷いてくれるとわかってるような口調だった。若干癪だが、今日はやることはない。時間は有り余っている。

「んー……まあ、内容によりますが」

「えー？ 絶対じゃなきゃだよ。じゃなきゃ教えないもん」

「……クロ。そうまでして私に何をやらせる気ですか」

胡散臭い匂いがした。が、クロは気にしてくれない。

「……ま、いつか。アスターならきっと手伝ってくれるし」

そう勝手に頷いて、クロは笑う。

そうして彼女と作ったのは。

雪玉の上に雪玉を乗せ、木の棒などで人に似せた——とても簡単で、素朴な雪像だった。

作り上げた、その時のクロの笑顔の傍らで、アスターは思う。

これは、いつか溶けてなくなってしまうものだ、と。

——その雪像は、いつか壊れてなくなってしまうものなのだと。自分たちの関係と、よく似ていた。だから、少しだけ自嘲した。そして最後に『彼女』を思った。

リコリスの花言葉。

「また、会う日を楽しみに……」

口の中で転がした言葉は、この上なく苦い味がした。

2 愛の行く末

2 愛の行く末

「……………うあー」

「……………」

「がうー……………あーうー」

「……………クロ。うるさい」

「いー……………」

何とかそれだけを口にするが、クロはただひたすらに呻き続けている。ダイニングのテーブルに突っ伏して、何かを耐えるようにひたすら。そのうちテーブルと同化するのではないか——それくらいのだらけっぷりである。対するアスターも似たようなものだったが、二人してテーブルに突っ伏して、寝ようとしているのかだらけたいのか、よくわからないままボケツとしている。二人ともパジャマだった。

とりあえず、どうしようもないくらい退屈だった。一年に一回の恒例イベント……………のようなものである。

宿泊客は当然のようにいないし、食料も最近の『試練』が『密林』だったので補充されている。朝食はもとより昼食ももう終わったし、食器洗いも済んでいる。が、夕飯の準備にはまだ早い。ようするに、暇。

ならまだしも。

「……………最悪う」

クロがポツリと漏らした通りだった。本当に最悪である。

突っ伏したまま二人同時に首を回して窓の外を見る……………何かが吹っ飛んでいった。天気よりも何よりも、真っ先に目についたのがそれである。その何かが動物のように見えたのは……………気のせいということにしておきたい。

空は曇天。『試練』は変わらず『密林』のまま。虫刺されがひどくなるのがこの試練の嫌いな理由なのだが……

「雨が降らないだけ、マシじゃないですか……」

「降ったらどうするのよ……」

「……その時こそ、最悪と呻いて晴れることを祈るのです」

「どうしようもないじゃん、それ……」

よりにもよって、『嵐』になっていた。場合によっては、宿が壊れそうなくらいの。

外に出たら、間違いなくクロは空を飛べるだろう。そのくらいの勢いで、風が宿に突進している。目下の悩みは、そのせいで聞こえてくる宿の軋みだった。

「……壊れはしないはずなんですけどね……」

「この前も聞いたよ、それ……」

「ぼやくと、クロもぼやいてくる。確かに言ったような気もする——が、去年は新築してからもう三年経っていたのだ。老朽化が問題視されてもいいくらいだ。一応『試練』から離れた場所に避難場所を作っているので、寝る場所には困らなかったが。

と、不意に衣擦れの音が聞こえてくる。

「……そういえば気になったんだけどさ——」

視線を向けると、クロが少しだけしゃっきりしてこちらを見ていた。といっても、顔だけ持ち上げているだけだったが。

「これって、いつ変わってるの？」

呟きながら、クロは窓の外を指差す。これとはどのつまり、『

試練』のことらしい。

「……いつ、ですか」

少し、困る。

『試練』は基本的に、『楽園』を目指す旅人に対応して変化するものだ。だから旅人が来たら姿を変えるものなのだが……実際、いつ変わってるのかと聞かれると、困る。恐らく誰もが眠っている夜なのだろうが、決まった時間に変わってるのかどうかはすぐ怪し

い。調べてみたこともあるにはあるのだが。

それを思い出して、アスターは頬をかいた。

……結果は本当に困ったものだった。

「いつ変わってるか、と言うとですね……」

「うんうん」

「……人が見てないとき、としか言えないんですね、アレ」
「……はい？」

何言ってるの？ 見たいな顔をされた。だが頭が痛いことに、それが事実なのだ。顔をしかめて、アスターは告げる。

「いえね、昔調べたんですよ。一日中ずーっと、ただぼけーっと『試練』を眺めるという方法で」

「……まあ、それなら見逃さないよね」

想像したのだろう、クロはそれに頷く。実際自分もそう思っていたのだ。

確かあの日は『火山』の日だった。飛んでくる灰と暑さに辟易としながら、一日中起きていた。見逃すことなどなかったといえる。その時の光景はよく覚えている。

だから、アスターはため息をついた。

「……まばたきしたら、変わってたんですよ」

しばし沈黙。その後、キョトンと、クロ。

「へ？」

予想通りの反応だった。それにまた息を吐いて、詳しい説明をする。

「いや、だから。夜遅くにですね。目が乾いたからパチリと一回、まばたきをしたわけです。さすがにまばたきしないなんて無理な話ですし。そしたらですよ」

火山が海原に化けやがったのである。灰も熱も跡形もなく。何もかもが一瞬で様変わりである。『そんな馬鹿な』などと発言したのは、後にも先にもあの時だけだった。

もちろん、その次の日も試した。今度はまばたきしないよう心が

けつつ。まあ、さすがにやっぱり無理だったわけで。で、一回。結果は散々である。それからもう諦めた。アレはそういうものなんだということ諦めた。

のだが……思い出からふと現実に帰還すると、クロのジト目と目が合った。

「……アスター」

「はい、何でしょう」

クロは、きっぱり一言切り捨てた。

「胡散臭い」

……案の定である。だから、言うことも選び終えていた。

「だったら、自分で確かめなさい。故人もよく常々こう言ったそうですしね」

「？」

「……『汝、人の言うことを聞くことなかれ』。何事も実践しろと言うことです」

「それ、受け取り方次第じゃただのわがままっ子じゃん」

解釈を間違えればその通りである。実際故人がこんなこと言ったのかも定かではない。だからアスターは適当に肩をすくめることにした——体制はそのまま。頬がテーパーと擦れて少し痛い。

それから数十分、風の音だけを聞く。うとうとと眠りそうになったのもその頃からだ。風の音に慣れたらしい。少しばかり喜びつつ、目を閉じる……

と。

「あ。そうだった」

藪から棒に、クロが短い呟きを漏らした。記憶は即座に過去を思い浮かべる。

クロが何かを思い浮かべた場合、何かしら悪いことが起こるような気がする。この前もそれでストライキするなどと言い始めたはずだ。拳句の果てに雪合戦。あの時は本当にひどい目にあった……

「ねえ、アスター……って、何耳塞いでんの」

「聞こえませんか聞こえません。私に耳はないのですだから塞いだと言っ言葉自体ありえませんか。だからそつとしておいてください」

「聞かないとご飯抜きね」

「何でしょう、クロ。私にできることなら何でもして見せましょう」

「……聞こえてるじゃん」

何のことですか？ ととぼけてみると、またクロはジト目でこちらを見てくる。が、それも一瞬だった。

期待に目を輝かせて——この時点で嫌な予感は何れまで膨れ上がっていた——クロは突っ伏してたテーブルから体を起こし、乗り出してくる。間近で顔を覗き込みながら、クロはこれまたきつぱりとお願ひしてきた。

「髪、切つてよ。さすがにこれもう長すぎだし」

言つてから、自分で自分の髪を撫でる。釣られてその手の行く先を見てると、腰の辺りで髪は終わった。邪魔だからなのか後ろで纏めてはあるが、うなじの辺りで止めてあるだけなのであまり意味はない。見方次第では、首から生えてる尾のようだった。

言われて思い出す。確か、前回髪を切ったのは一年位前だったよな気がする。クロ自身前髪はたびたび切っていたようだが、見えない場所を切るのは抵抗があるらしい。

まあ、確かに頃合いではあるのだろう。それを自覚しているのか、クロはニコニコ笑顔だ。

が。

「……………えー」

思いつきり露骨に顔をしかめて、アスターはぼやいた。クロの笑顔が一気に冷めていく。爽快だなあと眺めつつ、ぼやきは続く。

「……まだいいじゃないですか。そこまで伸びたんです。どうせなら膝裏の辺りまで伸ばしちやいなさい」

「やだよ！ 長い嫌いだもん！ 大体この前だつてお願いしたら『腰まで伸びたら』って言ったんだよ！？」

バンとテーブルを叩いて、クロは猛抗議開始。言われて記憶を揺

すってみると、確かにそんなことを言ったような気がした。

「……わかりました。前言撤回しろと仰るのですね？ いいでしょう。それでは膝裏まで伸びたら」

「ちがあああう！ 約束守れって言ってるの！」

「……………えー」

文句を言うと、またテーブルが叩かれる——今度は『バン！』ではなく『ズダン！』だった。叩くと言うより殴るだったようにも思えるが、気にすると心臓によろしくない。

「と言われましてもね……ほら、故人も常々仰ってましたし？」

「……………何をよ？」

「汝、人の言うことを」

「聞け！」

「……………え、ゴホッゴホ」

『えー』と言おうとして、咳をするふりしてやめた。今度はテーブルではなく顔を叩かれそうだったのだ。体制を変えずに視線だけ動かしてクロを見ると、いい笑顔だった。

完璧にお冠である——怒ってる時に笑顔になれるのは何故だろう。それがひどく不思議だったが、口にはしない。

……と。クロの笑顔が消える。お冠は終わったのかと見てみると、クロは何故か顔を赤らめて、もじもじしながら聞いてきた。

「アスターって……髪の毛の長いほうが、す、好きなの？ だから髪切ってくれないの？ だ、だったら……」

しおらしいと思うが、なぜ顔を赤らめてるのか理解できない。風邪というわけでもないだろう。特に理由は何も思いつかない。

だから最後まで聞かず、きっぱりと告げる。

「いえ？ 単にはさみが嫌いなだけです」

実際の髪の長さは似合ってさえいればどうでもよかったりする。クロの場合はまあ、もともとがそれなりなのでどんな髪形でも似合う。問題ははさみなのだ。

はさみ。あの形状がもうダメだ。鋭い刃が二本、物を挟んで切り

裂くための形を成している。切れ味のいいはさみなど最悪だ。触っただけでもズッパリ切れるのに、あの二本が同時にやってくると思うと……もうダメだ。想像するのもおぞましい。特に何かがあったわけでもないが、トラウマという奴である。カニはまだ許せるものの。

「アレ、言ってますでしたっけ？」

問いかけてみる。が、反応は返ってこない。まあ反応は期待してなかったもので、どうでもいいが。

——ピシリと。

「おや？」

ふと宿の軋みによく似た音が聞こえたような気がして、アスターは視線を適当に彷徨わせる。特に変わったものはない。風は相変わらずだが、まだこの宿は問題ないようだ。

最後にクロを見ると。

「……………」

「……………」 おや？」

能面だった。そう思うくらいの無表情。何度か遭遇したことのあ
る、すごく嫌な顔だった。

（あれ、マズりました？）

思うときにはもう遅い。ガタンと音を立てて、クロはイスから立ち上がる。よほど勢いがあったのか、想像以上に大きい音を立ててイスが倒れた。振動に思わず尻が跳ねる。

が、それよりもクロのほうの問題だった。

「アスターの……………」

能面が少しずつ火山の噴火よろしく真っ赤になっていくのは、爽快を通り越して後悔だった。まったくもって嬉しくない。急いで体を起こすが、時既に遅し。逃げる準備も間に合わない。

クロの体がゆらりと揺れたと思ったときには、もう彼女はテーブルを踏んで飛び出してきていた。そのフォームがトラを連想させる……などと考える頃には。

「アスターの……ばかあああああああ！！」

実際、トラのようにクロは襲い掛かってきていた。逃げようと思うよりも早く、クロの手が蛇のように首へと伸びてくる。立ち上がる頃には喉を絞められていた。手のひらで、ではなく下腕で喉を圧迫するやりかたで。背負われるような形で、クロは首を絞めてくる。

「ぢよ、ちよつど……グロ、ズドップ、ギブギブギブ！！」

「バカバカバカバカバカバカバカバカバカバカバカバカあ！！」

「グエツ……ぎ、がが、あ……！！」

何やら喉から出しちゃいけない声が出たような気もするが。

ばたりとテーブルに倒れこむと、ようやく肺に空気が入ってきた。背中からはぜえぜえと怒りの息切れの音。殺されるかと思ったが、何故殺されそうになったのかが理解できない。聞くべきだとは思うのだが、聞くに聞けない雰囲気だった。

ひとしきり肺に空気を取り込んで、クロは力強く叫んできた。

「絶対やつてもらうからね！」

「………はい、わかりました」

多大な敗北感を味わいながら、何とか頷く。ここで首を横に振ったら今度こそ殺されそうな気がして、アスターはぶるりと震えた。（八年前は優しい子だったのに……虫一匹殺せないような優しい子だったのに……）

思うが、言わない。プンプン怒りながらイスを起こして座るクロを見てると、とてもじゃないが言えたものじゃない。

「アスターのばーか」

そう何故かふてくされたように吐き捨てて、クロはテーブルに突っ伏す。何か言うべきなのだろうが、特に何もいうことを思いつかなかった。

それからしばらく、不自然な沈黙。

「……………！！」

「……………！！！！」

「……おや？」

風の中に、誰かの声が混じる。クロもどうやら聞いたらしく、ぴよぴよと小動物のように立ち上がる。耳を澄ますと、その二つの声が男女のものであることがわかった。こちらに近づいてきている――ということとは、今回の旅人ということだろう。

ようやく声が聞き取れるようになる。こちらを目指しているのは確定的だった。

「アッシュ、早くしろ――！」

「待ってくれって！ 僕は君ほど足が速くないんだ！」

聞こえてくるのは、女の叱責と男の懇願。クロのほうを見やると、新しい旅人の来訪に目を輝かせていた。女性はとかく暇つぶしのために本を持つてくることが多い。だからだろう。

それから数分後。ボタンと大きく音を立てて、その旅人たちは姿を現した。

「助かった……ようやく休める」

「勝手に民家に入るのは気が引けるが……」

人懐っこそうな線の細い――アスター以上の優男と、髪の短い気の強そうな女。歳はアスターと同じくらいだろう。二人とも砂にまみれたマントに身を包んでいる。女の腰には、使い古されてボロボロの柄をした剣がぶら下げられていた。男は荷物係なのか、肩に大きなリュックサックを背負っている。

そのリュックサックを下ろして、そのままリュックにすがりつくように男は座り込む。その一連の動作の締めとして、男は大きなため息をついた。

「……いやはや、本当に疲れるね。まさかここで天気が荒れるなんて思いもしなかった」

「鍛え方が足りん。この程度で根を上げるな」

それに苦笑するように、女は呟く。

疲労はないのか、女のほうはしっかりと立っている。が、どうにも二人とも、こちらに気づいていないようだった。だから彼らが気

づくまで、観察する——といっても数秒だけだったが。

結論。カップル。特にそういう素振りはないが、雰囲気的にそう判断した。

「……あれ？」

それと同じくらいのタイミングで、男が声を上げる。視線はこちらに向いている——どうやら、気づいたらしい。女もその声にあわせてこちらを見る。警戒のような色がその目によぎり、剣の柄に手が伸びるのを、アスターは何となく見ていた。そこで、結論を訂正する。

（お坊ちやまと……ボディガード？ の、カップル？）

まあ、間違っけていても問題はないだろう。そう適当に判断する頃、男は気まずそうに頬をかいて訊ねてきた。

「あー……えーと、ここって君たちの家？」

「まあ、家というか、宿ですけど」

答えたのはクロだ。が、それに顔をしかめたのは男ではなく女だった。

「宿ということは……すまない。お金は持ってないんだ。泊めてくれというのは無理か？」

慣れた反応だった。クロはそれに慌てて首を振る。

「ああ、いえ」

が、ふとアスターは考えた——これは都合がいいのではないか？

（……む？ おお？）

芋づる式である。問題解決の巧妙が見えたことに、アスターは顔に出さないように笑みを浮かべた。

だが、簡単にご破算にもなってしまう。まだ支障が出ないうちに、すぐさま行動に移さねばならない。

まずしなければならぬことは……

「お金は——むぐつ！？」

クロの口を塞ぐことだった。手を伸ばしてクロの口にあて、発言を止める。突然のことにクロは目を白黒させる。が、その隙にアス

ターはクロの背後に回り、さらに強く口を塞ぐ。

「むぐ——！！」

無視。そして商人のような曖昧な笑みを浮かべて、アスターは提案するように告げた。

「ああ……だったら、少し仕事をしてもらえませんか？ 実は今、困ってます……宿代はそれでけっこうですから」

「……仕事？」

「！？ むぐぐ！？」

普段ならそんなこと言わない。基本この宿はタダなのだ。だから思いつきりクロは驚いたようだが、口は塞がれたまま。さすがにここでそういうことを言われると計画が破綻してしまう。

喚くクロに不信な目を向けてから、男は困ったような表情を浮かべた。

「仕事の内容にも寄るけど、あまりに無茶なことだったら……」

「ああいえ、大丈夫大丈夫。さすがに大変なこと押し付けるわけじゃないですよ。むしろ、思いつきり簡単なことです。薪わりよりも簡単です」

それから一呼吸置いて。

我ながら名案だと思いながら、アスターはこれ以上ない笑顔で微笑んだ。

「はさみ、使えます？」

「……は？」

クロの髪切り、任せましょうか。

「へえ。二人で宿を……」

今日借りることになる部屋をぐるりと見回しながら、男は感心したように呟いた。どこの部屋とも大して変わらない、広いんだか狭いんだかよくわからない一室である。

ただ今日に限っては狭い。その理由に嘆息しながら、アスターは痛む腰をさするように抑えつつ答えた。

「ええ。たくさん旅人が来ますから、案外退屈しませんよ」

「あ、そうか。娯楽はなさそうだけど、暇つぶしはできるわけか。旅人で」

「……いやいや、人で暇つぶしって」

なかなか黒いことを言う。苦笑を浮かべると、男も微笑んだ。ちなみに今、クロと女はここにはいない。クロの部屋で髪を切っているのだ。女は女どうし、男は男どうし、というわけである。

だから、久しぶりにアスターが部屋の準備をすることになったのだが。

ベッドに飛び込むように腰を下ろした男を見ながら、アスターは呆れ声を漏らすしかなかった。

「……ベッド、普通は一部屋一つなんですけどね」

男の座ったベッドの隣に、もう一個ベッド。部屋の面積の二分の一をベッドが占拠しているのだ。そりゃ狭いわけである。わざわざ二人の要求に応じて別の部屋から持ってきたのだ。

目の前の男、曰く。

『最後の夜になるかもしれないしね。二人でいたいんだ』

それをどういう意味で言ったのかはわからないが——取り方次第では死ぬとも取れる——頭の痛い要求であったことに変わりはない。今では腰が痛いものの。

ジト目と呆れに気づいたのか、男は照れたように頭をかいて、

「まあね。僕ら、恋人だし？」

「……………いや、平然とそう告げられても」

とりあえず、頭が痛い。それ以上呟くことはせず、暗鬱にアスターは息を吐いた。

こういうタイプの旅人も珍しい——というのも、考えればわかる話ではあるが。恋人だと公言する二人を見ればわかるが、もう十分幸せなのだ。こっちが恥ずかしくなるくらい。だからわざわざ『楽

園』を目指す意味があるとも思えない。

「それで？ 何で貴方たちは『楽園』を求めるんです？」

訊ねると、男はふと疑問を浮かべたようだった。

「楽園？」

「……ああ、失敬。私がそう呼んでるだけです」

時々人があそこを『天国』と呼ぶのを忘れそうになる。間違えても普段は訂正するのだが、今回はその訂正も忘れていた。失敗といえば失敗だ。だからアスターはほんの少しだけ顔をしかめ、それを笑顔で隠蔽する。

が、男は気になつたらしい。不思議そうな顔で問いかけてくる。

「んー……何で？ 理由とかあったりするの？」

面白いものであればいいとでも言いたげに。

が、実際そんなものではない。アスターが『天国』を『楽園』と呼ぶのは、癖のようなものだ。理由もあるにはあるが……

(……まあ)

隠すほどのものでもない。胸中で呟いて、彼は嘆息した。

「ほら、死ぬときも『天国に逝く』って言うじゃないですか。旅人は『天国』を目指すなんて言いますけど、それだと死を目指すように聞こえて嫌いなんですよ」

淡々と告げる。数秒考えた後、納得したのか男はまた感心したように呟いた。

「ああ。だから『楽園』か」

「『天国』なんて、生きてる人が目指すものじゃないでしょう？」

冗談交じりにそう嘯くと、男は『違う』と肩をすくめて笑った。

『天国』を『楽園』と呼び始めたのは、宿を開業して一ヶ月も経たない内だった。求道者とも言うべき旅人たちの願いや欲望に触れてから。

飢えのない世界が欲しいと言った壮年がいた。子供を飢饉で亡くしたからだ。

平和なひと時が欲しいと言った犯罪者がいた。濡れ衣を着せられて脱獄してきたのだと。

悪のいない場所にいたいと言った女がいた。家族を殺人鬼に殺されたのだと。

誰もが幸せでいられる場所を知りたいと言った少年がいた。そう思った理由はなかったらしいが。

「今までいろんな人を見してきました。いろんな望みがありましたよ。馬鹿馬鹿しい夢から始まって、切ないくらい虚しい願い、語るのも愚かしいほど低俗な妄想……」

その誰もが『天国』を目指していた。

「いろんな人がいましたよ」
だけど。

「……彼らが望んだのは、『天国』じゃないんです」
誰もが『天国』に『楽園』を求めていたのだ。

たとえ結果が死だったとしても、死を求めていたわけではない……
「……ふうん？」

と。男の嘆息によく似た視線に気づいて、アスターはコホンと一つ咳払いをした。

「話を戻しましょうか。かなり脱線してますし」

「……ああ、僕らが『楽園』を目指す理由だっけ？」

頷くと、男は困ったように窓を見た。その先にある『楽園』は、今は乱立する木々の緑によって隠されている。

その先に思いを馳せて、男は囁いた。

「そのままさ」

「そのまま？」

たったそれだけ。その意味がわからずにアスターは繰り返す。すると男は窓から振り向いて、陰のある表情で微笑んだ。

「僕らは、僕らの『楽園』を求めている……二人でいても問題のない場所をね」

そこから笑顔だけを消して、男は続ける。

「実を言うと、僕らの旅は夜逃げなんだ。親に結婚を反対されてね……親は僕に、後を継いで欲しかったらしい」

「後？」

「そ。後さ……小さな村でね。村長の子は村長にならなきゃいけないっていうめんどくさい風習のある村さ。古臭い村だったよ……子供のことば、全部親が決めるんだ。結婚だって自由じゃない」

それから、重苦しくため息をついた。

「グレーとは幼馴染でね……彼女、村長の用心棒の娘でさ。歳が近かったから、僕の遊び相手に選ばれた。いつも一緒にいたから、これから先もそうなると思ってたんだ……この歳になるまで、それを信じて止まなかった」

だけど、認められなかった。

山奥の村などにはよくある話だ。ガチガチに固まったままの古い慣習。そうすれば成功するとされ、強制的に選ばされる、ある種の決められた道。何もない田舎にはありがちのことだ。

「村長になったら、親に無理やり結婚させられるんだ。望まない人とな。それが村のためになるとか何とか言ってさ」

そういう村があることも知っていたから、アスターは意外には思わない。

彼は無表情のまま、それでも苛立ちを隠さずに呟き続ける。

「僕は自分の身分が嫌いだ。たかが村長の息子、それだけで僕の人生活が決まるのは許せなかった。だけどそれよりも何よりも、身分違いの恋だったってさ。彼女、泣いて言っただ。それが何よりも許せなかった。アレは痛かったな」

だから逃げ出したんだと、そう彼は笑った。

「……まあ、それからしばらくは村の人が追いかけてきたよ。ここで振り切ったのかも、正直言えば覚えてない。まだ追っかけてるのかもね。何であんなに必死に追いかけてくるのか……正直、僕にはわからなかったよ」

「それだけ必要とされてたんでしょう？」

そう言つと、男は沈痛な何かを堪えるように吐き捨てた。

「僕じゃなくて『村長』がね。僕じゃなくてもいいんだよ。代わりに妹がいるしね」

「……」

「あそこはそういう村だよ……だから捨てた。そこに悔いはないよ」
あんな村、滅びてしまえばいいと。そう男は寂しげに笑った。
そこにあるのは自嘲めいた笑み。

これでよかったんだと——そう、自分に言い聞かせるような。そんな、後悔を踏みにじるような笑みだった。

——娘を頼む……

その笑みが、不意に誰かとだぶる。

セピアにかすんだその記憶は、苦痛によく似た何かを胸に刻んで、さらに記憶を掘り起こす。

あの日、確かに彼はその笑みを浮かべていた。

——では、また会おう。帰って一段落ついたら……

その聞き取れなかった最後を残して去っていった夫婦の背中。娘一人を置いて、『これでよかった』のだと勝手に納得して、消えていった二人の背中。

「……今まで、いろんな人がいましたよ」

だからかもしれない。気づけば、言葉は思考よりも早く紡がれていた。

「いろんな願いを胸に、いろんなものを捨てて『楽園』に旅立つていきました。貴方も一緒です。彼女との思いを胸に村を……『責任』を捨てた。成さねばならないことから逃げた。それが悪いとは言いません……言えませんか」

あの夫婦と、この男は似ていない。わかっている。あの夫婦は誰かのために旅立った。この男は自分たちのために旅立った。似てない。だぶる理由などない……

だが。それでも、似通った部分があつて。

だからアスターは、意味のない言葉を呟いた。

「ですが……私は、貴方を好きにはなれない」

「ありがとう。僕もだ」

それに応えるように、男も笑う。心の底を吐き出すように。これ以上ないほど、男は自分を嘲った。

「僕も、僕が嫌いだ」

それきり、空気が冷え込んだように沈黙する。アスターにも男にも、もう語ることはなかった。

その沈黙の中、あの夫婦を思う。

（……あの娘は）

願うのは別に構わない。誰かが不幸になっても、そんなのきつと知ったことじゃないだろうから。欲のために旅立ったのだ。だから、それで死んでも構わない。

だが。それならせめて、自分の責任くらいは果たしてくれ。せめて自分のやるべきことだけはやっていってくれ。成すべきことを成してから消えてくれ。

親として、あの娘を育ててやるべきだったのに。

今は亡き、あの夫婦に、告げる。

（……あの娘は、まだ待っているんですよ）

そして、止められなかった自分を嘲った。

「後悔ばかりだ」

それが自分のものだったのか、男のものだったのか。それとも同時に呟いたのか、呟かなかったのか。

それすらわからないまま、アスターは部屋を出た。男はベッドに倒れこんだ。

廊下で独り、痛みのない苦痛に震える。静謐は時間を止めたように辺りに満ちた。

重い足取りも、音になつたりはしない。

ただずっと、暴風の音だけが響いていた。

彼らは次の日の朝、嵐を睨みながら旅立っていった。一つ、誰かに伝言を残して。

アスターはアスターで結局あの女性――グレー？ と話すことはなく、クロもクロでアッシュ？ と話すことはなかった。クロは恋人を邪魔するのは無粋だからという理由から、アスターは彼女に会う前に眠ってしまったから。

お互いにお互いが何を話したのか、知らずじまいのまま、アスターとクロは彼らを見送った。

宿の主人として、あの男に対してあんなことを言うべきではなかったのだと思う。本来なら、笑顔と共に見送るべきだったのだと。何が言いたいのかわからない言葉を吐く必要なんかなかったのに、それが少しばかりの後悔となって、心の片隅にしこりを作る。

誰かを送るたびに増えていくしこり。思い出によく似たそれら全てを忘れないように、何度も何度も思い出す。そうやって忘れないように数えていく。

彼らの姿も、いつかセピアに染まるのだろう。その背中を見送る中、ふとそう思った。

それから、数日経って。

昼食も終えた昼下がりに。『試練』は変わらず『密林』だが、風もなく日も暖かい。穏やかな一日である。誰もいないと思っていたダイニングに人影があつて、それをアスターはいぶかしむ。その人影に多少の違和感を覚えた後、アスターは彼女に問いかけた。

「……？ クロ、何を読んでいるんです？」

「……………へ？」

窓のすぐ下の壁に背を預けて座っているクロは、たっぷり時間をかけて、ようやくその一言を呟いた。どうやら本を読むのにかなり

集中していたらしい。見上げてくるその顔を見下ろしながら、アスターは違和感の正体に『また』気づいた。

髪が短いのだ——といっても、うなじが見えなくなるくらいの長さである。一般的には長いとされる部類だ。一年近く慣れ親しんだ髪型からかなり変わったはずなのだが、肩から下が変わっただけのようにしか思えない。そのことを言ったら、怒ったように殴られた女の子はよくわからない。

本に目を向けたまま、クロは呟いてくる。

「そういえばアスターって髪伸びないよね。何で？」

「私はそういう生き物ですから」

「……ふーん」

どうでもよさそうだった。実際興味のないことだったのかもしれない。だったら何故聞いたんだとも思うのだが。

「……む？」

まあ、そんなことはともかく。クロの手の中にある本の題名を見て、アスターは小さく首を捻った。

「……茨の花道？ 誰かから聞いたことのある題名ですね……はて、誰だったか……」

「たぶんハルティスさんじゃない？ ほら、あの人本いっぱい持ってたし。くれたのはグレーさんだけだね」

言われて思い出した——ハルティス「クラブ。率直に言うなら『本の虫』だ。『楽園』に『世界の全ての本がある図書館』を望んだあの男。とある町から来たらしいが、本にかける情熱がひどかったのが印象に残っている。

と、ふと思い当たって訊ねる。

「ってことはそれ、もしかしてラブストーリーですか？」

「うん。冒険者の男がお姫様に恋するんだけど、結局は身分の違いで別れちゃうお話……なんだけど、最後の最後で大どんでん返しがあるんだって。番外編に兄と妹の恋物語もあるんだって」

あらすじを読んだのだろう。淡々と語るクロに、アスターは思い

つきり露骨に顔をしかめた。

「……うわあ」

「何その『うわあ』って」

「いや、本当にラブストーリーだなあって」

嘘である。実際は、完全に誰かとイメージが被ったからだ。

身分違いの恋。

それをクロが知っているのかはわからない。だが、どっちにしても今度はクロが顔をしかめる番だった。

「何？ ラブストーリーに何か問題あるの？」

問題……というほどのものでもない。言っのもはばかれるようなことだが、アスターは苦い顔で呟いた。

「嫌いなんですよ、ラブストーリー」

結局愛する二人は結ばれるのである。そんなちよつとした夢物語が、どうしても好きにはなれないのだ。ただそれだけの話である。

が、何故かクロはそれに動転したようだった。

「え。なんで」

「いや……なんでと言われましても。嫌いなものは嫌いですし」

「ちよつと待つてよアスター。アスターって、もしかして『恋になんか興味ないぜ！』とか言っちゃうちよつと……ううん、かなり寂しい人だったの！？」

「……………これで私、首を縦に振ったら愉快ですよ。きつと天井を見上げて、独りごちてみる。」

まあ実際、確かに興味なんかないのかもしれない。

少なくとも、今の自分からは遠いものであることに違いはない。そんな華やかな夢を思い描けるほど、自分は高尚な存在ではないのだから。

夢は夢のままであればいい。

美しいものも、自分が手に入ればどす黒く変色してしまうから。そして夢だというのなら、せめて長く続いて欲しい。

「……まあ、別段愉快でも問題ない気もしますけどね」

嘆息を一つ。そもそも問題にすらならないことだろう。

この場所で、恋も愛もへったくれもない。

「……アスターのぼくねんじん」

クロが何か呟いた気もするが、何を言ったのかまではわからない。だから疑問を浮かべておくことにした。訊ねてみても、結局返ってきたのは『アスターのバカ』である。

最近ふと思う。『アスターのバカ』がクロの口癖なのではないかと。実際結構頻繁に言われる言葉ではある。何年前から言われ始めたのだろうと考える。結構最近のような気もするが、二年前にはもう言われていたような気もする。その頃に馬鹿にされるようなことでもしたのだろうか？

と、無駄なことを考え始めた頃だった。

玄関から、ノックの音が二つ。それと、誰かの間延びした声。

「どなたか、ご在宅でしょうか？」

「あー、ハイハイ。鍵はかかってませんから、どうぞご自由に」
その声にぞんざいに応える。来客に驚いて、クロが慌てて立ち上がる。それとほぼ同じタイミングで、扉がガチャリと開いた。

「……アレ？」

そして、クロと二人そろって目を丸くした。

現れたのは、誰かによく似た、人懐っこそうな女だった。その後ろには、これまた誰かによく似た目つきの鋭い男。その腰元には、使い古されてボロボロの柄を晒す長剣。

配役が変わったのかと思った。男女逆になったのではないかと。

そう思うほどに、彼女らは彼らによく似ていた。

アスターとクロ、二人の凝視に驚いたのか、女は困ったように呟く。

「……ええと。私の顔に何か？」

それに二人してハツとする。コホンと咳払いして、アスターは粗相を恥じるように呟いた。

「ああいや、申し訳ありません。他人の空似でした」

そう。他人の空似だ。ただの気のせい。粗相もいいところだ……
と想っていたのもつかの間。

(……?)

空似という言葉聞いた瞬間、女の困った顔が険しいものに変わっていくのを、アスターは遅れて気づいた。クロもそれに怪訝を浮かべる。

「私によく似た男性と……彼によく似た女性、ですか？」

女の声は、何か重大なことを訊ねるように重く響いた。

「……ええ」

手短に応じる——その最中、男との会話をふと思い出す。いつでも、思い出したのは二つだけだったが。

(追われている……妹?)

思考の片手間、彼女を見やる。顔色がものすごい勢いで青ざめていくのを、アスターは人事のように見ていた。それと同時に背後の男の顔色も。男は、唇を強く噛み締めている。その唇が小さく『姉さん』と呟くのも、彼からすれば人事だった。

人事だから、何となくわかった。

「それはいつですか!? ここ数日の話ですか!？」

爆発したように、女の声が宿に響く。クロはそれにビククリしていたが、アスターはわかっていたために平然と告げる。

「三日前に『天国』に向かわれました……失礼ですが、アッシュさんの妹さんで？」

「……はい」

突然の質問に、彼女は怪訝を浮かべる。アスターは胸中でため息をついた。

(……ああ、やっぱり)

だから、あの男は伝言を遺したのか。

この事態まで予想していたのだとしたら……あの男は、この上なく性悪だ。

自分と同じくらいに。

「アツシュさんから貴方宛に、伝言を頼まれてます」

彼女が何か口を開くよりも早く、本当に無色の口調でアスターは淡々と告げた。

「『不出来な兄で悪かった』。そして『村へと帰れ。お前が次の村長だ』と」

ただ、それだけ。ただそれだけに、彼女は力強く笑う。

伝言は彼女に何を思わせたのか。その笑みを見て、アスターもまた微笑んだ。

——帰れと言われて帰るなら、ここまで追ってきたりはしないんだろっけどね。

男は、去り際そう言った。知っていてこんな伝言を遣したのだ。

「会って、殴ってやろうと思います。追いつけますか？」

女はそう、手短に訊ねてくる。だからアスターもそれに倣う。

「ええ。きっと」

『楽園』とは、そういう場所だから。答えに満足したのか、女は頷く。

そして、すぐさま背を向けた。

「ありがとうございます」

ただそれだけの言葉を遣して。パタンと、扉は閉まる。

窓から見えた駆けていく彼女たちの姿も、一秒後には影もない。見送る暇もなく、彼女たちは姿を消した。

それから数分くらい立ち尽くして。ようやく、クロが呟いた。

「嵐みたいだったね、あの人」

「……そういうば、『試練』も『嵐』でしたね、この前は」

何かの皮肉か、それとも暗示か。恐らく両方だったのだろう。

誰もいなくなった玄関を見つめて、アスターは彼を思う。

あの夫婦と似ていた部分のあった彼。今にして思えば、まったく似てはいないのだとわかる。

夫婦は『楽園』を求めるために、娘を置き去りにして。

男は『楽園』を求めた結果、妹を巻き込んで。

求めたために、責任を果たせなくなった夫婦と、責任を果たさなかったがために、求められ続けた彼と。立場が逆なのだ。

だが、結果として誰かに負を与えている。

「……ク口。ちょうどいいですから、一つ教えておきます」

だから、また何かを堪えるようにアスターは笑った。

「何を？」

問い返す彼女の頭を撫でて。

「今のもまた、愛というものの一つの形です。そして……」

世界や他人を嘲るように、人間というものを嘲った。

「愛や恋で、人は死んでもいいと思えるんです」

その死が美德とされてしまう。悲劇の愛だともてはやされる。悲

しいけれど、美しい愛だと。

そんなものが、誰かを救ったりなんてしないのに。

だから恋物語は嫌いなのだ。

3 その先に待つもの

3 その先に待つもの

君は何故アスターを名乗るのかと、そう問われたことがある。それが私のすべきことだからと、答えた記憶がある。

何故あなたはストケシアなのと、そう聞かれたことがある。

それが私の本質であるべきだからと、苦笑した記憶がある。

あの子は何故クロツカスなのかと、そう問われたことがある。

あの子がその名を望んだからと、そう答えた記憶がある。

クロツカスの花言葉を知っているかと、そう言われたことがある。当然でしようと、頷いた記憶がある。

花の言葉に、自分を託すのは何故かと聞かれたことがある。

それしか在り方を知らないからと、そう答えた記憶がある。

これはただ、それだけの話。

ここ八年の、短い年月のくだらない話。

目覚めは最悪だった——それはいつもどおりの午後だった。

最低最悪な夢を描いて、その自己嫌悪を引きずって目覚める。目覚めは吐き気と血の味がした。それは物理的なものではなく、精神的なものだ。あまりにも都合のよすぎる自分に感じる、吐き気と嘲笑の味。

ゆっくりと体を起こす。体を起こしてから、アスターはゆっくりと瞼を開いた。開いても、暗い。景色は何一つ変わらず、闇一色のままだった。ということは、まだ朝ではないということなのだろうが。

「……眠れそうに、ありませんね」

あまりにも夢見が悪すぎた——悪夢ではない。悪夢ではないゆえに、それは最低の夢だった。気分がよすぎて、あまりにも都合がよすぎて、自分を殺したくなる。この上ない自己嫌悪は、何度も何度も心を切り裂いて嘲った。

今更、こんな夢を願うのかと。

そう、何度も何度も嘲笑する。

「……………吐きそうですよ。自分に」

その嘲笑を振り切るように、彼は布団から抜け出した。抜け出して——そのくだらない妄想から逃げ出すように、部屋を出る。

誰もいない廊下。ダイニングには人の気配はない。かすかに、ク口の部屋からその気配が伝わってくるだけだ。旅人はいない。

静かな、何事もなかった日の夜。窓から見えた試練は、あまりにも静かな『海』だった。

廊下を歩く。足音さえしない。静かな夜は、静寂に飲まれて沈黙している……

その寂しさによく似た静謐の中で、ふと彼は思い出していた。

叶うことなど決してありえない夢だと知りながら、何故未練がましくもこんな夢を見続けるのか。いつの日か、そう問うたことを。

「……………答えなんて、簡単じゃないですか」

そう自嘲する。

そのまま、彼は玄関から出て行った。

海面を穏やかな波がなでる。空に浮かぶのはレモンのような形をした月。雲ひとつない夜は明るく、だが海はまるで闇のように漆黒の色をしていた。

砂浜から、塔のように立つ『天国』を見据える。彼岸と此岸との距離は、果てしなく遠い。試練は、ただの海だった。

それを眺めながら、彼は他人事として呟いた。

「……………無謀ですよね、これ」

というよりも、もはや不可能の域だろう。どれだけすさまじい体力を持った人間がいれば、この海を越えていくことができるのか。どう考えても、この『試練』には飲まれるしかない……ふと気づいて、彼はそれを否定した。

「……………何も、泳ぐ必要ありませんしね」

船でもヨットでもいい。わざわざ泳がずとも、海を渡る方法ならいくらでもある。簡単な方法ならいくらでもあるのだ——『サーフボード』なる乗り物を駆使して、波に乗る者もいるくらいなのだから。

そう、泳ぐ必要もない。それをもう一度呟いて、彼は空を見上げた。いつかの月には程遠い、不完全な円をかたどる月。星々だけが、あの日と同じように空で瞬いて消えていく。

かつて、この空が人の成れの果てなのだと言った少年を思い出した。

人が死んだら空に昇り、空に昇ったら星にまたがり、そこから自分たちのことを見守ってくれているのだと。そう、笑顔で話してくれた少年のことを。

無垢故に、信じられた夢だったのだと思う。空の上に人はいない。星に人は座ることなどできない。人は一度しか生きて、死ねない……死んだら、誰も見守れない。

だからこそ、夢には価値がある——命を賭して叶えようとするほどの価値が。でなければ誰も、『楽園』を目指したりなんかしない。願いに価値がないのなら、誰も命を賭したりなんかしない。

「……………無意味だと、知っているのなら」

呟いて、彼は一歩足を進めた。何年も使い込んでぼろぼろになった靴の中に、水が漏っていく。この靴もそろそろ使い物にならなくなるだろう——修繕できるかどうか。本来考えなければならぬのはそのことだったが。

彼は、まったく違うことを考えていた。

（……何もかもを、飲み込んでしまう場所）

足を踏み入れた場所。その言葉が『試練』を指すのか、それとも海を指すのか。それとも、彼の嫌いな『天国』を指したのか……

わからないままに、アスターは先へ進み続けた。足首が飲まれ、すねが飲まれ、ひざが飲まれ、腰が飲まれ、腹が飲まれる。

少しずつ迫る海面が自分の顔を写すようになって、初めて彼は足を止めた。

「……………」

暗い暗い水の、波で揺れる鏡が写した自分の顔を睨み続ける。無表情なまま、ずっと。不定形のまま止まらない自分の顔を見据え続ける。少々長い髪。整った顔立ち。愁いを帯びた瞳。何も浮かばない無表情。

絶望したかのように濁った、仄暗い瞳……

「八年ですよ？」

その瞳と視線を合わせたまま、彼は問いかけるようにして自分を嘲った。かすかに響いた波の音が、その声を飲み込んでいく。

誰も聞いてなんかくれない……

「もう八年経ったんですよ？」

それでも、彼は呟いた。

「あの子は成長するには、長すぎるほどの時間が経ったんです。四歳かそこらの子供が、自分で何かをできるようになる時間……親が慈しみ、見守ってあげるべき時間が経ってしまったんですよ」

なのに、あの人たちはいない。

八年間も子供を放置して、そんな長い間の時間があつたのにまだ帰ってこなくて。

「……まだ、待ってるんですよ？」

だけど、もう帰ってこないことを知っていて。

呟くのが、ただむなしいだけだということを悟っていて。

「……………！」

彼はそれ以上何も言わず、海中へと潜っていった。

八年間変わらなかった——変わることもなかった、自分の顔を叩き割るように。

自分を割った音だけが、強く耳に残った。

わからない。

もぐっているのかも、泳いでいるのかも。

進んでいるのかも、流されているのかも。

わからないまま、何も見えない水の中でアスターはもがいた。どこに行こうとしているのか。どこを目的としているのか。それさえわからずに、ただ泳ぎ続ける。

視界は黒一色だった。何も見えない。何もない。ただ水の抵抗だけがある。ゆらゆらと揺れて、重い感触だけが手に残る。それが水をかいた感覚だったのか、それとも押しつぶされている感覚なのか。それさえわからずに、彼は進み続けた。

不意に吐いた息が上に浮かんでいくのを感じて、ようやく彼は自分が底へともぐっているのだと気づいた。沈んでいるのかもしいない。ただ、海底を指摘している。何の意味もなく。呼吸ができなくなることも無視して。

ふと思ったことがあった。もぐる理由。意味がないとわかっていながら、そうすることに何の抵抗もない理由。

——逃げているのだ。何かから。

だが、何から。

それさえわからない。わからないから彼は海中で目を閉じた。黒一色しかないと思っていた水の中に、本当の闇が生まれる。何も見えない。だから何から逃げているのかも見えない……

（本当に？）

そもそも形のあるものから自分は逃げていたのか？

それはないだろう。形のあるものに、恐れを抱く理由なんてない。

何かを恐れる理由なんてない……

（本当に、そう思っているのか？）

繰り返される問いから逃げるように、水をかく。抵抗を押しつけて、また少し、体が沈む。

本当に、何も恐れてなんかいないのか。

本当に、何から逃げているのかもわからないのか。

ゴボ、と、何かの音が聞こえた。どうやら息を吐いてしまったらしい——だが、まだもぐっていられる。ならば、まだ上がらなくていい。ならば、まだ逃げていられる……

（……逃げている）

やはり、逃げている。明かりさえない水の闇の中、何かが怖くて逃げている。何も見えないのに、その恐怖だけは見えている。

それは未来だった。いつか来るだろう終わりのとき。

いつかすべてを失わなければならない日。

その恐怖を振り切るように、また沈む。

「——！？」

沈んで——彼は悲鳴を上げた。今まで何もなかった、水の流れ。さっきまで何も感じていなかった水の抵抗が、意志を持ったかのように体を引っ張る。

それが海流というものだということを、アスターは他人事のように思い出していた。悲鳴は続く——吐く息が、なくなっても。

開いた目が見た視界は海面を——空を見たのか。闇の中に一つ、輝く月を見て。

悲鳴を止めることすらできず、彼は海流に流された。

どこに流されるのかもわからないまま、ずっと。

何日か前に、雪が降った日があった。

白銀の世界。雪に包まれた冷たい光景。

やってきたのは『追憶』の花を名乗った女だった。そしてクロに『再開』を告げて、消えていった女。冬を死の季節と呼び、天国に似ていると呟いた女。

夢もなく、天国を目指したただ一人の女。

彼女の言葉を、今でも覚えている。一字一句、変わらず思い出すことができる。

——心配ありがとう。だけど……大丈夫よ。私は帰ってくるもの。彼女はそう言ったのだ。あの日の、彼らと同じように。

激流にもまれながら、彼は歯を食いしばる。すでもう呼吸は続いている。視界が赤と黒のまだらに埋め尽くされる。それが肉体の限界であるということを、彼は知っていた。

それでも、歯を食いしばって耐えた。苦痛にではない。呼吸がでない苦しさにはない……存在しないものが感じた、食い破られるような痛みに耐えるためにだった。

帰ってくる。あの日の彼らと同じ言葉。だけど、それは自分にとって明確に意味の異なる言葉でもあった。

それは終わりをもたらすだろう。

クロに裏切りと失望を——そして自分に絶望を覚えてくれるだろう。

帰ってくる。その時がきつと、すべて終わるときなのだ。そして終わらせなければならぬときでもあり、終わらなければならぬときでもある。

ふと思い出していた。彼女が去った日の朝に、クロと一緒に作った雪像の事を。

笑みの表情に整えられた雪像は、その三日後になくなって消えた。溶けていくその光景を、自分は忘れない。忘れることなど絶対にできない。

少しずつ少しずつ溶けていく。笑みも歪んで、泣いているような顔に変わったのを覚えている。あの雪像は泣いていた。自分がなくなるということに嘆いていた。自分はいられない場所にいるのだと、

そう叫んでいるようにも見えて。

それが自分とダブって見えたから。だから、絶対に忘れることなどできない。

——いつか壊れてしまうもの。

——いつかなくなってしまうもの。

それは奇跡の上に成り立っていたもの。

——いつか、壊さなければならぬもの。

彼は歯を食いしばり続けた。流れに身を任せて。死ぬかもしれないということを考えることさえせずに。

ただ、どこかに漂流するまで、苦しむということをやめなかった。

——娘を頼む……

何故私に頼むのだ。私は娘を預けていいほど、上等な存在などではない。

——君にしか、託せない

それは嘘だ。託すべき人間ならきつと、きつとどこかにいたのだ。私でなくともよかったのだ。

——君は信用できる。

やめてくれ。こんな私を信じるのなんてやめてくれ。

——……君を信じている。

やめてくれ。お願いだから。お願いだからやめてくれ。

人殺しを信じることなどやめてくれ。私はそれしかできないただの愚かなクズなのだから。

だから、やめてくれ。

見殺しにするしか能のないものを、信じることなんかやめてくれ。

私は人殺しです。

人殺しなんです。

まだ、絶望は知らない。

ただ、この先に絶望があることだけを、知っている。

「……………」

小波の音を聞いて、ようやくアスターは自分が沖に打ち上げられていることに気づいた。口の中が塩辛い。どうやら海水を飲んでしまったらしい——おぼれていた以上、考えるまでもないことだったが。

ざらつく砂浜に寝転んだまま、彼は寝返りを打って仰向けになった。月はもう沈んでいる。空にあるのは取り残された星空と、ほんのりと暗い青い空だけ。まだ太陽は上がっていないようだった。ということとは、そろそろ朝ということだろう。

「……は」

ふと、何かがおかしくて彼は笑った。腹筋が一度だけ痙攣したような、そんな感覚。その感覚を引きずるようにして彼は笑い続けた。何がおかしかったのかも、何でおかしかったのかもわからない。

わからないまま、笑い続けた。

（……違うでしょう？）

認めたくないだけなのだ。だからわからないと嘘をついて、その嘘にすがり付いている。あまりにも愚かしくて、それに笑ったのだ。

——結局、現実を思い知らされたただだったのだ。

逃げようとして海にもぐったのに。ただ、現実をもう一度確認しただけ。

自分が最低なものであり、これからもそうであることを思い知らされただけなのだ。

まるで、そのことを忘れると言わんばかりに。自分で自分に悪

夢を見せているかのような錯覚に笑ったのだ。きっと、それは間違いないのだから。

逃げようとした自分を、自分が冷たく嘲ったのだ。

「……絶望」

最後に思ったことを、言葉に出す。

絶望は、まだ知らない。ただ絶望しなければならないことだけを知っている。

気絶する間際、確かにアスターは、自分へと告げたのだ。

「……絶望を知れ」

何人もの人間を、見殺しにしたのだから。

その程度の絶望くらいは、知るべきなのだと。

「……は、はは」

また笑い出した。したり顔で自分は、あまりにもばかげたことを言っている。それがおかしくて笑い出した。くだらない。くだらなすぎて仕方がない。笑いが止まるまで笑った後——彼は、ゆっくりと息を吐いた。

そのまま立ち上がる。海水で濡れた服は重かった。靴はもぐる前よりもはるかに傷んでいる。もぐる前に靴くらいは脱いで置くべきだったと、アスターはほんの少しだけ後悔した。

「……また、クロに怒られるんでしょうね」

それも仕方のないことだろう。そう苦笑して、彼は歩き出した。

この生活がいつまで続くのか。それだけが、気がかりだった。

4 小さな後悔、大きな後悔

4 小さな後悔、大きな後悔

空は快晴。風は無風。日差しも優しく、湿気も少ない。この地域にしては珍しく、とても過ごしやすい天気だった。『試練』もその天気に合わせたのか、涼しそうな『無風の草原』だった。今なら綺麗に『楽園』が見えるのだが。

窓から見た、ある種爽快な——つまりは嫌いな——雰囲気、アスターは頭を抱えて暗鬱に呻いた。

「……うわあ。すごい嫌な天気」

「……どこがなのよ」

呆れ声を上げたのは、やっぱりクロだった。呆れているようだったが、もう呆れられるのにも慣れている。だから特に何も思わず、そのまま視線を窓から部屋に戻す。

キッチンでお皿を洗っていたクロが、顔をしかめてこちらを見ていた。

「アスター……もうちょっとでいいから、明るく生きてよ。こつちまで暗くなるから」

「……これを見てどう明るくなれと？」

実際その光景は頭がハッピーになれるものではないのだ。朝嫌いとかさわやか嫌いとか、そういうのとは関係なく。ある種の経験則——或いは率直に統計——から来る、とんでもない嫌な予感である。だが、こちらの心境など知る由もなく。顔をしかめたまま、クロは不思議そうに訊ねてきた。

「でも、『試練』が変わったってことは、新しい旅人が来るってことでしょ？ それっていいことなんじゃないの？」

「……まあ、そうなんですけどね」

答えにくい問いではあった。しばし沈黙する。

確かに、『試練』が変わったということは新しい旅人が来たということだ。別段そこに問題があるわけではない。問題はその『試練』の内容だった。無風の草原。どこまでも続くかと思える緑の果てに見える楽園。障害物など何一つない。

それ故に、まったく面白くなりそうになかった。眉をひそめている間に、クロ。

「何？　もしかしてアスター、この試練を見て嫌がってるの？」

「……というと？」

「だって、アスター言ってたじゃない。試練は旅人に合わせて姿を変えるって。ってことは、今回の旅人ってこの草原が似合うくらいさわやかな人ってことでしょ？」

「……………」

だったら、どれだけよかったか。先ほどと同じように頭を抱えてアスターは天井を見上げた。この試練を見て、自分は旅人を嫌がっている。それは間違いではないのだが。

「どんな人なんだろ。さわやかっていうくらいだから、かつこいい人かな？　それとも綺麗な人？　草原が似合う人なんだから、たぶん若い人だよな？　ね、アスター？」

（さわやかだったらどれだけよかったか……まあ、若いといえば若いんでしょうけどね）

声には出さずに嘆息する。それもこの上なく暗鬱に。その反応をどう取ったのかは知らないが、クロは何故か楽しそうに笑ってきた。

「……アスター、もしかして嫉妬してる？」

「へ？」

どこからその言葉が出てきたのかわからず、目を丸くする。

嫉妬。自分が。この人気のないところで、嫉妬。

「誰に？」

思わず訊ね返す。が、またクロは妙な受け取り方をしたようだった。どこかからかうように——そのくせどこか嬉しそうに笑っている。

「またまたー、照れちゃって。意外にアスターって可愛いところあるよね」

「……照れるって何に？」

純粹にわからないから聞き返す。クロはそれをムフフと笑って受け流すだけだった。

何がなんだかまったくわからない。クロの顔はほんのり赤いようだったが、まあ、どうせまた勝手に何か悪いものでも食べたのだろう。怒るのは後でいい。そういうわけで、クロから視線を離す。

「にしてもアスターが嫉妬かー。何て言えはいんだろこの気持ち。こう……意外な一面発見、みたいな。何かすんごい甘酸っぱい秘密を知っちゃったような」

なにやら甘酸っぱい秘密まで知られてしまったらしい。そんな秘密があったかどうか。考えてみるが、にがずっぱい秘密しか思いつかなかった。顔をしかめてから、それを忘却の彼方に押し込む。クロはその後もキヤーキヤーと呟いていたようだったが、とりあえずそっちも無視しておいた。

それよりも問題は避難経路だった。宿の至るところに仕込んでおいた、秘密の隠れ道。ここからは遠い離れ小屋に繋がっている地下道である。ここ最近使った覚えはないが、使えるかどうか、確認しておく必要がある。それと同時に、自衛のための武器も用意しておくべきだろう。棍棒でも棒切れでも、この際フライパンでも何でもいいから。

無風の草原の意味。それを改めて考えて、アスターは肺にあった空気を全て吐き出した。長い長いため息の音。そのままクロには聞こえないよう意識して、アスターはまた暗鬱な愚痴を零した。

「……怪我せず乗り越えられれば、楽でいいんですけどね」

悲鳴を上げる余裕はなかっただろう。

それと同時に、何かに余裕を持ったための余裕も。聞こえてきた音を全て拾い上げ、必要なものだけをピックアップする。足音。罵声。怒声。歓声。そのどれもが、見知らぬ、否、聞き知らぬ男たちのもの。布団を跳ね上げるようにして、アスターはすぐにベッドから飛び降りた。

眠らないで正解だった——日の落ちた深夜。襲撃がくるならこの時間帯だろうと予測はできていた。枕元においておいた棍——平たく言えばただの長い棒を手に、深呼吸する。

「予想通りでしたよ、本当に……！」

一縷の望みなどかけるべきではなかったのだ。後悔は苦い味を口内に残す。足音は少しずつこちらへと動き始めていた。ダイニング寄りの部屋は全て貸し部屋だ。後半が自分たちの部屋。少しずつ近づいてくる。廊下を歩く音。

それはアスターに飛び出すタイミングを教えてくれていた。
迷いはない。

「……！」

部屋の扉を蹴り上げる。乾いた音。それは吹き飛んでいく扉が立てた音だった。それに引つ張られるように、アスターは廊下へと転がり込んだ。明かりのほとんどない廊下。自分ごと景色が吹き飛んでいく。

「……！？」

鼓膜を震わせたのは、押し殺した悲鳴のようなものだった。ダイニングのほう。更に一つ、自分のすぐ横に硬直した人影。侵入のタイミングを図っていたのだろう、ナイフを構え、呆然とした顔でこちらを見下ろしていた。行動は驚愕に遅れて動く。

ナイフが落ちてくる煌き。

それよりも早く、アスターは動いていた。

「……シッ！」

短い息吹き之交差。立ち上がるよりも先に、棍で男の胸部を射抜

く。軌道のぶれたナイフは、アスターの頬をかすめて空を切っていく。その隙に彼は大きく背後へと飛び退いた。

観察は一瞬。瘦せぎすの男。狭い廊下。男の背後から罵声と野次が響いてくる。五人か六人。男を含めるなら七人。その誰もが下衆じみた笑みを浮かべ、その手に握るナイフをちらつかせる。嫌な予感。予想通りに的中した。

盗賊、悪漢、暴漢、犯罪者。何でもいい。そういう類の旅人たちだった。声はもう聞こえない。鼓膜を震わせていたとしても、全ての音として流す。

背後にはクロの部屋がある。通すわけにはいかない。

即座に思い浮かべる。これから先、打つべき手順。取るべき行動。棍を握る手がじんわりと汗で滲んだ。七人。この狭い廊下なら一人ずつ相手にできるだろう。だが棍が武器では全員を無力化することはできそうになかった。頃合いを見て、クロと共に逃げなければならぬ。

思考する時間はわずかしかなかった。それ以降は全て行動する時間だった。

闇が動く——男が飛び出してくる。

「……！」

氣勢のような声が聞こえた気もしたが、それさえ無視してアスターは前へと一歩踏み込んだ。ナイフを待つことなどしない。

前へ踏み込んでくることを予想していなかったのか、男は驚愕を浮かべていた——その表情を打ち壊すように、脳天を打ち抜く。

響いたのは鈍い音だった。足が浮き、男の体が縦に回転する——それほどの勢いで男の後頭部が床を打ち付けた。その衝撃で男は昏倒し、ナイフが天井へと吹き飛んでいく。

もし気絶していなかったとしても、脳震盪ですぐには戦えないだろう——倒れた男から視線を離し、アスターは宙に舞ったナイフを掴み取った。

更に視線を廊下へと向ける。男の仲間たちが、遠くで倒れた男に

野次を飛ばしながら走り出していた。二人。手には似たようなナイフが握られている。

その出鼻をくじくために。

「……なっ!？」

アスターは、無言のままナイフを投げつけた。

風を裂く白刃は、誰にも突き刺さることなく空を切る。悲鳴じみた声を上げた男たちが止まったその一瞬、更に棍を投げつける。一瞬の怒声——それらを聞きながら、彼は声にならないほど小さく呟いていた。

(……こんなことしてる暇なんか!)

響いた怒声が消えるよりも早く、アスターは敵から背を向けた。廊下を駆け抜ける。迷うことなく、アスターはクロの部屋の扉を開け放つ。

本棚と机とベッド。シンプルな光景が目飛び込んでくる。それは見慣れた光景でもあった。

「……………!」

その部屋の中、震える影が一つあった。毛布に包まれて、まるで芋虫のように丸まっている。危険な状況だというのに、アスターは思わず苦笑してしまった。それでは、隠れていることにはならない。逃げ出すことさえできないではないか。

どちらにしろ、苦笑は刹那の分も続かなかった。

「動かないでくださいよ!」

布団ごとクロを担ぎ上げる。抵抗するかと危惧したが、予想に反して布団はまったく身動きしなかった。悲鳴さえもない。もしかしたら恐怖のあまり気絶したのではないか——それはあまり想像したくないことではあったが。

クロを担いだまま、即座にアスターは本棚の隣へと駆けていく。闇の中ではよくわからないが、そこには仕込んでおいた『鍵』が眠っていたはずだった。闇の中、その『鍵』を踵落として外す。

乾いた崩壊音。それは床の底から響いた音だった。

「……………!？」

今度こそ、クロの悲鳴。だが、それに付き合っている暇はない。逡巡する暇もなく、アスターは部屋の中央へと立つ。

鍵は外された。必要なのは覚悟だった。

そして。

——床が消える。その錯覚と共に。

床の底へと落ちていく、不快な落下感。悲鳴は聞こえてこなかった。罵声は聞く耳を持たなかった。風だけが強く耳に響く。落ちていく。永遠とも思える数瞬を落ちていく。その最中、天井からの光が消えた。先ほどまで床だった天井が閉まった音。それと同時に着地する。

衝撃が足から脳天へと駆け抜けていった。

「……………」

しばらくは、何も喋れなかった。クロも何一つ喋らない。すすり泣きのような音が聞こえていたが、それについて触れるのはやめておいた。泣くのも当然だろう。それは仕方のないことだった。

頬の傷に触れつつ、辺りを見回した。何てことはない小さなトンネル。燭台も何もない。せいぜい崩れないようにしてある程度のトンネルだ。天災や緊急事態に備えて、自分で掘ったものだった。

天井を見上げる。特にどうということもない回転床。そこはもう開かないはずだった——というのも、一回回転したら、もう二度と回らないような仕組みになっているためである。

宿を開いてからずっと仕込み続けたギミックだったが、まさか本当に使うとは思ってもみなかった。ああいう旅人が来るのは、『雪原』同様十年に一度かそこらだ。だから動くかどうか不安ではあったのだが。

「……………まあ、動いたことに感謝しますか」

呟いてから、自嘲する。感謝するくらいなら、逃げればよかったのだ。

こうなる可能性が高いことくらいわかっていたのだ。それでも、

不確定な可能性であの宿を空けなくなかった。だからクロにも何も言わず一日を終えて、結果がこの有様。

クロを恐怖に晒して、間一髪で逃げ切った……

（……失敗ですね）

今更の後悔であり、自嘲だった。暗闇の中で小さくため息をつく。か細い声が聞こえた。

「……アスター」

クロの声。涙の混じった声だった。その声にはどこか、非難めいたものが混じっている。

「……動けないし、周り見えないんだけど」

「……ああ、そういえば」

言われて思い出した。クロを肩に担いだ時、彼女は布団に包まっていた。たまだった。それに苦笑する。

苦笑はすぐさま罪悪感に化けた。

いつもどおりを振舞った声で、気丈にクロは呟いてきたのだ。それでも、その声は簡単に壊れてしまいそうなほどに弱々しい声で。

逃げるべきだったのだ——クロを危険に晒すくらいなら。

（……申し訳ない）

もういないだろう、彼らにそう謝る。謝罪はきつと届かないだろう。彼らは『楽園』に旅立った。声はもう届かない……

だから全てを誤魔化すように、アスターもいつもどおりを装った。「いいじゃないですか、ミノムシスタイル。そのまま寝ても結構ですよ？」

「せめておんぶにしてよ！」

「……まあ、いいですけどね」

クロを地面に下ろし、背中を向けて肩膝を突く。クロが負ぶさつてくるまでの時間、ただぼんやりとアスターは考えていた。

これまでのこと。これからのこと。自分のこと。クロのこと。『楽園』のこと。宿のこと。旅人のこと。たった六つしかない、考えること。

これまで殺し続けた——これからもきつと殺し続けるだろう。そのために、自分はアスター＝ストケシアを名乗るのだから。『楽園』はきつと変わらない。宿だつて楽園と共にあるだろう。旅人も、楽園がなくなるまではいなくならない。

楽園がなくなるまでは。

「寝てる間に変なことしたら……承知しないからね」
「しませんよ」

不機嫌っぽい声に、苦笑を返す。首に抱きついてくる腕と、背中に乗る体。クロの熱。落ちないことを確かめてから、アスターはゆっくりと立ち上がった。

「……おやすみ」

小さな声で、クロは呟く。それにアスターも小さく答えた。

「おやすみ。よい夢を」

悪い現実を忘れられるくらい、よい夢を。

それはクロに告げた言葉ではあり、更に言うならばただのアスターの願いだった。

小さい体の重み。その重さを噛み締めるように、ゆっくりと歩き出す。それから少しして、寝息の音が響く。精神的な磨耗は、すぐにクロの眠りを誘ってくれたようだった。

安らかな寝息。それを聞きながら、ふと思う。

託されたあの日から、少しずつクロは成長していく。健気に彼らを待ちながら、少しずつ少しずつ変わっていく。

さつきまで考えていた六つ。変わらないものしかなかった五つ。

八年前までは、その五つだけしか持っていなかった。それ以上を望みはしなかった。

ただ一つ。クロだけが、変わっていく。託されて、苦労して育てて。苦労させられて、苦労をかけて。父にはなれないから、兄のようには振舞ってきた。

だけど、いつしかそれも変わってしまう。自分が持っていていいのは、変わらないものだけだから。それが罪に対する罰なのだから。

いつか、クロとの関係も終わる。終わりを告げねばならない時が来る。背中にある、優しい熱。いつしか消えてなくなってしまうもの。

いつか、失ってしまうもの。

だから、アスターは誰かに願った。

「……どうか、よい夢を」

——どうかよい夢を、続けさせてください。

クロとの関係が、終わるまでは。

小波の音が鼓膜を揺らす。潮の香りは懐かしさを感じさせ、波に削られていく砂の色は郷愁を感じさせずにはいられない。遠目に眺めたその光景は、貝殻でも拾いに行こうかと迷う程度には綺麗だった。

だが、日差しは強く、地面が暑い。それだけでやる気は欠片もなくなっていく。当面の問題はこの血が沸騰するような太陽光だった。寒さならやせ我慢でも耐えることができるが、暑さだけはどうにもならない。『試練』は『海原』。断崖絶壁ともいえる崖の上から地平線——ではなく、対岸の森を睨みながら、アスターはどうしようもなく呻いた。

「……あー、暑い」

「わかりきったこと……言わないでよ」

隣で地面に腰を下ろしながら、クロも呻いてくる。確かにわかったことではある。今更言わなくても、この暑さなら誰であろうと死にそうになるだろう。

暑い。普通の季節はまだ春だったはずだ。文字通りの夏先取りである。『試練』は日差しの強さまで変えてしまう。もはや何でもありの様相を漂わす光景に、アスターは呆れるしかなかった。

「……まあ、それでも運がいいほうなんでしょうけどね」

こんな時に嵐が来たら、食料にありつくことなど夢のまた夢だった。可能性すら見つからない。あの宿に戻れない以上、こちらで自給自足の生活を送らねばならないのだ。

「……ねえ、アスター」

「はい……何でしょう？」

怪訝と苛立ちと不安をごちゃ混ぜにしたような顔で、クロが崖の上から海を覗き込む。そのクロの隣で、二本の糸が海まで垂れ下がっていた。

「……ほんとに釣れるの？ これ」

海といえば、釣りである。実際は素潜りでもできればよかったのだが、避難小屋には銛がないし、ここを降りたらたぶん戻ってこれない。断腸の思いで断念し、仕方なく置いておいた釣竿を引っ張り出してきたのだが。

「……さあ？」

肩をすくめるしかなかった。それにげっそりと、クロが呟いてくる。

「……何でそんな無責任なの」

「だって、釣りより素潜りのほうが好きですし」

「……理由になってないよ、それ」

「理由なんて適当でいいんですよ。本当に」

仕方なく、ため息をつく。それから少しだけ釣竿を動かした。

「きたー？」

「そう簡単に来るんだったら、きっと魚が絶滅してます」

「だよー……」

当たりが来るまで、先は長そうだった。始めてから三十分。未だに当たりなし。することもないのか、クロは退屈そうに空と釣竿を交互に眺めていた。その光景を見て、胸の内でのみ小さく呟く。

（……少なくとも、昨夜の影響は表面には出ていない、と）

昨夜の野盗の襲撃が、クロの内面にどんな傷を与えたのか。それ

は外面からでは図ることはできない。いろんな人に会ってきたとはいえ、クロはまだ十二歳かそこらだ。他人から与えられた悪意に触れて、それでも平然としていられるような歳ではない。そもそも、あの宿は、敵意や悪意といったものとは完璧に無縁の場所だったのだ。それでも、クロはこうしていつもどおりのにんびりしている。それを強いとみるべきなのか、それとも『脆い』とみるべきなのか。そこで一つ、アスターはため息をついた。

強いのだろう。見知らぬ男と八年間、両親が帰ってくるのを信じて待っているのだから。

その純粹さから目を背けるように、アスターは空を見上げた。うだる暑い日差しと、溶けてしまいそうな青い空。見上げて、虚しさは消えてくれなかった。

「ねえ、アスター」

と。突然のクロの呟きに、アスターは視線を下ろした。服が汚れるのも気にしていないのか、クロはごろりと地面に寝そべっている。はしたないと注意すべきか迷っている間に、クロはポツリと問いかけてきていた。

「何で、あんなところに宿を建てたの？」

首をかしげて、本当に不思議そうに。今までの疑問だったのか、それとも今思いついた質問だったのか。どちらにしても、今更な質問だと思った。八年も時間があつたのに、それに答えた記憶がなかったのだから。

理由。天国と名無しの森の境界。あそこに宿を建てた理由。

それは思い出す必要もないことだった——理由と目的は同じもので、それが何よりも大切なことなのだから。

自分が、花の名を名乗るように。

「……あまり、面白い話でもありませんよ？」

そう断りを入れると、クロは目をほんの少しだけ輝かせたようだった。それに苦笑する。聞かなければよかったと思うかもしれない。今更だ。だから、アスターは感情を込めないで呟いた。

「旅立っていく人を……いなくなっていく人を、覚えていようと思っただんです」

「……いなくなっていく、人？」

「ええ」

小さく頷く。様々な願いを抱えて、消えていった人々を思い出しながら。

楽園への旅は、天国への片道切符。旅人は行ったきり、もう二度と戻ってなどこない。この世から姿を消していく。いなくなった人を、もう誰も覚えてくれない。旅立った人たちも思い出に消えて、最後には跡形もなく忘れ去られる。

誰も、その人がいたことを知らない。人間が覚えていられる時間は有限だ。

「だから……せめて、私だけは覚えていようと思ったんです」

目指した旅人は止められない。引き止めようとしても、言葉はもう届かない。盲目的な求道者たちを止めることはできない。

だから、せめて自分だけは覚えていようと思ったのだ。彼らの顔を。彼らの声を。

彼らの姿を——彼らの願いを。

それが理由。

「……寂しい理由だね」

「ええ」

ポツリと零された、クロの言葉。それにアスターは苦笑した。寂しい理由だ。

止めることができないから、その代わりに忘却を禁じた。楽園へと旅立ち、天国へとたどり着いた者たちを、ずっと。

きつと、終わりなどないのだろう。天国が消えてなくなるなら限り、きつと。

「……寂しいね」

悲しそうな顔で、またクロが呟いてくる。それに静かに首を振る。「寂しくはないですよ」

ただ、辛いだけ。背中を見送るのが、ただたまらなく痛いだけ。
無言は長かったのかもしれない。風が髪を揺らし、小波の音が鼓膜を振るわせる。その中に砂のする音が混じる――クロが体を起こす。悲しそうな瞳を背けるように、クロは『楽園』を見た。

「どうして、アスターは『天国』を目指さないの？」

また、ポツリとクロは聞いてくる。それも今更な質問だった。だから苦笑する。目指さない理由は、とても簡単なものだった。

「私には、その資格がないんですよ」

「……資格？」

無言で頷く。旅人たちは全員その資格があった。クロにもきつとあるだろう。

だが、自分にはそれがない。自嘲に近い苦笑を浮かべて、アスターは『嘘』を告げた。

「私には、願いがありませんから」

「……何にも、望んでないの？」

「ええ」

無感動を装って、そう頷く。呆れた嘘は、胸の内を冷たく焼いた。望んではいけないのだ。自分が望みを抱くことなど許されないのだ。

ただずっと見殺しにし続けている。そんな自分が願うことなど。誰も許してくれなどしない。

それでも望んでしまうから、何度も何度も感情を殺す。

いつか終わりを告げなければならないものを、まだズルズルと続けている。きっかけがつかめないことを言い訳にして、まだ延々と欺いている。

「……そっか」

呟きは波の音に消える。日差しは、ただ延々と『試練』と『楽園』を照らし続けている。

これまでと変わらず、これからもずっと。求道者たちを飲み込み続けて。

「……お父さんたち、天国に行けたのかな」
零れ落ちた、弱々しい言葉に。

「ええ……きつと」

小さくアスターは呟いた。

そしてこの上なく最低な自分を嘲けた。全てを知っているからこそ、それを教えてやれない小心者を自嘲した。

（……死んでも、行く場所は天国だから）

沈黙を保ったまま、ただ視線を釣竿に固定する。

結局、釣竿は一度も獲物を捕らえることはなかった。

その日の夕暮れ。崖の上から、また垂らした釣糸を引き上げる。
が、先についているはずのエサは既に跡形もなかった。食い逃げされたらしい。

「……魚に食事させても意味ないんですね」

どうしようもない徒労感に、アスターは皮肉げにそう呟いた。結局のところ、今日は食事にありつくことはできそうにない。宿に帰ったとしても、恐らく野盗どもがあらかた食料を食らい尽くしてしまっているだろう——どうせもう『楽園』を目指して旅立っているのだろうが。

「クロ？」

ふと何の反応もないことが気になって、アスターはクロを呼ぶ。

普段なら軽口には逐一反応してくれるのだが。呼びかけても反応は返ってこない。

（……飽きて帰っちゃいましたかね？）

実際ありえないことでもないだろう。視線を適当に彷徨わせる。と、クロの姿はすぐ近くにあった。アスターの背後で、影に埋もれるようにして眠っている。いつの間に眠っているのか気づかなかったが、その光景にアスターは微笑を漏らした。

「服が汚れるというのに……」

女の子だというのに、そういうところに無頓着だから仕方がない。起こすべきなのかどうか少しだけ迷って、アスターはすぐに釣竿を片付け始めた。起こす必要はないだろう。クロを背負い、釣竿を片手に歩き出す。宿に戻っても問題ない頃合いだろう。崖の岸、森と楽園の境界を歩いて、宿へと歩いていく。

「……………すう」

聞こえてくるのは安らかな寝息と足音だけ。どんな夢を見ているのだろう——考えると同時、タイミングを計ったかのように、クロの寝言が耳をくすぐった。

「ごはん……………」

「そのまんまですね、本当に」

それに思わず苦笑する。きつと今頃、夢の中でたらふくご馳走を食べているのだろう。だが宿に帰っても、食事にありつけるのは食料を補給する明日からだ。

今現実を知ったら、いつそ清々しいくらい落胆しそうだった。

現実。

（……現実、か）

脳裏によぎった言葉に、浮かんだ苦笑が消えていく。クロが知らない、今までの真実。落胆では済まされないだろう。たとえ、いつか気づいてしまうことだったとしても。

知ってしまった瞬間が、この不条理ゆえに優しい関係の終わり。

知るまでの間が、可愛そうな置いてかれた少女への裏切り。

八年間の裏切りの終わり。いつか来るだろう破局の日。

実際随分長く一緒にいたものだと思う。いつこの関係が終わりを告げてもおかしくはなかったのだ。何故か、その終わりが訪れなかっただけで。実際八年も保つはずがなかったのだ。

それでも八年保った——いや、保たせたのだ。出来うる限りボ口を出さないようにして。できうる限り適当を振舞って。

（……私は、やっぱり嘘つきですね）

願いが無いなどと大嘘をついて、実際はその日が来ないで欲しいと願っている。クロにとっては欺瞞に満ちた、この残酷な時間が少しでも長く続けばと。

ただそれだけを願っている。

「……………なんで、こうも苦しいんでしょうね」

いや——苦しい理由など知っている。

——最低だとわかっていても、一緒にいたいから。問いかけるべき言葉が違うのだ。それに自嘲する。

「……なんで、こんなにも一緒にいたいと思うんでしょうね」
それが正しい問い——そして答えの出ない問い。

その問いから逃げ出すように、アスターは歩き続けた。
答えを知れば、絶望してしまうような気がしたから。

愚かだったのだ。

その関係が長く続いたのは、奇跡だったのだと知っていたのに。それが簡単に終わってしまうものだとは知っていながら、今日終わるものではないかと思いつ込んでいたのだから。

「待ってたわ。というか……………どこにも行くあてがなかったと言った
ほうが正しいのかもね」

終わりは、見覚えのある女の形をしていた。

宿の前。

雪の中でひっそりと立つ、柳の木のように静かに。

「天国……………行ってきたわ。約束を果たしたから帰ってきた。だけど
……………だけだね」

帰ってきてはならない者。だけど、帰ってくると宣言した女。
絶望とも失望ともつかぬ顔で、こちらを見つめている女。

「……………私は、あんなもの認めない」

その宣告は、アスターにとっての絶望そのものだった。

「あんな最低なものを……天国だなんて、認めない」
クリスマス・ローズ。
追憶の花を名乗った女が、突きつけてきた絶望。

5 夢の終わり

5 夢の終わり

「……ここが、潮時なんでしょうね」

静かに響く、深い寝息。眠ったままのクロを部屋のベッドに寝かせて、アスターは独り笑う。

荒らされてしまったのか、貰い受けてきた本が散乱している。机の引き出しも乱雑に開け放たれたまま放置されていた。布団は野盗たちが使ったのか、汗と酒と泥の匂いが染み付いている。

布団だけを変えて、後はそのままの光景。その中で安らかに眠っているクロを見ると、これは全てクロが散らかしたのではないかと思えてくる。感じたのは、数年前見たような気のする、どうしようもないほどに懐かしいデジャブだった。

小さい頃——本当に小さい頃、怒ったクロが暴れてこんな感じになったのだ。何年前だったかもう思い出せない。だけど、今となつては懐かしい思い出だ。大人しくなったクロが、今だけはあの頃に戻ったような気がする。

それは馬鹿馬鹿しいまでに愚かな妄想だった。

時間は戻らない。当たり前のことだ。後悔してももう遅いのだ。絶望は始まった。ここが終わり。ここが終着点。

全て黙っていた宿の主人。何も知らないお手伝い。現れてしまつたりピーター。

真実を知ってしまった者が、『楽園』から持ってきた絶望。

そのどうしようもない痛みから逃げるように、アスターは天井を見上げた。

「……これで、終わりなんですよ」

口からこぼれる自嘲は、全身を掻き毟りたくなるほどの激痛を残した。

真実を知った。それは罪を知ったということ。

真実を知られた。それは罰を受けなければいけないということ。

何人も何十人も何百人も殺し続けた、その罪に罰を。

誰にも知られたくはなかった。だが、知られてしまった以上、ここで終わりなのだ。

これは自分で決めた、そういう最後の取り決め。

これ以上、みつともなくしがみつかないように。

安らぎを手になんかしないように。

「……………楽しい、夢でした」

クロの寝顔を、最後なのだと一瞥して。

八年間と決別するために。

アスターは、絶望を嚙下するように、激痛を堪えて呟いた。

「……………夢はもう、終わりました」

もう、誰にも取り繕う意味なんてない。

クロの部屋から去っていく。足取りはこの上なく重い。

ダイニングで、絶望が待っている。

ダイニングのテーブル。食事時以外は使われないだろうテーブルは、野盗どもに荒らされたせいかひどくボロボロになっていた。ナイフを何度も突き刺した跡が残っている。イスは適当なところに吹き飛ばされており、暖炉も一部破壊されていた。

「……………大変だったみたいね」

廃墟じみたダイニング。テーブルに肘を着き、彼女は感情のない声でそう言った。この惨状に対して呟いたのだろう。それにアスターは苦笑を返した。

まだ笑えるという事にも、苦笑した。

「これから先のほうが……………大変ですよ」

真実の全てを曝け出すのだから。誰も知らない『天国』の正体を。

「ええ……ええ、そうね。知られたくもない恥部を、曝さなければならぬんだもの」

苦笑に彼女は、皮肉そうに頷いて見せた。

彼女はもうわかつている。ただ答え合わせがしたいだけなのだ。その答えが、たとえどんなに最低なものであつたとしても。

「ただ……その前に一つだけ、確認させて」

間を取るように、彼女は呟く。

その問いが何なのか、問われる前からアスターはわかつていた。

「あの子は、知っているの？」

クロが、その真実を知っているのか。

知るわけがないのだ——おつちよこちよいで、お人よしで、ただのいい子だけのあの子が知るわけが。『天国』は誰もが幸せになれて、戻ってくるはずがないほどこいいところだと信じてるあの子だから。

「いいえ……あの子は、何一つ知りませんよ」

だから、問いかけの声に即答する。それに彼女はため息をついた。予想通りだったのだろう。そして、それゆえに困っているのだろう

……

問いかけは、責めるような声で発せられた。

「それは、あなたにとって幸福なこと？」

「知ったら傷つくとわかつているのなら……わざわざ、知らせる必要もないでしょう？」

「そして、これからも知らせない、と？」

頷く。それしかあの子を傷つけない方法はないのだから。

「……あなた、これからもこんなことをずっと手伝わせる気なの？」
静かな怒りを含んだ声。それは憎悪にとてもよく似た声だった。それを真正面から受け止める。受け止めたまま、首を横に振った。それに彼女は目を吊り上げる。その答えが彼女の逆鱗に触れることなど、彼にはわかつていた。

「戯言言ってるんだったら、張り倒すわ。私が怒ってるのはわかっ

てるわよね」

「当たり前ですよ……誰のために怒っているのかも」

そんなの当たり前だった。自分のことのために怒っているのだったら、わざわざクロの事など聞きはしない。クロのために怒っていることなど、言われなくてもわかっている。

「だったら……！」

「ええ……わかっていますよ。あの子がこんな残酷な宿じゃなくてどこにでもある村で暮らさせてやればいいなんてことは。わかっているですよ」

それがわかってるからこそ、アスターは自分を最低だと理解できていた。愚劣なのだと理解できていた。どうしようもなく恥知らずで、どうしようもなく愚かで、どうしようもない馬鹿なのだと。

それでも、アスターは喉から声を絞り出して呟いた。

「……だから、あなたにあの子を預けたい」

「……ん、う」

お腹すいた。

目覚めた瞬間、まず空腹が気になった。思い出す——そういえば昨日、何も食べていない。アスターは魚を釣ってくれただろうか。焚き火の匂いはしないから、たぶん一匹も連れなかったのだろう。彼らしいといえば彼らしいことだった。

寝ばけ眼をこすりつつ、ゆっくりと辺りを見回す。辺りは暗く、まだ何にも見えてこない。まだ夜のようだ。ということは、何も食べてないのは今日のことだったのかもしれない。近くにアスターの気配はない。魚釣りでもしているのか、はたまた森に果物でも取りに行ったのか。

考えて、はたと気づく。

（……魚にこだわらなくてもよかったんじゃない！）

そうだ、果物である。この森なら、どの辺に食べられる果物の木があるのかある程度把握している。冬じゃない以上、探せば何かしら果物があるはずだったのだ。この際山菜でもいい。それに気づかない辺り、やっぱりアスターは抜けている。

（何で気づかないのかなあ？ 考えればわかるのに）

まあ、それに気づいて森の中を駆け回っているのかもしれないが、未だに魚を釣ろうとしているのなら、ちょっとばかりからかってやらないといけないかもしれない。そうだ、からかうべきだ。そう思うと、眠気がどこかへと吹っ飛んでいく。そしてふと首をかしげた。……布団？」

暖かい布団に包まって、寝ていたらしい。避難小屋とは名ばかりのボロ小屋——この前改修するって言うたのに、まだあのままだった——に、こんな暖かい布団はないだろう。疑問にかしげた首を戻して、クロは目を細めて辺りを注視した。闇の中、少しずつ輪郭が浮かび上がってくる……

何故か、散らかっていた。

「へ？」

思わずそんな素っ頓狂な声を上げる。まったくもって理解できない。あのボロ小屋に散らかるようなものがあつただろうか。自分が知っている限り、そんなものはないはずだった。しかもよく見ると、散らかっているもののほとんどは本的那样だった。

わけがわからず——それでも考えられる可能性を呟く。

「あたしの……部屋？」

散らかっているが、間違いはない。本棚が妙なところにあつたり、机の引き出しが開きっぱなしだったりしているが、間違うはずがなかった。

ということは、寝ている間にここに戻ってきたということなのだろうか。

「……！」

ふと気づいて、クロはベッドから飛び上がった。慌てて辺りに人

の気配を探す。散らかされた理由は、昨日やってきたあの悪党たちだろう。この部屋に自分も知らない落とし穴があったし、もしかしたら誰か近くに隠れているかもしれない。

息を殺して、数十秒数える。無音の中に誰かがまぎれていないか探して——ため息をつく。どこにも、誰もいなかった。それに胸を撫で下ろしてから、不安が戻ってくる。

「アスター、どこ行っただろ」

宿に戻ってきたということは、この宿のどこかにいるということなのだろうが。この惨状から考えるに、掃除でもしているのかもしれない。だとしたら、掃除嫌いの彼はさぞかし苦戦していることだろう。いい気味だと思う。普段そういうことをサボっているから、いざとなったときに困るのだ。

アスターの困ってる顔を見るのは、少し楽しい。だから捜しに行こうとして、はたと止まる。

「……………」

助けてくれたことを思い出したのだ。だというのに、笑いに行くのは何か違う。いつも気にしていないが、あの時アスターがいたからこそ、今日の不安も何とか我慢できたのだ。彼がいてくれたから、安心して眠ることができた。

だったら、感謝するべきだ。ならするべきことも一つだろう。

「手伝わなきゃ…………困ってるんだもん、ね」

自分に言い聞かせるように呟いて、ベッドから降りていく。部屋の散らかり具合も十分ひどかったが、きっとダイニングのほうかひどいのだろう。耳を澄ませば、そちらのほうから物音が聞こえてくる。ということは、アスターはそっちにいるのだろう。部屋から出る。

聞こえてきたのは、物音ではなく女性の声だった。

「…………あなた、自分で言ったことの意味わかってるの？」

お客さんだろうか——そう考えてから、否定する。どこかで聞いたことのある声だった。

「それって、すごい残酷なことよ。本当にわかっているのなら……最低って言われても、仕方ないわ」

そしてその声は、どこか誰かを責めるような、そんな強い感情を帯びた声だった。その声で思い出す。あの時はもつと優しい声だった。だが、間違いない。

（リコリス……さん？）

綺麗な銀髪の、かっこいい女の人。あの人が、たぶん怒っていた。（でも、誰に……って、一人しかないよね）

アスターしかない。怒られるということは、何かとんでもないことをしたのだろう。

（……でも、最低って言われるほど最低なことって何だろ？）

考えてもわからない。大切なものを壊した、とかならありえそうな気もしたが。あの声からするに、もつと根本的なことを責めているような気がする。よくわからないが、アスター自身を否定するような。

だが、それよりも驚いたのは、その否定をアスター自身が肯定したことだった。

「わかっていますよ……そんなの、わかりきったことですから」

沈んだ声で、弱々しく。アスターにしては珍しく、歯切れのない声だった。

気づけば、忍び足でクロはダイニングへ近づいていた。廊下からこつそり、ダイニングを覗き込む。荒らされたダイニングの中央でアスターがリコリスさんと話しこんでいた。

お互いに、寒気がするほど暗い顔で。

（何の話してるんだろ……？）

聞き耳を立てる必要もなく、その声は聞こえてきた。

そして、聞こえてきた言葉に。

「私には……元々、あの子の親にも、兄にもなる権利なんかなかった。なつてはならなかった……それだけの話ですから」

心臓が止まった——そう錯覚するほどに、硬直した。

「……まあ、いいわ。あなたの要求、受けてあげる」

それは、絶望の中にあつた唯一の救いだった。

感謝の言葉さえ出ない。ただ、頭を下げることしかできなかった。これで、あの子はここから解放される。後は適当な言い訳を考えるだけだった。それ以降は会わなければいい。それがあの子のようになる。

残酷で最低でも、ここにいるということ以上に残酷で最低なことなどないのだから。

「……これで、心残りはなくなつたわ。本題に移りましょう」

「ええ……私にも、もう心残りはない」

これで、夢を諦めることができるのだから。自分にとつての絶望は、クロにとつての希望なのだ。こんな罪しかない牢獄にいてはならない。

ため息をつく——それは或いは安堵の息だったのかもしれない。希望への嘆息だったのかもしれない。絶望への諦めだったのかもしれない。どれでも大差はなかった。

そのため息を最後に、夢の全てを諦める。後に待つのは、ただの答え合わせだけだった。

「あの『楽園』が、本当は何なのか……でしたね」

「ええ……だけど、もう私にだつて検討は付いている」

そう言つて彼女はナップザックを探り出す。その光景を眺めながら、アスターは人事のように考えていた。

考えればわかるはずなのだ。こんな簡単なことなどないのだから。人の願いなど人の数だけあるのだ。欲の数など数えることはできない。誰もが様々なことを願っている。誰もがいろんなことを望んでいる。願いに同じ形はない。欲に同じ型はない。どれも全て、形の違うものでしかない。

その全てを、『天国』なら叶えてくれるというのだ。それがどれだけ馬鹿馬鹿しいことなのか、考えればわかる。たかだか一つの森の中央部分。そう広くもない場所で、全ての願いを叶えるものがあると本気で思っているのか。

答えは、ただだけ夢を見てもノーでしかない。

誰もがみな、『試練』という超常現象のせいでそれを信じ込んだだけで。

テーブルの上に何かが置かれる小さな音——ガラスの小瓶。中にあるのは乳白色の液体。見覚えのあるそのガラスを指で弄びながら、彼女は無感動に囁いた。

「『マイ・ドリーム』……『私の夢』。名前のまんまよね……笑いたくなるくらい」

それは麻薬だった。更に踏み込んでいうなれば、揮発性の高い強力な幻覚剤だった。使用者に望んだものを、何でも現実のように見せるという。それは現実から逃げ出すのにもっとも適した道具だった。麻薬が切れるまで、『私の夢』はずっと続くのだから。

その麻薬の存在さえ知っていれば、誰でも理解できるのだ。

誰もが満足できるタネを。

残酷な神が作り出した、どうしようもないほどに優しい地獄を。

優しい神が作り上げた、この上なく虚しい天国を。

「誰も帰ってこない理由も、全ての願いを叶えてくれる理屈も、これ一つで解決できるものね。あの白い霧。あの中に『天国』が広がってるんだと思ってた。だけど、現実は違った……あの白い霧は、霧なんかじゃない」

沈痛な何かを堪えるように、彼女は唇を噛む。

「あの霧が、『天国』の正体なんでしょ？　そしてあの霧の正体は……『マイ・ドリーム』。現実のような夢を見せる麻薬だからこそ、願いは叶ったと思い込んで……だけど、本人は麻薬に飲まれて死んでいく。『天国』に抱かれて……死んでいく」

その通りだった。それが全ての答えだった。

優しい、最低。願った夢を見せて。欲した世界を与えて。

その夢に溺れながら、旅人たちは死んでいく。

それはただの蟻地獄。

昔、誰かが夢を見て死にたいと言った。

『楽園』とは、それを実現する場所なのだ。

『楽園』は、生者が望みを叶えるために向かう場所。『天国』は、死者が最後に向かう場所。

それがわかっていたからこそ、アスターにとってあの場所は『天国』ではなかった。

そしてそれがわかっていてなお、止めることができなかったのだ。何人も、何十人も、何百人も。見殺しにすることしか、できなかったのだ。

それが罪。

それが、アスター「ストケシアを名乗る理由」。

「何で……知ってて、止めなかったの」

吐き捨てられた、彼女の言葉。弾劾は、ただ残酷の一言に過ぎた。

「……どんな言葉を告げれば、止まってくれたんですか」

ポツリと、誰にも吐き出したことのない言葉を呟く。それは弱音だった。

今まで吐いたこともない、それはどうしようもないほどに甘ったれた弱音だった。

「死んでもいいから、願いを叶えたいって……そういう人たちがかりでしたよ。止めようと思いましたが——ええ、思いましたよ。全ての真実を教えた。それでも止まらない。この先には何もないと言いました。それでも信じてもらえない。死ぬ覚悟で来てる人間を止めるために、こちらでも死ぬ覚悟で門番じみたことをしたこともありましたよ。森で野盗ごっこをしたこともあります。身包み剥いで、必要最低限だけ残して……それでも止まらないんですよ？」

本来の宿を建てた理由も、それに追従するものだった。

止めようとしたのだ。止めるために泊めて、その一夜で説得しよ

うと思ったのだ。

だが、どれも失敗でしかなかった。自分の言葉がヘタだったのか。そう思っただけでも何度も挑戦した。結果が全て惨敗だ。誰一人として、止めることなんかできなかった。

届かない声。

だから代わりに見届けようとしたのだ。

男と女の――二人の顔が目に見えた。

止めることのできなかった、最大の絶望をアスターに孕ませた二人。子供を独り遺して、忠告も聞かず旅立って行った二人。

「家族よりも、村を救うことが大切だった人に……いったいどんな言葉をかければ止まってくれたんですか」

たった一人の愛娘を、勝手な願望で連れまわして、勝手に託して帰ってくると言ったのに、もう戻ってなんかこないのに。

それでも、娘は待ち続けている。

もし過去に戻るのなら。きっと、あの時が自分にとっての分岐点だったのだ。

村のためだと自己を犠牲にして、結果死んでしまった、あの夫婦を止められなかったあの時が。

「皆同じだ。欲に溺れて、願いに殺される。夢を見てる間に、夢に食われる。何も残ってなんてくれない……『楽園』を目指した人は、もう帰ってなんかこない」

辿りついたら……もう、そこで終わりなんですよ。そう彼は笑った。

帰ってくると言ったのに。

聞き取れなかったけれど、約束が確かにあったのに。

……村を救うと、意気込んでいたのに。

ただ無感動に、呟いた。

「死ぬしか、ないのだから」

感情を殺して、ただ無感動に。

――そして、この時もまた分岐点だったのではないかとも思った

のは。

ギシリと、廊下で何かが軋んだ音を聞いたからだった。
未だ聞いたことのない、床のきしむ音。

「アス、ター……？」

それに気づいたとき――

（……ちようど良かったのかもしれない）

確かにアスターは、自嘲の中で安堵した。

これが終わりなら――この終わり方なら。

（嘘つきに騙されていたと教えるのなら）

「……嘘、だよな？ いつもみたいに、馬鹿馬鹿しくてくだらない

……いつもの嘘、だよな？」

彼女を失望させるのには、ちようど良かったのかもしれない。

泣きそうな――いや、何かにすがりつくような瞳。クロが浮かべていた感情。

それを見据えて、アスターは微笑んだ。

「……嘘なら、どれだけ良かったんでしょね」

いつもどおりに、皮肉げに。その表情が酷薄に写ってくれることを期待して。

「……………！」

泣きそうな顔が悲痛に彩られる。それは心臓を鷲掴みにされるほどの激痛だった。

八年間の親愛を、どうしようもない裏切りで傷つける。言葉は血と同じ味がした。知らずの内に口の中を噛み切ったのかもしれない。それでも良かった。

優しい思い出も、辛い記憶も、残酷な過去も。

何もかもを裏切るのに、それはとても似合う味だから。

その味とともに、アスターは呟いた。

「ちようど良かったんですよ。このタイミングが、何よりも」

誰も帰ってこないはずの、旅人の帰還。イレギュラーは何もかも全てを暴いていった。絶望の瞬間は、この上ない絶妙のタイミング

だったのだ。

終わりを告げるのにも――新しい始まりを告げるのにも。
ゆっくりと立ち上がる。

「『天国』なんてどこにもありはしない。『楽園』なんて地獄の別名だ。旅人は誰も帰ってこない。求道者の最後は全てが死だ。誰も救われない……誰もが等しく無駄死にですよ」

夢の終わりを告げるのにも。

孤独な暮らしを始めるのにも。

ちょうど良かったのだ。

誰かに名前で呼ばれる日々が、終わる。また元の状態に戻るだけ。
「あなたの親も、帰ってくるはずなんかなかったんですよ。そんなの……わかりきったことだ」

その痛みに反比例させるように、アスターは笑った。クロは泣いていた。

失意と絶望のどん底に、信じていた者に叩き落されて。
泣いてはならない。八年の絆が壊れていく。それでも、自分だけは泣いてはならない。

「なんで……教えてくれなかったの」

涙にかすれた問いかけは、聞き取る前に消えてしまつのではないかと思うほどに小さかった。

何故。

何故、天国が地獄だと教えてくれなかったのか。

何故、親が死んでいることを教えてくれなかったのか。

その問いかけに、アスターは答えなかった。答える意味を感じなかった。

「教えれば……何かが変わりましたか？」

あなたが絶望するとわかっていたから。その真意を押し隠す。言っても意味などないのだ。知ってしまった今では。だから真意を隠して、嘘だけを真実にする。

「この際正直に言いましょ……私は、あなたのことなんかどうで

もよかった。どう思っていようと……どんな行動をしようと」

「……………」

悲痛な声はもう上がらなかった。きつと、愛想を尽かしたのだろう。

「なら……なんで、あたしを育てたの」

かすれた声も、もう感情の色を帯びない。冷たい声で響くだけ。聞いたこともない声は、冷たく思い出を切り裂いていく。

それでもアスターは笑った。笑って、自ら『最低』を呟いた。

「ただの気まぐれですよ。捨てても良かった。『天国』に投げ入れに行こうか、迷うくらいにはどうでもよかったんですよ。赤の他人なんですから」

「……………」

最低への回答は無言。瞳の色が、無感動から憎悪へと切り替わる瞬間。

どす黒い何か光るのを見ながら、アスターは微笑んだ。

（これでいい……これで）

彼女の中で、自分の価値がゼロになってくれるのならば。

もう彼女にとっていない存在になってくれるのならば。

これでいいのだ。

それが救いのないこの宿での、唯一の救いになるのだから。

「どうでもよかったんですよ、あなたのことなんか。それは……今でも、変わらない」

だから、笑顔で突き放した。笑顔で思い出を刺し殺した。クロはもう、その表情を動かさない。憎悪に固定された、濡れた瞳を向けてくるだけ。

怒りに叫ぶだろうか。その果てに殺意を抱くだろうか——抱かないのであれば……それはただの愚か者だろう。

そして、そんな愚か者はどこにもいなかった。

「……アスターなんか」

喉から搾り出されたのは、憎悪に濁った灼熱の敵意。

八年の思い出が、数分の憎しみで上書きされた瞬間。

絶望の果てに、希望が見えた一瞬。それは断絶の言葉だった。

「アスターなんか……だいつ嫌いッ!!」

幼稚な言葉。そう叫んで、向けられた背中。逃げるように遠ざかっていく、小さな小さなおいしい少女。長いようで短かった夢は、最低にして最高の形で崩れ去っていった。

ボタンと、クロの部屋が大きく音を立てるのを聞いて。ようやくアスターは息を吐いた。

終わったのだ。これで。

「……これでよかったの？」

追憶の花を名乗った女が、弱々しい声で問いかけてくる。それがあまりにもおかしくて、アスターは小さく微笑んだ。

「ええ……良かったんですよ。もう、クロがこの宿に未練を残すこともないでしょうから」

クロがここにいる意味などなくなったのだから。もうクロが彼らを待つ理由などないのだから。

こんな宿にいる意味はもう、存在しないのだから。

「本当に、いいタイミングでしたよ。教える必要はありませんでしたが……これが一番、後腐れがない。あの子との関係は……これで終わりました」

「そう……なら、いいわ」

そう呟いて、彼女はイスから立ち上がる。それと入れ変わるように、アスターは倒れこむように座り込んだ。

「最後に聞くけど」

歩き出す直前、彼女は小さく問いかけてくる。

「どうでもよかったって、本気で言ってた？」

それに返したのは、苦笑だった。

「本気で言えたら、どれだけ楽だったんでしょうね」

遠まわしな言葉を選んで、苦いものを堪えるために笑う。満足したのかはわからない。凝り固まった無表情。それにアスターは笑っ

てみせた。

「……あの子のこと、よろしくお願いします」

「ええ……笑顔は保障できないけどね」

そう呟いて、彼女は歩き出す。廊下へと——クロの部屋へと遠ざかっていく彼女から目を離して、アスターは天井を見上げた。明かりのほとんどない薄闇。

いつもクロと見上げていた天井。いつもクロと笑いあったダイニング。

自分たちの家。

「広く感じるようになるんでしょうね……きっと」

寂しいと感じてはならない。あの子を旅立つよう仕向けたのは自分なのだから。

わざわざ彼女に請って、ここから連れ出して普通の暮らしをさせてくれるよう頼んだのだ。

何も知らない自分じゃなくて、この外を知っている誰かを待ち続けて。ようやく現れてくれたリピーター！

夢の終わりと絶望を告げてくれた人に、ようやく希望を託せたのだ。悔いはない。

何も知らないクロだから、外の世界では苦勞するだろう。あの子が住むことになるのは町だろうか。それとも村だろうか。そのどちらかだったとして、うまく暮らせるだろうか。料理はできるはずだ。洗濯だって掃除だってできる。家事一般なら何でもできるだろう。だが、それは子供がやることではないのだ。もつと子供らしいことを教えてやるべきだった。もし村や町に住むことになったとして、あの子は同世代の子供たちとうまくやっていけるだろうか。

何も教えてやれなかった。それを詫びる中で、大丈夫だろうとも思う。明るいクロのことだ。ちよつとやそつとの困難では立ち止まらないだろう。ここでの八年間よりも、これからの時間はきっと有意義になるはずだ。

不安に思うが、それと同じくらい安心している。イスの背もたれ

に全てを預けて、アスターは脱力した。

肩の荷が降りた気がしたのだ――夢は覚めてしまった。もう、あの子との夢が終わってしまうのだと怯えることもない。あの子を哀れんでしまうこともない……

（……は、ハハ）

痛いな、と思った。

もうあの子との関係は終わったのだ。

考えても意味などない。ただ覚えていてだけでいいのだ。旅立ってしまった求道者たちと同じように。過去にそういう人がいた。そう覚えているだけでいい。

――痛いな、と思った。

過去形にしてしまえばいいのだ。今までだってそうやって折り合いをつけてきた。山が築けるほどの数、見殺しにして。それで自分が壊されないように、いつも過去形にしてきた。これもそれと同じことなのだ。

どうしようもなかったのだ。

だから諦めればいいのに。

――痛いなと、思うのをやめることができなかった。

「……………」

思わず全身を掻き毟りたくなる。全身に爪を立て、何もかも引き裂きたくなる。どうしようもない痛みから逃げるために、どうにかなる痛みに溺れたくなる。

自分で自分の首を絞めていたのだ。あの子を欺き続けたことに、良心が呵責を起こしそうになって。真綿でより強く、心を絞め付けてきた。

それが終わって、息ができるようになって。

なのに、息ができない。

息を吸い込んで、吐く。何度もそれを繰り返す。肺は動く。生命活動は停止していない。
なのに、息ができない。

息ができないなどというのは、ただの幻想に過ぎない。そんなことはわかりきっていた。窒息することはない。溺れてもいない。肺は動いている。息はできている。

なのに、苦しかった。

「……………」

大嫌いだと、初めて言われた。

八年間暮らしてきて、嫌いだと言われたことは何度もあった。そのたびに苦勞して仲直りして、それもいつか慣れてきて。ようやくその言葉にも慣れてきたのに。

なのに、苦しかった。

「仕方ないじゃないですか」

仕方がないから、その苦しさを受け入れるしかない。

「終わりはこの形しかありえなかったんですから」

いつかは言わねばならなかったのだ。

「こうなるのは、前もってわかってたことじゃないですか」

いつかは別れねばならなかったのだ。

「ただ、八年も続いてしまっただけじゃないですか」

十歳になる前には終わると思っていたのだ。

「八年なんて短いじゃないですか」

その何倍も、何十倍も生きてきたのだから。

「たかだかそれくらいなんですから、どうでもいいじゃないですか」

これから先も、その何倍も生きていかねばならないのだ。

「八年くらい、どうってことないじゃないですか」

だから、こんな感情は間違いなのだ。

痛いなどと。苦しいなどと。そう思うのは、間違いなのだ。

終わりを告げたのなら、その全てが終わってしかるべきなのだ。

もうクロにとって自分の価値はないのだ。だから自分も、クロの

価値をなくすべきなのだ。

なのに。

なのに、無様に失敗している。

何度繰り返しても、失敗している。

終わってくれない。感情に整理がつかない。何かが軋み続けている。何かが痛い。肺は苦しくないのに、何故か胸が苦しい。壊れてしまったように、何かが頭の中に流れ込んでくる。

止まらない。止まってくれない。

終わりを告げたのに。

もう終わってしまったのに。

自分が完膚なきまで終わらせたのに。

「……は、はは」

終わってなんて、くれなかった。泣き笑う。泣いている自分を笑った。止まらない。溢れ続ける涙が止まらない。

いつか止まってくれるだろうか。止まってくれなかったら困るだろう。もしかしたら干からびてしまいかもしれない。実際はそうなる前に涙が止まるだろう。人体はそういう風にできている。

いつかは止まってくれるだろう。

仕方がないから、汚れた涙を流し続けた。拭いてもキリがないから、ただずつと流し続けた。

無様だと自分を笑いながら、どうしようもなく泣き続けた。

聞こえてきたのは、悲鳴じみた声。

——無様すぎたから、考えてもいなかった。

「あの子……いないわよ！」

クロが、天国に向かうかもしれないことに。

悲鳴を上げたのかもしれない。驚愕したのかもしれない。或いは何も思い浮かべなかったのかもしれない。

体は自然と動き出していた。イスを弾き飛ばして走り出す。クロの部屋の扉は開け放たれたままだった。迷わず部屋に飛び込む。アレだけのことを言ったのに。それを自覚しながらも、どうすること

もできなかった。

散らかったままの本。腹を見せたままの引き出しと机。何故か吹き飛んでいる布団。

開いたままの、窓。その隣に佇んでいた、女。
どこにもいない。

クロがどこにもいない。

冷静な思考は既に全てを察してしまっていた。

避難小屋への通路は閉ざされたまま。誰も玄関から出ていったのだい。

クロは、独りで旅立った。どこにもない影を追うように、アスタ―は窓から身を乗り出した。目は足跡を探していた。そしてそれはすぐ見つかった。

乾いた地面に、風で消されてしまいそうな痕跡。

楽園へと、その足跡は向かっていた。

「――っ！」

今度こそ悲鳴を上げた――その自覚だけはあった。どんな声だったのか。どんな音だったのか。よくわからなかった。それでも、しなければならぬことだけはわかっていた。

それを咎めるように、声が響いていた。

「あの子は、助けるのね」

肩には熱が置かれていた――雪のように白い腕。だというのに、どうしようもなく痛い熱。その熱を追うと、彼女の体に繋がっていた。

「その手をどけてください」

理解できないままに、彼女を睨んだ。闇の中、彼女の表情は見えない。だが、無表情なのだとわかっていた。

それでも声は、からかうように笑っていた。

「どけないわ……これ、嫉妬とは違うわよ」

「離してください！」

何故、自分はこんな場所で止められている。

助けに行かなくてはならないのだ。死なせるわけにはいかないのだ。こんなくだらなないことでふざけている場合ではないのだ。

だが、熱は離れない。からかう声は消えた。

「何で助けようと思うの？ もうあの子との関係は終わったんでしょ？」

ただ、真摯な問いだけが響いていた。

「それで助けて、どうするつもり？ もう終わったのよ？ もう元に戻るはずもないじゃない。それはあなたにもわかってるんでしょ？」

その問いかけは、まるでカビのように耳にこびりついた。

何故助けなければならないのだ。もう何人も見殺しにしたではないか。今更一人増えたところで変わることなどないではないか。別に何も変わらない。何も変わるはずがない。覚えていなければならぬ人間が一人増えるだけだ。何も変わらない。

誰かがそう囁いていた。冷静な自分がそう囁いていた。

「あの子は自分で夢を見に……死に行ったのよ。別にいいじゃない。ほっときなさいよ。それを止める筋合いがないことなんて、わかってるんでしょ？」

当たり前だ。そうやって、今までも見殺しにしてきたのだから。そうやって納得してきたのだ。今までずっと、ずっと、ずっと。

だから今回も同じなのだ。見殺しにすればいい——いや、今回は見送ってすらいない。ただ死んだことを覚えているだけでいい。

それで、何もかもが終わるのだ。

——終わって、しまふのだ。

「わたし、は……！」

自分は。何だと言うのだろうか。

あの子にとっての何だったと言うのだろうか。ひとえにただの悪だろう。親でも兄でもない。

ただのエゴイスト。それ以外の何でもなかった。

そしてそれ以上の何者でもないだろう。あの子にとって、自分は

きつと悪だったのだ。

「私、は！」

それでも、もう止まる事はできなかった。熱を振り払う。床を蹴って、窓から飛び出す。クロが旅立ってから、十分も経ってはいないだろう。

追いつけるはずだった。走り出せば、楽園に辿りつくまでに間に合う。

それでも、アスターは動けなかった。

「……………」

声なき悲鳴さえ上げられない。『試練』にただ絶句する。

もし人事だったのなら。もしこの『試練』に当たったのが自分ではなかったのなら。きつと笑えたのかもしれない。そう思うほどに、最低がそびえ立っていた。クロが旅立った瞬間に、きつと切り替わったのだろう。

わざわざ、自分を来させないために。

「……今なら、あなたの気持ちが理解できるわ」

背後から聞こえてきた声には、同情が含まれていたのかもしれない。だが、そんなことなどどうでもよかった。

その『試練』に名前なんてなかった。それは試練ですらなかった。目の前にあるのは、高濃度の白い霧。

『マイ・ドリーム』の、霧だった。

「あなたはもう願ってしまった。あの子を救いたいと……わかってるんでしょう？ その霧に入ったらもう、あなたは溺れるしかない。あの子を救ったという夢を見て。夢に溺れて、死ぬしかない。」

「あなたは、帰って来れない」

それは死刑宣告だった。それは試練でも何でもなく、ただの地獄でしかなかった。

背後で、彼女は笑う……

「神様って残酷よね……これ、要は死ねって言ってるんでしょ？」
その通りなのだろう。それとも、こっちに来るなと言っているの

か。

足は震えていた。寒くはない。体温は平常だ。発汗もない。ただ怖かった。

この『夢』に飲まれて現実と夢の境界を失うことが。

この『夢』に飲まれて、死ぬことが。

そして何よりも。

——願いに溺れて、あの子を救えないことが怖かった。

「……」

それでも、進むしかなかった。

「ここで待っていてください。もし……もし、帰ってこなかったら。その時は、この宿を燃やしてください」

生きるか、死ぬか。死しかないのに、そこに生を見るのは愚かに尽きた。

もしなんて、そんな言葉に意味はないだろう。

それでも帰ってくるのだ。絶対に。

「最後に聞くわ……何故、助けるの？」

何故。

何故、あの子を助けるのか。

何故、あの子だけが特別なのか。

その答えだけは、よくわかっていた。

痛みと苦しみと、絶望。この八年が、何をもたらしてしまったのか。

馬鹿馬鹿しいことでしかない。それを理解していたからこそ、捻くれ者は、婉曲な言葉を選ぶしかなかった。

「綺麗な月を……眺めていたいんです。それだけですよ」

それは、知る人にしか通じない言葉。本来なら、一人では完成しない言葉。

通じないのなら、通じなくてもいい。

返ってきたのは、苦笑の気配だった。

「やっぱりあなた、ロマンチストね。それとも素直に言えない臆病

者が……いいわ。その殺し文句、気に入った」

そしてすぐ、苦笑を消して呟いてくる。

「一日だけ待ってあげる。一日経って、帰ってこなかったら……言うとおりにするわ」

「よろしく願います」

言葉だけの礼を遺す。

覚悟はもうできていた。もう、躊躇う必要も意味もない。

走り出す。あの子はきつと走っているから。だからこの霧を掻き分けるように走っていく。

視界は白に染まっていく。

視界は黒に染まっていく。

視界は虹に染まっていく。

「」

悲鳴を上げたのかもしれない。

あの子の名前を呼んだのかもしれない。

何も喋れなかったのかもしれない。

意識が消えてなくなるのに、そう時間はかからなかった。

6 その花の名は。

6 その花の名は。

「……………」

何か、ひどく長い夢を見ていたような気がする。

薄く目を開く。眩しい日の光。それに起こされたい——いつの間に眠ったのか、記憶になかった。眠っていたのではなく、気絶したのかもしれない。そんな大事をしていた記憶もなかったが。どちらにしろ、目を開くのはこの上ない重労働だった。

目が眩む白しかない世界が、少しずつ色褪せて景色を取り戻していく。木と雑草だけの世界。見慣れたといえば見慣れた光景だったが、そこで彼はふと首をかしげた。木に背中を預けて眠っていた。まあ、それは別にどうでもいいことだが。

ポツリと、自分でも間抜けだと思いつつも呟く。

「……………知らない、森？」

名無しの森ではない。あの森の光景は、全て記憶に残っている。いろんなことを画策して、そのために全てを頭に叩き込んだ。だから、あの森は全て知っている。

この光景は知らないものだった。

ということは……………本当に、気絶でもしてどこかに運ばれたのかもしれない——あの森の外に運ばれるというのも、考えにくいことはあったが。そもそも運ばれたというのなら、こんなことも知れぬ森に放置していくはずもないだろう。

「……………」

ため息をついて、彼は記憶を探るために目を閉じた。何が思い出せるのだろうか。何を思い出さねばならないのだろうか。それは自分にもわからなかったが、何かを思いださなければならぬことだけはわかっていた。

そして、ふと気づく。

(……私の、名前?)

思い出せない——のではなく。

そもそもそんなものがあつたのかと思う。今までは宿の主という肩書きがあつたから、名前なんて必要としていなかった。だから、自分に名前はなかつたはずだが。それと同じくらいの違和感として、誰かに名を問われた記憶がある。そして答えた記憶も。ただ、それだけが思い出せなかつた。

辺りへと視線を彷徨わせる。それを知る手がかりがあるのではないかと信じて。そしてすぐにそれは見つかった。

木の根の近くに、花が咲いていた。

花の名前。

「ああ……そうだった」

誰かに問われて、咄嗟に思い浮かんだ花の名を答えたのだった。

だが、誰に。

そして何の花の名を?

その花は自分を表してくれる花言葉を持っていたはずだった。咄嗟に閃いたくせに、皮肉なまでに自分に似合いすぎた花。思い出せない。思い出さなければならぬのはわかつているのに、思い出せない。

「……?」

ふと人の気配を感じて、彼は顔を上げた。そう遠くないところに、その人影はあつた。

「あ、おきた」

こちらを覗き込むようにしてしゃがんでいた。小さな少女だ——四歳か五歳くらい、とても幼い小さな少女。こちらの顔を覗き込んで、花のように笑っている。

「ほらほら、おきたなら立つ、立ったならかえる! もうすぐおひるごはんだよ?」

急かされて彼はゆっくりと体を起こした。起こしてから、ポツリ

と呟いた。

「帰る……って、どこに？」

あの宿に、ではないだろう。あの宿なら、この子は帰るなどとは言わないはずだ。

途切れていた記憶が繋がっていく。発言をそのまま受け取って、少女はポカンとした顔を作っていた。それからすぐ、ポカンとした顔のまま尋ねてくる。

「……トリトマ、ちほー？」

「どこで知ったんですか、そんな言葉」

「おとーさんが、じつちやに言ってた！」

「あの人は……そういうことはせめて、娘のいないところで言うてくださいよ」

呆れると、少女は明るく笑う。それに苦笑して、彼は立ち上がった。

「まあ、言っても仕方ありませんし……帰りましょうか、ルピナス」

「うん！」

少女が——ルピナスがはぐれてしまわないように、その小さな手を握り締めて。

（……そういえばそうでしたね）

トリトマ。そう名乗ったのだった。

そして。

彼らは、帰ってきたのだ——『楽園』から。

掴んだ願いを握り締めて。その薬で村を救ったのだ。

ここは、『彼ら』の村だった。

小さな木造立ての民家の集まりを村と呼んでいいのなら、そこは確かに村なのだろう——実際は、村というより集落のような気がし

ないでもない。その境界については曖昧なような気がしたから、彼はそれ以上そのことについて考えるのをやめることにした。

小さい民家——ルピナスたちの家の囲炉裏の前で、彼は手を合わせた。それを真似るように、ルピナスもばちんと音を立てて手を合わせる。

「ご馳走様でした」

「ごちそうさまでしたー」

「お粗末さまでした、と」

それに微笑み答えたのは、ルピナスのお母さんだった。髪が長くて線の細い——そのくせ、何というか、『肝っ玉母さん』とでもいうような雰囲気を漂わせている、芯の強い女性。

今更のような気がしたが、彼は彼女へと曖昧な笑みで問いかけた。「とはいえ、本当に私までいただいてよかったですか？ 冬が近い今では、余所者に食事を分け与えるほど余裕があるとも思えませんが」

しかも、ここ最近は疫病騒ぎ。秋の収穫が邪魔されたわけだ。ただでさえ食料が少ないのに、それを分け与えるのはやっぱりどうかと思う。

「ああ、そんなのいいのよ」

だが、彼女はやっぱり笑うだけだった。手のひらをひらひらさせて、どうでもいいことのように言ってくる。

「うちには図体のでかい無駄飯食らいがいるから。一食減らしたところで死にやしないわよ」

「……うわ、地味にひどい」

十中八九、ルピナスのお父さんのことだろう。無駄飯食らいとはひどい言われようだった……が、宿での食事の量を思い出す。確かに無駄かもしれない。

「まあ、薬のおかげで幸い死人はゼロだったからね。冬に入る前にもう少し蓄えられるから、あなたが気にしなくてもいいよ。それに……」

「それに？」

「客人に食事を出せないなんて、かつこ悪いと思わない？」

彼女は茶目つ気たつぷりにウインクしながら笑ってみせる。宿の主としてそれに頷くべきなのか迷って、結局彼は曖昧に笑うことにした。

「ま、それはともかくとして」

拍手一つ。それで間を取って、彼女は外を指差し言ってきた。

「ちよつと大掃除するから、外で遊んでおいで。というか、家にいられると邪魔だわ」

「……ひとこと多いよ、お母さん」

げっそりとルピナスが呻く。それに苦笑して、彼はルピナスへと呟いた。

「それじゃ、行きましょうか……」

呟いて、名前を呼ぼうとして。

ふと彼は、理解できないままに誰かの名前を呟いていた。

「……クロ？」

「へ？」

聞こえていたらしい。ルピナスが首をかしげてそう声を上げる。クロ。誰の名前だったのだろう。ひどく懐かしいような、胸が苦しくなるような。そんなよくわからない感情を呼び起こす名前だった。そしてその名は、血の味のような焦りで彼の心を掻き乱した。知らないはずの名前。

だけど、知っているはずの名前だった——今まで、誰かを忘れたことなんてない。あの宿を建てた理由は。

だから、知っているはずだった。

「……どしたの？ トリトマ？」

数秒くらいの沈黙だっただろう。不自然なこちらを気にして、ルピナスは声を上げる。その声に呼び戻されるようにして、トリトマはその疑問について考えるのをやめた。

不誠実だったのだろう。その『クロ』という人物に対しては。だ

から忘れてしまったのだろう。

「何でもありませんよ。ちょっとした思い出の齟齬ってやつです」

「そこ？」

「気にしないでください。それでは行きましょうか……場所はルピナスにお任せします」

「うん、わかった！」

ルピナスは子供らしい無邪気な笑顔で頷く。

「いつてらっしゃい」

その声に送られるようにして、歩き出す。ルピナスの足に合わせ、ゆっくりと。

その最中、ふと思った。

何故自分は、『トリトマ』を名乗ったのかと。

「……ここは？」

わけがわからずに、ただその言葉を漏らす。村から離れた、人気がない森の中。ルピナスに連れられてやってきたそこは、とても綺麗な場所だった——綺麗以外の言葉が思いつかないほどに、圧倒される。知る人ぞ知る秘境という奴だった。

「ふっふっふっふ……あたしが見つけたお花畑なのだー！」

その反応に満足したのか、ルピナスは胸を張って笑う。そのままテクテクと彼女は走り出した——花の中を。

そこは色とりどりの花が咲き誇る、文字通りのお花畑だった。ルピナスの走った後を追うように、花弁が宙へと舞う。それは幻想的な光景だった。そして不思議な光景でもあった。

季節は秋である。秋の花ならまだ咲き誇っていても気にはしないだろう。

だが、その花の中にどう見ても秋には咲かない花が混じっている。季節を無視して咲き誇るお花畑。村の外れにあったのは、そんな

不思議な場所だった。

「トリトマー、こつちこつちー！」

花に囲まれて、ルピナスが手を振ってくる。とりあえず理解できないまま、彼もその花畑へと足を踏み入れた。何の変哲もない地面の感触。花を踏まないように気をつけて——それでも時々踏みつけたが——ルピナスの元へと歩いていく。ルピナスは花を天然のベッドにして、ゴロンと地面に寝転がった。

「服が汚れますよ？」

「べつにいいもん！ お母さんに洗ってもらうから！」

無駄に汚すと怒る様な気もしたが。まあ、ルピナスが気にしていないのだ。自分が気にすることでもないだろう。ため息をつく、ルピナスはクスクスと笑う。

「にしても、人がいませんね。そんなに村からは離れてないはずなんですが」

むしろ不気味ではある。見つけにくい場所にあるわけでもないのだ。人の寄らない花園。その中央で、ルピナスはあっけらかんと呟いてくる。

「いいところでしょ？ あたしがみつけた、あたしだけのばしょなんだ。だれにもひみつなんだよ？」

「……私がいいますか？」

「いいのー！ トリトマーはとくべつ。あたしのかくれがの、さいしよのおきやくさまだもん！」

よくわからないことを、嬉しそうにルピナスは語る。そのまま彼女は視線を高い空へと移した。彼もルピナスの視線を追うように空を見上げた。

蒼穹。広がっているのは雲ひとつない青空だった。太陽は高く、暖かい日差しを地面に落とす。かすかに鼻腔をくすぐる花の香りが安らぎを運んでくる。

「ここだねるとね、いいゆめみれるの。だからあたしはここがすきな」

「夢？」

聞き返す。と、ルピナスは目を閉じて、花の香りをたっぷり吸って。この空気を楽しむようにして微笑んだ。

「ごはんたべるゆめとか！」

「……それはむしろ悲しい夢だと思うんですが」

呻くが、ルピナスは「どうしてー？」と首を捻る。それに答えず苦笑して、彼は辺りを見回した。

花のベッドに、遮られない日差し。冷たい風を阻む木の壁。綺麗で安らぐ花たち。確かに、ここで眠るのは気持ち良さそうだった。夏や冬はともかく、春や秋はとても快適なように思えた。

「にしても、不思議なものですな」

人がここに来ない理由も、何故季節に関係なく花が咲いている理由も。理解できないという意味では『天国』とどっこいどっこいだった。

あそこは願いを叶えてくれる不思議な場所。

ここは季節に関係なく花が咲く場所。

「……誰が、こんな場所を作るんでしょうね」

答えが知りたいわけではない。ただ意味もなく呟く。その言葉に『問いかけ』としての意味を与えたのは、嬉しそうに体を起こして声を張り上げたルピナスだった。

「かみさまだよ！」

「……神様？」

また聞き返す。確かに神ならこれくらい作れるのだろう。作る意味があるのか——作ろうとするのかは、考えてもわかりはしなかったが。

嬉しそうなのは変わらず、声のボリュームだけを少しだけ小さくして、ルピナスは続ける。

「だって『天国』があるんだもん。天国にはかみさまがいるってむかし、お父さんが言ってたもん！ 絶対にいるって！」

子供らしい盲信だった。それを微笑ましく感じる反面、大人気な

いながらも神はいないと告げなくなる。その中途半端さから逃げるように、彼はルピナスに問いかけた。

「ルピナスは……神を、信じているのですか？」

答えは、予想していた通りのものだった。たった二文字の、だけどうしようもないほどに強固な一言。彼女は笑う。

「うん！」

その一言に、彼も笑った。

残酷なものだと知らずに無心に信じられている神を、笑った。

——ふと、何かがひび割れたような気がした。

（……？）

違和感だけが膨れ上がる。神。天国。その二つの違和感。

何故、神を残酷だと思ったのだ？

天国を作ったのが神だとするのなら——願いが叶う場所を作ったのが神だとするのなら。それを残酷だと評価するのはおかしいだろう。神は願いを叶えている。残酷でも何でもない。

なのに何故残酷なのだ？

（……わからな、い？）

確信はあった——神は残酷なのだと。なのにそれがわからない。その理由が見つからない。何かにひびが入っている。そのヒビが何に入ったヒビだったのか、よくわからなかったが。

「あ」

ふとルピナスが、何かに気づいたような声を上げる。思考を保留したままルピナスのほうを見ると、ルピナスはどこか遠く——花畑と森の境界を指差す。

「ねえ、トリトマ。あの花って何？」

そこには一輪、淡い紫色の小さな花が咲いていた。その隣には、藤色のこれまた小さな花。名前を聞いているのだろっ。そう判断して、彼はその花を思い出す。

「クロツカスと、アスター。春に咲く花と、夏に咲く花。花言葉は……」

言おうとして、言葉に詰まった。わからないわけではない。その花はよく知った花だった。よく知った花だったが故に、彼は言葉を詰まらせた。

「花言葉は？」

催促の声。突然言葉を詰まらせたこちらをいぶかしむように、ルピナスは眉を寄せる。それに苦笑して、彼はその答えを告げた。

「……『切望』と、『追憶』」

——私が、好きだった花。

寝静まった村。寝静まった民家。寝てしまったルピナスとルピナスの母。燭台に立てられた残り少ないろうソクが辺りを照らしている。その火では見える範囲も限られているだろう。その火に照らされた中で、その男は酒瓶とグラスを持って床に座っていた。

その男は、気楽そうにこちらに手を振り上げてくる。

「トリトマ。ちょっと付き合わないか？」

酒に、だろう。お酌をしるという事なのか、それともどっちが先に漬れるか競争しろということなのか。判断はつきかねたが、とりあえず彼は呻いておくことにした。

「……私、まだ未成年なんですけどね」

少なくとも外見は、の話だが。この村のルールがどうなのかはさておき、一般的にアルコールは二十歳を越えるまで体に悪影響を与えやすいのだという。とりあえず健康を気遣って拒否すると、彼はそれを笑うように言ってきた。

「未成年だからこそ、酒を飲んで大人を知るべきだと私は思うがね」
「……そういう考えが、子供に悪影響を与えるんですよ」

毒づく、男は喉を鳴らしてくつくつと笑う。何が面白かったのかはわからないが、どちらにしろ男はその手に持っていたグラスに酒を注ぎ始めていた。注がれていく液体は、どこか水とは違う光沢

を放ってグラスの中にゆっくりと落ちていく。

その最中、男は独り言のように呟いていた。

「長かったよ、本当に。時間にするならそう長かったわけでもないのだろうが……それでも、長かったと私は思う。旅立ってから帰ってくるの十数日。そして君と出会った一日。長かったよ……」

独白の終わりが、酒を注ぐことの終わりだった。酒瓶を隣に置いて、男は呟く。

「どんな言葉がいいか、ずっと考えていた。だが……やはり、これが一番似合う」

微笑んで。そして、彼はグラスを掲げた。

「この旅の終わりに……そして村の復活に、乾杯」

「ええ……乾杯」

杯はないが。それに苦笑しつつ、彼も呟く。それにまた男は笑って、グラスを呷る。心地よい沈黙が流れていく。数秒か、数分か。恐らく一分にも満たなかっただろう——だが、それでもその沈黙は長かった。

男は酒を呷りきる。空になったグラスに二杯目を注ぎながら、男はポツリと呟いてきた。

「どうやら、私の娘はもうお前に懐いてしまっているようだな」

「ええ……まあ、そうですね」

「嫁にはやらんぞ」

「歳を考えてから発言してください」

「……ということは、娘が年頃になったらいただくということか？」

「……前言訂正。歳の差考えてください」

子煩悩とはこういう人のことを言うのだろう。素直に笑う。男は対照的に慚然とした顔になっていた。それにまた笑ってから、彼は肩をすくめた。

「まあ、どっちにしろ私は彼女をもらえませんよ。帰らなければなりませんから」

あの場所こそが、自分の居場所だから。あの子を連れていくわけ

にもいかないのだ。

男はその言葉と共に酒瓶を止め、長い息を吐く。呆れとも苦笑ともつかぬ息だった。そしてそれと同質の声で、呟いてくる。

「あの宿へ、か。実は、それで一つ君に話したいことがあるんだ」
「話？」

首をかしげると、男はそれに苦笑する。

「この村で暮らしてみないか？」

どこか照れ隠しにも似たような苦笑だった。そしてそれに気づいてから――意味がわからず、ポカンとする。

「……は？」

「そう間抜けな顔をするな。そして言葉どおりの意味だ……この村で、私たちと一緒に暮らさないか？」

それを最後にまた酒を呷る。少しだけ開いた沈黙の間、彼はぼんやりと考えた。

この村で暮らす。それはこの上なく魅力的な提案でもあった。あの宿にしか居場所がない自分が、誰かと共に生活する。長かった一人の時間が終わる。あの生活から解放される。

それはとてつもなく魅力的な提案だった。

何もないけど、優しい村だ。それは知っている。村の中での生活は、きつと楽しいのだろう。誰かと協力して猟に出たり、食料を捜したり、農作物を作ったり。

それはきつと、きつと楽しいのだろう。

だけど、それ故に答えは決まっていた。だから、彼は頭を下げた。
「……申し訳ありません」

帰るべき、場所がある。それはここじゃない。だから、ここにいることはできなかった。

「そうか……まあ、君ならそう言うと思っていたよ」

酒を飲む手を止めて、残念そうに男は苦笑する。本当にそう言われるとわかっていたのだろう。残念よりも苦笑の成分のほうが強い笑みだった。或いは、それは苦笑というよりも諦観の笑みだったの

かもしれないが。

「まあ、いい……約束はもう果たした」

「約束？」

「君と別れたときに言った言葉だ」

言われて思い出した――聞き取れなかったあの言葉。砂漠に消されたあの言葉。苦笑を消した笑みで、男は天井を見上げて呟いた。

「帰って一段落着いたら、酒でも飲んで語り合おう、とな」

それが約束だったのか。そう小さく呟く。また、彼は頭を下げた。

「……未成年ですので」

「まあ、それは仕方ないさ。私としては、語り合えただけで満足だ」
本当に満足そうに、男は呟いてきた。それに彼も笑って。

そして、背を向ける。

「もう行くのか？」

「ええ」

「そうか」

お互い短く言葉を交わして、彼は歩き出す。男との関係も、もうこれで何もかもが終わる。

知っておきたかったことは知った。これがたとえ、嘘であったのだとしても。

これがたとえ、夢であったのだとしても。

あの人ならそう言っただろう。それだけで十分だった。

「達者でな」

もう二度と、会うことはないのだろう。それだけが真実だった。

「……………」

空には輝く真円の月。雲ひとつない星空。風ひとつない夜。花びらは舞わず、葉は囁かず。静まり返った花園の中央で、彼は空を見上げていた。

見覚えのない夜。それは彼が体験してきた夜の中で、もつとも静かな夜だった。この上はない。この夜にだけ、体験してきた全ての夜にはない、本当の意味での静寂があった。

音はない。自分が立てているはずの、呼吸の音さえ聞こえない。静寂は轟音のようであり、沈黙は騒音の様でもあった。音がないが故に、無音が何よりも耐え難い。

それでも彼は待っていた。

その手にあの花を――アスターとクロツカスを握り締めて。時間に余裕はない。帰らなければならないのだから。それでも彼は、来るだろう人物を待っていた。

「……あーあ。全部ばれちゃった」

そしてその声は、予想通りにやってきた。子供の声で。少女の声で。だけど、あの少女ではない声音で。背後からの声だった。そして振り向く必要のない声だった。

「何ではれちゃったの？」

その声の主は、問いかけてくる。それに答えるのは、何でもないことのはずなのに、何故か相当の労力を要した。

「……何もかも都合が良すぎたことと」

村は疫病に苛まれていて、だけど死人がゼロだったこと。

天国は願いが叶う、とつても幸せな場所。

なのに、宿を建てた理由だけは変わらなかったこと。

そして。

「……私と、あなたの名前」

「だよねえ。安直だと思ったよ、あたしも」

あの子の声で、誰かが笑う。

トリトマと、ルピナス。その花言葉さえ知っていれば、それで全てが終わったのだ。

切実な思い。

——そして、空想。

これは存在しない未来。

『アスター』を名乗った愚かな男が、それでも心の片隅で願った夢の形。

誰も死なず、誰も悲しまず、誰も不幸にならず。それだけを願って作られた、どうしようもないただの夢。

「でもさ。安直だからって、悪いことばかりじゃないと思うよ?」

その夢が、笑う。

「たとえこの世界が夢だったとしても、覚めるまで夢は現実だもの。そしてこの夢は覚めない。だったら、夢の中で眠ってもいいじゃない?」

悪魔が囁くように、謳う。

「いつかこの夢も終わる。だけど、終わった時には死んでる。つまり、あなたは幸せの中で死ぬの。それってすごくいいことじゃない? 苦しんで死ぬことよりも、悲しんで死ぬよりも、何倍も何倍もいいことだと思わない?」

謳うように、そのかしてくる。

「別にいいじゃない。あなたの現実に、あなたの幸せはなかったんだから。騙され続けた馬鹿な旅人を止めようとして、でも止まらなくて。仕方がないから全員覚えていようなんてさ。そんなの、どこに幸せがあるっていうの?」

そそのかすように、殺しに来る。

「あなたにとって、幸せって何?」

それは重いようで、とても軽い答え。

その答えを、『トリトマ』ではなく『アスター』が知っていたから。

だから、彼は微笑んで、告げた。

「——夢、ですよ」

今の世界の、ではない。こんな、毎夜のようにうなされ続けた夢とは違う。

。あの子を騙し続けてまですがりついた、偽りの絆が描かれた『夢』

あの輝かしき、八年間こそが夢だった。

だがもう、終わりを告げたのだ。もう、過ぎ去ってしまったのだ。「自分のことしか考えてなかった、その夢の中にあるものですよ」

『クロツカス』はもう、『アスター』の隣には咲かない。元々咲く季節が違うのだから。

咲いてはならないものなのだ。この手の中にある『夢』のように。だから、笑って『アスター』は『クロツカス』を捨てた。

「夢なんて……もう、終わったんですよ」

ひび割れた音。グラスに入ったガラスのヒビ。少しずつ少しずつ、夜空を覆っていく。

それは空気が絶叫するような、甲高い音を奏で続けた。

崩れていく。夢が終わる。もう終わっていた夢が、もう一度終わる。

背後の少女は何も言わなかった。彼も何も言わなかった。

ただ、全てが終わる別れ際。

良い夢をと、誰かと共に呟いた。

ありがとうと、彼は誰かに呟いた。

夢は、そうして終わりを告げた。

7 アスター！

7 アスター。

小さな体だなと、ふと思った。そのくせ、大きくなったな、とも思う。

その感情をなんと呼べばいいのかわからず、少量のこそばゆさと大量の虚無感を抱きしめる。風圧に動かされた霧が、少しだけ形を変えた。

「……どうやって、ここまで走ってきたのやら」

一心不乱に走り続けてたら、いつの間にか『楽園』にいたというのなら、苦笑するしかない。

霧はもうほとんど元に戻っていた——乗り越えた『試練』は、もう『試練』でも何でもないのだから。

クロは『楽園』の前で眠っていた。立ち込める麻薬の霧を前にして力尽きたのか、それともあの霧の『試練』に巻き込まれて、それでもここまで走ってきたのか。それは定かではないし、定かにする意味もない。

起こさず、アスターはクロの体を抱き上げる。息はある。安らかな寝息だ。怪我はない。本当に力尽きて眠ってしまっただけのようだった。それに安堵する。死んではいけない。麻薬を吸い込んだのかどうかはわからなかったが——いずれにしても、いつか起きるだろう。

そしてどちらにしろ、これで全てが終わりだった。夢は終わった。この騒動も終わる。クロを彼女に渡せば、それで全てが終わる。躊躇う理由も意味も必要性も感じず、アスターは踵を返した。

「待つがいい」

それを止める声が一つ。その声も予想していたものだった。現れるだろうと思っていたと言ってもいい——自分が『楽園』に介入し

た時点で、現れるだろうとは。

だからアスターは完全に振り向くことはせず、肩越しに背後を見やった。

そこに立っていたのは、どこにでもいそうな、ただの壮年の男だった。アスターが嫌いな男。自然と苛立つてくるのを感じながらも、アスターは出来る限り冷静に問いかけた。

「いつまで待てばいいんですか。私はあなたに用などありませんが」
「用なくば、ノコノコ出てなど来るものか。馬鹿弟子が」

「……破門したでしょう？ もう、貴方の弟子なんかじゃない」
吐き捨て、睨みつける。男はそれを涼しげな顔をして受け流す。
変わっていない。何一つ変わってなどいない。

嫌いな存在。その名を心の中で呟きながら、アスターは待つ。男の呟きは、そう待たずに聞こえてきた。

「我が贅を返せ」

「お断りします」

「その娘の夢を返せ」

「私の知ったことじゃありませんよ」

「我に齒向かう気か？」

「お望みとあらば」

全ての問いかけに拒絶を返す。拒絶されてなお、男は無表情なままだった——まるで、わかりきっていたといわんばかりに。その顔を、苛立ちを隠さずアスターは睨みつける。

睨み合う時間は、そう長く続かなかった。

「……ふん。ま、そんなところだろうと思っておったよ。貴様が馬鹿馬鹿しいまでに頑固なことなど、すでにわかりきっておったからな」

男は、仕方ないとも言いたげに肩をすくめる。それには何も言わず、アスターはただ黙って待ち続けた。本題はこんな、どうでもいいことではないだろう……

予想通り、男は苦笑しながら尋ねてきた。

「それで？ 貴様はこの後どうするつもりだ？」

「……どう、とは？」

「とぼけるのは感心しないな。貴様はもうわかっているはずだ……我に齒向かうという事の意味を」

しかも二回目だ——そう、忌々しそうに、だが楽しそうに男は笑う。

わかっている。誰に自分が齒向かっているのか。心底嫌いな相手に齒向かっているのだ。だから躊躇わず、アスターは告げた。

「ええ、わかっていますよ……神様」

天国に住まう、残酷な神。

こんなくだらない地獄を平然と作り上げ、それでも笑ってられる全知全能。それを睨みつけ、アスターは微笑んだ。

「貴方に齒向かうという事の意味くらい、言われなくてもわかっています。ですが、私にも譲れないものがある……」

「それがこの『天国』という存在と、貴様の『娘』というわけか……だが知っておろう？ それはただの偽善だと」

「ええ。ですが……その二つだけは、譲れない」

譲れるはずがないのだ。その二つだけは。

「ふん。貴様が『天国』に反対したときも思ったことだが……貴様は人間に近寄りすぎた。後悔しておるよ……貴様を、『天国』を知らせるための旅になって出させるんじゃないかったと」

「私だつて後悔してますよ……あの時、断つとくべきだったと。そうすれば天国なんて誰にも知られることはなかった」

それが過去の失敗だった。

その罪故に、アスターは『アスター』を名乗らねばならなくなつたのだ。

天国を作ったのが神ならば、天国を知らせたのは彼なのだから。

「……まあよい。二度も弟子に噛みつかれるとは思わなかったがな」
そこで一つ、神はため息をついた。つかれきつたような声で、人間のようにつてくる。

「人間に夢を見せるのもやめだ。低俗な夢を抱くものばかりで叶わん。人間への救済処置のつもりだったのだが……もはや救う価値もない」

それはつまり、天国がなくなること。

蟻地獄が、消えてなくなること。

——あの宿の、意味がなくなること。

「そうですか」

それにアスターは、ただそうポツリと呟いただけだった。

彼にとつての話はそれで終わりだった。だから、また歩き出す。

もう、この場所に用はなかった。

去る背中に、かけられた声が一つ。

「まだこちらに帰ってくるつもりはないのか？ 我が右腕よ」

答えは返さなかった。

帰るつもりがなかったから——ではない。

帰ることになるのがわかっていたから、答えるのも馬鹿しかったのだ。

もう、『人の世界』に『アスター』ストケシア』の意味はないのだから。

「……う」

痛い。

頭痛のようなものを感じて、クロは目を覚ました。

さっきまで夢を見ていたらしい——気分がいいが、どこか嫌な気持ちになる、そんな夢を。それがどんな夢だったのかは思い出せなかったが、何となく嫌な夢だったのだと思った。

甘ったるすぎて、まずい。そんな料理と同じ夢。何故か、その夢のイメージだけが頭の中にこびりついて離れない。それほど印象に残る夢だったのか……

わからない。とりあえず考えるのをやめて、彼女はゆっくりと目を開いた。

「……え？」

夜の森の中に、女の人の後頭部。どうやら自分は、彼女に背負われているらしい。だがわけがわからない。何故こんな夜に女の人に背負われて寝ていたのだろうか？

「あら、起きたの」

と、声が聞こえたのか、女の方は足を止め、肩越しにこちらの顔を覗き込んできた。聞き覚えのある声だった。というか、見覚えもある。

何故彼女が。理解よりも早く、クロは彼女の名前をぼかんと呟いていた。

「……リコリス、さん？」

「おはよう。気分はどう？」

「え、あ……いえ、悪くはないです、けど」

しどろもどろに返答しながら、クロは彼女の背中から降りる。それから慌てて辺りを見回した。見覚えのある森——今まで住んできた、名無しの森の光景。辺りは暗いが、現在地は大体わかる。

現在地は。脳裏に描いた地図と照合させてからクロは気づいて叫んだ。

「な、ちょ、どこ向かうとしてるんですか!？」

対するリコリスは、凝ったのか肩を回しながら、当然とでも言うように呟いてくる。

「どこって……外だけど？」

「いや、だから！ それでなんであたしまで——」

言ってから、はたと気づく。夢を見る前までのこと。何故夢を見ていたのか。自分が何をしたのか。彼が何を言ったのか……急速に何か冷えていくのを感じて、クロはポツリと呟いた。

「ああ……そっか。そういえばそうだった……」

逃げ出したのだ。捨てられたのかも知れないが。自分は逃げ出し

ただ——知りたくない真実を告げた、彼から。

今まで一緒に過ごしてきた八年間を裏切られて。結局、自分は彼にとつてどうでもいい存在だったのだ。いつ捨ててもいい存在。ただの気まぐれだけで、一緒にいただけの……

「……捨てられちゃったんでしたね、あたし」

少なくとも、そう取れることを言われて。それで望む夢を見せてくれるという、『天国』へと逃げ出した。なら、これは夢の続きなのだろうか。こんなわけのわからないものが、自分の望んだ夢だったのだろうか。

わからない。わからないが……涙はもう、流れてこなかった。泣くという行為を忘れてしまったかのように、泣き方がわからない。悲しいとは思うのだが、ただそれだけだった。

だって、捨てられたのだから。彼のことで泣くわけにも行かないだろう……

「何を勘違いしてるのか知らないけど……貴方が、いつ捨てられたつていうの？」

冷たい彼女の声は、やっぱりどこか淡々と響いていた。

「……………え？」

数秒呆けて、理解できずに聞き返す。彼女は今、何と言った？

（いつ捨てられたの……って？）

そんなの決まっている。天国に逃げる前の、あのダイニングでだ。彼はしつかりと言ったではないか。

——どうでもよかつたんですよ、あなたのことなんか。それは今でも変わらない……

何も言えずにいる間に、彼女はできの悪い妹を見るような目でため息をついてきた。苦笑と何かを足したような笑みで、言ってくる。「……ま、そう取られても仕方のない発言ではあつたんでしょうけどね。彼も無責任よね、何一つ弁解しないんだもの」

「……………どうということ、ですか？」

その言葉の意味が理解できず、問いかける。だが彼女はその問い

を無視して、逆に問いかけてきた。

「なんで貴方は『天国』にいないの？」

「……え？」

わけがわからない。呆然としたまま何も言えずにいると、彼女は苦笑したまま先を続けてきた。

「言ってることがわからない？　なら聞くわ……こんなわけのわからなくて、退屈で、今まで一緒にいた人から捨てられたっていう現実を思い知っているのが、貴方のいう天国なの？」

「……いえ」

否定する。それは天国じゃない。夢などではない。

なら答えは一つでしょと、彼女は笑ってみせた。

「結局のところ、貴方は助けられたのよ。文字通り天国に旅立つ前に、彼にね。実際よくやったもんだと思うわ……麻薬漬けで帰ってきたときは、人として大丈夫なのかちよつと疑問だったけど」

わからない。何を言っているのかわからない。

彼は自分を捨てたではないか。冷たく切り捨て、どうでもいいと行って捨てたではないか。

「先に言つとくけど……彼は、貴方を捨てるふりをして、私に託したのよ。貴方がどこまで聞いてたのかは知らないけどね」

「……アスター、が？」

なぜ？　彼は言つたではないか。自分のことなんかどうでもいいと。冷たく笑いながら、育ててくれたのは気まぐれだと言つたではないか。

なのに、なぜ？

「……少しは疑うつてことを覚えなさいよ。言葉を額面どおりに受け取るのも、まあ大切なことといえば大切なんだけど」

彼女は心底呆れたように呟いてきた。だが、その言葉の意味もうまく理解できない。聞こえていて、わかっているはずなのに、意味がわからない。空気の中でおぼれているような、そんな錯覚。

（……うたがう？）

その中で、ただその一言だけがずっと頭の中を回り続けていた。彼は常に不真面目のように見せていたが、それでも誠実だったのだ。嘘をつかれることも多々あったが——それでも疑う意味なんてなかった。何一つとしてなかったのだ。

ずっと、ずっと信じて生きてきたのだ。

八年間、笑いあって生きてきたのだ。

あの日、彼は死に物狂いで自分を助けてくれたではないか。

なら、何を疑えばよかったのだ。

常に不真面目なようで真面目だった、彼の何を疑えばよかったのだ。

——彼の何を、信じてやらなければならなかったのだ？

「ねえ、知ってる？ 『貴方」といると月が綺麗だ』 って言葉の意味。彼が貴方を助けに行くときに、その言葉をまねたことを言っただけだね」

おぼれている中で、彼女の声だけが凜と響く。いつの間にか伏せていた視線を上げると、彼女は優しく微笑んでいた。微笑んで、こちらの答えを待ち続けている。

クロは首を横に振った。

彼女は、その言葉をささやいた。

「——貴方を、愛している」

「……嘘、だよ」

「嘘で、死に物狂いで助けに行くと思う？」

何で今更そんなことを言うのだ。何で今更そんな悲しいことを言うのだ。

もう戻ることはできないのだ。もう全て終わってしまったのだ。

彼は自分を捨てたし、自分は彼を裏切ったのだ。

もうどうしようもない。もう何もかもが遅いのだ。

「なん、で、今更……！」

なのに何故、今更そんな悲しいことを言うのだ。
景色は歪む。その理由を考えるよりも先に、クロは彼女を見据えた。

濁った風景の中、彼女は笑っていた。

「まだ、戻れるからよ」

「無理だよ！」

拒絶してしまったのだ。

これ以上なく完璧に、彼の全てを否定してしまったのだ。
大嫌いだと、もう叫んでしまったのだ。

あのときの彼の顔を覚えている。笑顔でその言葉を聞いていた、彼の一瞬を覚えている。

その言葉の一瞬、彼は呼吸を止めたのだ。何かを耐えるように。痛みを堪えるように。

笑顔が凍りつくのを、見ていたのだ。

拒絶されたことに傷つくのを、しっかりと見ていたのだ。
もう、何もかもが終わってしまったのだ。

それを象徴するかのように。

——ふと、辺りが明るくなったような気がした。

「……え？」

「……あら、もう時間切れなの」

リコリスはどうでもよさそうに呟いている。視線はクロの背後——宿のあるべき方角を向いている。それを追うように、クロも背後を振り向いた。

「……え？」

赤い。

空が赤い。

空を照らす太陽ではない。月はあんなに明るくない。星はもともと大地を照らさない。

それでも、森は赤かった。

炎に、照らされていた。

「実を言うかね？　こうなる前に森を出ろって言われてたのよ」
突然の言葉に、クロはリコリスを見た。彼女は笑っていた――仕方ないでしょと言いたげに。

それは諦めにも、意地悪にも似た笑顔だった。

「……何を、知ってるの」

その笑みの理由がわからないまま、問いかける。問わなければならない気がしたのだ。

胸の中で、何かが焦げ付いている。焦っているのだと気づいたのは、胸の痛みを把握してからだった。

彼女は笑みを消さずに答えてきた。

「私も詳しくは知らないわ……彼が言うには、もうあの宿には意味がないんだって。だから燃やして……全てを、終わらせるんだって」
死ぬつもりなのかねと、彼女はくすりと喉を鳴らした。

「……なん、で？」

わからない。何もかもわからない。

何で彼が宿を燃やすのかも。

何で彼女が笑うのかも。

何で、あの炎を見るたびに胸が痛むのかも。

――なんで、心が痛いのかも。

「今戻れば、間に合うかもしれないわね」

その言葉が、何かを弾くのをクロは感じていた。それ以上何も考える必要はなかった。

ただ走り出していた。わき目も振らず、ただ一目散に。何も考えてなどいなかった。ただ走らねばならないと思ったのだ。

間に合わなければならぬ。あの宿が燃え尽きてしまう前に。

ただ、それだけが胸の中にあった。

彼女は追ってこなかった。

去ってゆく背中を見送って、彼女はふと苦笑を漏らした。

結局のところ、なんだかんだで選ぶのは当人なのだ。勝手に他人の幸せを願って託すなど、愚かしいにもほどがある。

現在地を思い出す――宿から歩いて、二十分。

実際のところ、宿からそう離れていないのだ。走ればすぐにたどり着くだろう。そのくらいの位置。別に、クロが起きたのが彼と別れてすぐだったというわけではない。

二十分歩いて、後の時間は立ち止まっていただけなのだ。こうなるだろうことを予想していたから。

それゆえの苦笑だった。その苦笑の中で、彼のことを思う。

天国が閉じるということを教えてくれた彼のことを。

そして何もかもを教えてくれたことを。

「私に任せるのが悪いのよ……大体、恋のキューピッドなんて、天使の仕事なのよ？」

自分の仕事は自分でしなさい。

そう呟いて、彼女は歩き出した。クロのことは待たなくてもいいだろう。

――どうせ来ないのだから。

まあ、とりあえずは。

「一人退屈に、大陸でも歩かせてもらおうわ」

天国はもうないという、土産話でも広げながら。

去り際、彼女は一度だけ宿のほうを振り返り、笑ってみせた。

「さようなら……末永くお幸せに」

誰も聞いてなんかいないが。それに苦笑しながら、彼女は歩き出した。

エピローグ

（エピローグ）

その熱を、彼は痛いと思った——熱いではなく。

木が爆ぜる音。壁が崩れる音。柱が折れる音。屋根が歪んでいく音。炎が燃える音。

それら全てを聞きながら、アスターはただその宿の前に佇んでいた。

炎が、闇の輪郭を払っていく。その代償として、八年間の思い出を殺していく。

彼を照らし宿を燃やす炎は、あまりにも綺麗な色をしていた。思い出が燃える色。そう考えれば、それは当然のことだったのかもしれない。

これでよかったのだ。燃える思い出を見つめて、彼はそう一人微笑んだ。

帰るべき場所がないと知れば、あの子はもう戻ってこない。帰るべき場所に誰もいないと知っているのなら、もうそこは故郷でもなんでもない。帰るべき思い出が汚れてしまったのであれば、それはもう思い出すのも忌避する記憶に成り下がる。

燃える宿は、炎に溶かされて崩れていく。

旅人からもらった、さまざまな生活用具。旅人から聞いた、さまざまな生活の知識。

旅人の思い出が、宿と一緒に溶けていく。

宿の燃える音がそれら全ての断末魔のだとしたら、それはあまりにも皮肉なことだった。

見殺しにした当の男が、形見ともいうべき最後の記憶を殺している。

断末魔から、彼は一度たりとも目を離すことはしなかった。

その断末魔を聞きながら、今度は言葉として繰り返した。

「これで……よかったんですよ」

思い出を汚したのだ。形となって残すほうがおかしい。

あの子は苦しんだのだ。そしてこれからも苦しむのだ——自分と一緒に見殺しにしてしまったということ。

そして何より、両親が死んでいるということを知らず、だまされていたということ。

それを忘れさせるために、わざわざ恨まれ事を言ったのだ。自分を恨めば、恨んでいる間だけはそのことを忘れられるのだから。

——パチリと、一度だけ火が爆ぜた。

八年間という思い出が消えていく。

痛いなど、もう一度だけ呟いた。

そして『彼女』のことを思った。

結局自分は、彼女を愛していたのかどうか。

愛していたとして、それは親愛だったのか、恋愛だったのか。

わからない。だが……それでも、大切だったのだ。

「……いや」

考えてから、彼はその考えそのものを否定した。

こんな汚れ切った男に愛されて、喜ぶ者なんていない。だから、

愛したという事実さえ誰も知らなくていい。

綺麗な月は、眺めているだけでいいのだ。手に取ろうなんて考え
てはいけない。

彼女を愛そうだなんて、思ってはいけない。

「……あの夫婦には、悪いことをしました」

頭を下げてでも許されたものではないだろう。あの子への嘘につき
合わせてしまったのだ。恨むのならば、恨んでくれればいい。それ
くらいのことはされてしかるべきなのだ。

ため息について、アスターは自分の足元に置いてあった花瓶を手
に取った。

ダイニングのテーブルの上に置いてあった、藤色の花の挿された

花瓶。奇跡的に壊されていなかった、思い出の品の一つ。

花の名は『アスター』。意味は『追憶』。ストケシアも、同様の意味を持つ。

そしてもう、意味のない名前でもある……

覚えていようと思ったのだ。天国を広めてしまった罪として。何年も何年も、ずっと。ただずっと、彼らと、彼らの願いを覚えていようと思ったのだ。

そのために自分は『追憶』を名乗ることにしたのだ。

だが、もう終わったのだ。覚えている意味はない。

自分が『アスター』ストケシア』を名乗る意味はなくなったのだ。だから、彼はささやいた。

「……もう、終わったんですよ」

ささやいて、宿の炎の中へと投げ込む。陶器の割れる音が、強く耳に残った。

アスターの花が、焼かれていく。自分の罰の先駆けとして。

宿が燃え尽きるまで、まだ時間がかかるだろう。一夜明けるまで燃えるか。それとも、明ける前に燃え尽きるか。

どっちでもよかった。ただ、何も残らないことだけを願った。

天使の止まり木亭。そう名づけた理由を思い出して、彼は笑った。燃えたプレートは、もう文字を判別できない……

「そのままじゃないですか」

天国へ向かう者のための止まり木ではない。自分が止まるための止まり木だったのだ。

歳を取らない理由。髪の伸びない理由——そんなの簡単だ。自分は人間じゃないのだから。

それが問題にならなかったのも、宿の主人としての身分があったからで。

ただ単に、覚えてくれる者がいなかったただけで。

「……なんだ。もともと一緒にいられるわけなかったじゃないですか」

種族が違うのだ。あの子と自分では。そもその話が、許されるわけがなかったのだ……

それゆえの夢だった。それゆえの浅はかな願いだったのだ。それに今更気づいたのか。

「……くだらない」

だが、もういいだろう。

最後に彼は背後を振り向いた——『霧』の『試練』に囲まれた『天国』への道。

もう誰も飲み込むことはないだろう。もう誰の願いも叶えることはないだろう。

何もかもが終わったのだ。何一つ問題なく。何一つ虚しいままに。宿が一際大きく壊れる音が響いた。つられて振り返る。

アスターの花は、既に消し炭になっていた。宿よりも早く、消し炭は崩れて消えた。

その光景が、何となく切なかった。理由はわからない。

ただ、苦しいと感じた。

もうアスターの花は、クロツカスの隣にはない。

「……まあ、それでいいですよ」

別れなんてそんなものだから。だから彼はため息をついて。

呼吸が止まった。

——クロが、息を切らしてこちらを見ていた。

「……………」

森の中を走って抜けてきたらしい。何回か転んだらしく、ところどころ土や血で汚れているようだった。ローズの姿はない。逃げてきたのか、そそのかされたのか。

炎の明かりが逆光となって、クロが今どんな顔をしているのかわからない。

沈黙は長かった。どれだけの時間がたったのかもわからない。ただ宿だけが、その断末魔を響かせていた。

やがて口を開いたのは——彼だった。

「なんで、戻ってきてしまったんですか」

どんな顔をしてそう言ったのか。自分の表情さえわからない。
ただ辛いと思った。

わざわざ嫌われてまでクロが旅立つよう仕向けたのだ。わざわざ
絶望させてしまったのだ。わざわざ知らせなくていいことまで知ら
れてしまつて。

無様に、死なせてしまいそうにもなつて。

それでも、いい終わりを描けそうだったのに。

「……なんで、あのまま行ってくれなかつたんですか」

問いかけても、クロは答えない。何も言ってくれないし、何もし
てくれない。

夢はもう終わった。終わってしまったのだ。ならばもう終わらせ
なければならぬのだ。幕は閉じた。ならばもう、続けてはならぬ
い。

彼女が傷つかないように。これ以上傷つけないように。

そう、最後に願ったのに。

「……………」

クロは何も言ってくれない。ただ無言で立ち尽くすだけ。
もう終わったのだ。

何度も何度もそう繰り返す。終わったのなら、続きがあつてはな
らないのだ。だから彼は、また自分を抑えて笑った。

「もう、私に付き合う必要はないんですよ……だから」

だから。その先に何を続けようか迷つて。

結局、彼は身勝手な思いを口にした。

「ここから離れて……幸せになりなさい」

「……………」

その言葉に、初めてクロは反応を示した。一度だけビクリと……
まるで、怯えるように肩を震わせた。それにどんな意味があつたの
かはわからない。

わからないが——それでも、もう名を捨てた『彼』にとってはそ

れが最後の言葉だった。もう何も言う言葉が思いつかない。そしてもう、何の言葉も意味を持たない。

だから、彼は逃げるように視線を彼女から逸らした。

聞こえてきたのは、砂利を踏みしめる音。それは歩き出した音だった——ここから立ち去るための音。

それでいいと思った。彼女のことを思うのなら、それが正しいのだと。だが、その反面苦しくもあった。その苦しさから逃げるように、目を閉じる。

今日で終わったのだ。

彼女との関係も、宿の主人として生きること、『アスター』であることも。何もかもが終わって、後はただ神の下へと帰るだけ。ずいぶん長い『旅』だったものだ。

ずいぶん楽しい生活でもあり、ずいぶん辛い終わりでもあった。

これはただ、それだけの話。

足音が消える。もうどこにも、彼女の姿はないだろう……そう信じて、彼は目を開いた。

「アスターの……」

予想は簡単に裏切られた。

目の前。視線を下ろしたすぐそこで、彼女は手を振り上げていた。

「アスターの、バカあー!」

叫びは聞きなれたもので。やってきたのは、いつもどおりの衝撃だった。

響いたのは、パンと乾いた痛い音。いつもどおりの、痛いビンタ。

それきり、また沈黙する。何秒も、何十秒も、何分も。

何を言えいいのか。何をしてやればいいのか。わからないままに、ただクロを見つめる。

長い長い沈黙の中、ようやく彼はポツリと呟いた。

「……もう、終わったんですよ」

「ならまた始めればいい」

そう言つて、彼女はまたビンタする。痛みはなかった。力強くも、速くもなかった。

ただ、笑い出したくなるくらい、その言葉が痛かった。

クロは笑わない。ただじっと、こちらの顔を睨んでいる。何を思っているのか。やはり彼女の顔は逆光で、何も見えないままだつた。「聞いたよ……リコリスさんに言つた言葉。『愛している』」つて、そういう意味の言葉を言つたつて」

「……………」
何かを言わなければならない——この少女を自分から遠ざけるような何かを。

これ以上不幸に付き合わせるわけにはいかないのだ。これ以上自分につき合わせて不幸にさせるわけには。だから必死に、必死になつて言葉を探す。

だけど。何かを言うよりも早く。

「……あたしは、アスターと一緒にいる。許してくれなくてもずっと、ずっと一緒にいる。今まで見たいにずっと、ずっと……！」

彼女はそう言つて、アスターに抱きついた。力強く、ぎゅっと。

「遠ざけたりなんてしないで」

その力強さに戸惑つた。そしてその意志の強さに、驚いていた。

「愛してるのなら、遠ざけたりなんかしないでよ！」

愛しているからこそ、遠ざけたいのだ——そう言おうとして、彼はやめた。

「私は……貴方を不幸にしますよ」

「構わない」

「……私というと傷つくことになる」

「そんなの知つてる」

「私は不誠実な男です」

「それでも」

クロは、全てに断言した。

「それでも、愛してる」

またぎゅつと抱きしめられる。

その暖かさが、何よりも愛おしくて。

この少女が、ただ愛おしくて。

流れた涙をぬぐわずに。

「……………」

彼は、彼女を抱きしめ返した。

——『名無しの森』の深奥に『天国』と呼ばれる場所がある。

何十年前のことだったか——それはもう誰も覚えていないが。かつて、そんな噂が流れた。誰が言ったのかも、誰に言ったのかもわからない噂。

名もなき大陸の、いたる町や村でその噂が流れた。

大陸の中央には『名無しの森』と呼ばれる森があり、その森の中央に、なんでも望みを叶えてくれる場所があると。

それから程なくして、何人もの旅人が生まれた。町や村、森や集落。そんな場所から、誰もが『天国』を目指して。

それから何十年も経って。天国はもうないのだと、一人の女性が告げていった。

だが、真実はわからない。真偽がわかる者はいない。

夢だけが、延々と一人歩きをしたかのように。噂だけがずっと残り続けて。

求める者はそれでも消えない。時々、誰かが思い出したように天国を目指す。

そうして彼らは、森の深奥でそれを見つけた。

世にも美しい、季節を無視して咲き誇る花園と。

一人の青年と少女が経営する、小さな小ぢんまりとした宿を。

彼らは、旅人を迎えてはこう言うのだという。

——ようこそ。新しき旅への休息場……宿『天使の止まり木』亭
↑

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2280r/>

虚偽楽園

2011年3月2日23時25分発行